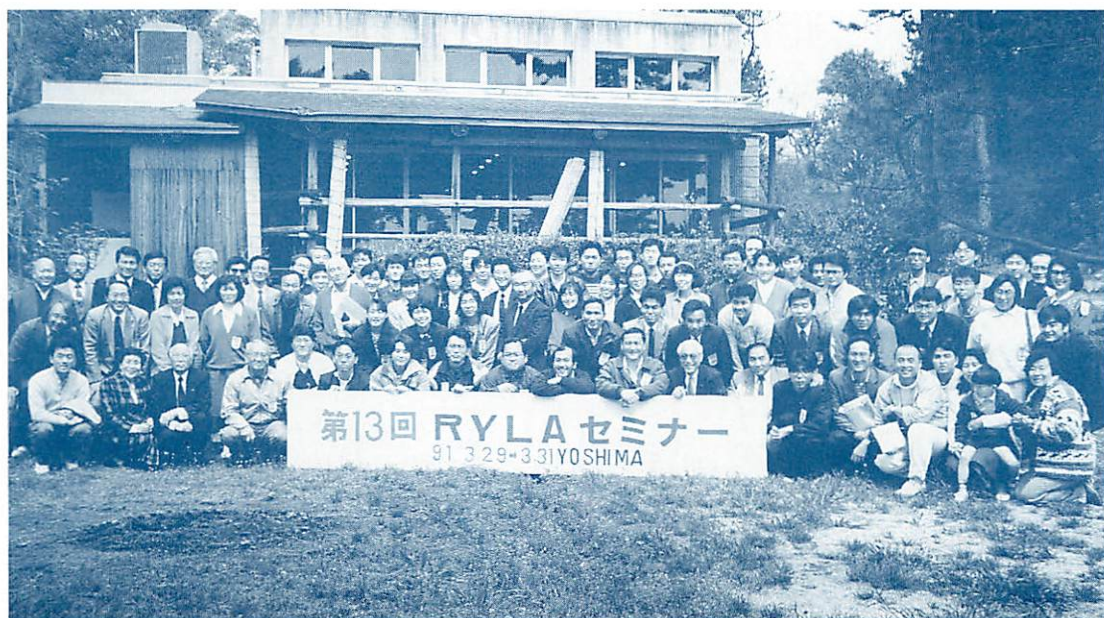


第13回RYLAセミナー報告

HOME COMING RYLA



HONOR ROTARY
WITH FAITH AND ENTHUSIASM

も く じ

発刊によせて

ライラ開講式挨拶	橋 本 憲 佳……………	1
或る視点	深 川 純 一……………	7
人生から〈問われた者〉	安 平 和 彦……………	9

セミナースケジュール

講 演

私の人生観	梶 浦 暉 一……………	13
21世紀をになう諸君たちへ	今 井 鎮 雄……………	20

パネルディスカッション

オープンフォーラム

参加者感想文

生活の断片

あ と が き	古 谷 武 雄……………	122
---------	--------------	-----

発刊によせて



ライラ開講式挨拶



国際ロータリー

パストガバナー 第267地区

橋本 憲 佳

皆さん今日は、このライラは今回で13回目を迎える事になり、今回は初めての試みとして、昨年までのライラの終了生だけを対象とした Advanced course が開講される事になりました。嘗てのライラ受講生のOBだけによる研修会となる訳です。当時大方、大学生であった皆さんも、今や夫々の職場に於いて、第一線で活躍しておられる方々ばかりの集まりであります。中には、早や、ロータリアンになられた方もおられます。従って、このようにお見受けするところ、年齢的にもかなり開きがあるように思います。

でありますから、本日より3日間行われるこの研修会は従来のライラとは、かなりその趣を異にした、ハイレベルのものとなる筈であります。

さて、そこで、私も昨年度は青少年奉仕に最重点を於いて活動をしてきたガバナー(本年度は直前パストガバナー)としてこの貴重な機会をお借りして、私も皆さんと共に色々の問題に取り組んでみたいと考えております。先ずその手始めとして、現在の社会の中であって、その中核的存在として活躍されている皆さんは常日頃どのような考えの下で活躍されておられるのか、ごく大雑把にしか掴めないとは思いますが、取り敢えず先程お配りしたこのアンケート用紙に記入して頂き、これを一つのよりどころとして今後のライラセミナーの在り方について考えてみたいと思うのであります。

このところ、どこへ言っても四六時中環境問題が論じられるようになって参りました。それ自体極めて大切な問題であり、又、今や一刻を争う程に緊急を

要する事だと思えます。と言う事は即ち、我々人間の現在の生活そのものを大きな反省の目(まなこ)をもって見直さなければならない時期が来ているのだと言う事であります。物によっては、もう既に手遅れになってしまった事柄も数多くあるという事は皆さんも十分ご承知の筈です。

例の湾岸戦争勃発、そして、停戦以来1ヶ月を過ぎた今も尚、イラク国内でのあの内乱状態。彼等一般国民の生活はこの平和そのものの日本の国に生活している人々には、到底想像もつかない悲惨な状態にある事を思う時、本当に我々は、一体彼等の為に何をしてあげることができるのか、と自分の無能さを嘆き、又、腹立たしく思うばかりであります。我々と全く同じように、この運命共同体である地球上に生を受けたあの人達が、あのような、到底人間の業とは思えないむごたらしい残虐な大量殺戮を受け、人間として到底許す事のできないあのような自然破壊。これらは将に大自然に対する完全な挑戦であり、勿論我々人類に対しての大逆転であります。このような悲惨な同胞が生地獄さながらの状態にさらされている一方で、我々日本人だけが、何不自由なく、只管暖衣飽食、贅沢三昧の生活を送っている現状を目の当りにする時、果たして自分達だけが、このような贅沢な振る舞いをしていて良いのだろうか、といううしろめたさと、何時までこのような生活が続けられるのだろうか、という大きな不安感とがこの頭の中を過って来るのです。

『人は環境の子なり』と申します。人間という者は、否、ひとり、人間に限らず、この世に生きとし生けるもの、生ある全てのものは環境次第でどのようにも変化するものである、という事を、ここで改めてじっくり考えて頂きたいと思うのです。極端な例で、必ずしも適当な例とは言えないかも知れませんが、その例を二、三あげてみましょう。

皆さんは、多分、大学時代に心理学で習われたと思いますが、今から丁度50年前の1941年にデンバー大学とエール大学の二人の教授によって発表された、インドに於いて狼に育てられたアマラ、カマラと云う二人の少女の記録です。二人は夫々別々の狼に育てられたものですが、2年乃至7年の間、狼と共に育てられた結果、人間としてはあり得ない狼独特の本能とも言える習性、例えば、腐った生肉を好んで食べるとか、真夜中の一定の時刻に起き出して狼の群れの

中に交じって啼き交す行動、というような、狼特有の習性まで身につけ、全く狼そのものの生活を営んでいた、と言う事実。もっと古い話では、孟母三遷の教え、又、ソ連の化学者ルイセンコの実験によると、同じ種類のミジンコを夫々異なった環境の水槽で飼育したところ、この両者は全く異なった種類のミジンコになってしまったという報告を、私は随分昔、何かの本で読んだ記憶があります。事程さようにすべての生命体はその生命を維持していくためには嫌でもその環境に適応して変化させていかなければならないのであります。常に、その環境に適応していけないものは、その時点でその種族は滅び絶えてしまうのです。勿論、我々人間としてその例外ではあり得ません。人間として立派な環境の中で育てられていく場合と、その反対に劣悪の環境の下で育てられていく場合とでは、そこに計り知れない程の相違が生じて来るのだという事があります。人間の事ですから、勿論例外はありましようが、それはここでは論じません。

いつの世にも必ず言われる事、『今時の若い者は全く何を考えているのかさっぱり分からん』と。この辺の事情は私が今までお話した事を考え合わせて頂ければ十分に納得して頂けると思います。それは、育った環境、即ち、その時代、教育等によって、夫々がお互いに大きく変わってきているからであります。別の言い方をするならば、その時、環境になったものを、如何に説明してあげても、その理解の範囲には自から限界があると言う事があります。事と次第によっては、永久に分かつては貰えない物もあるでしょう。よく話せば分かる、と言いますが、果たしてそうでしょうか。

ではここで、物事を理解して貰うと言う事が如何に困難な事か、その事例を一つあげてみましょう、その例としては必ずしも適当な例とは言えないかも知れませんが。

今ここに、地球外からの訪問者、Alienに、人間の生命にとって欠かす事のできない食塩という物質を説明しようとしします。私はその日のために、辞典で調べて見ました。

その頁にはこのように説明してありました。その始めの所だけ一寸読んでみましょう。『それはナトリウムの塩化物で、無水物は岩塩型の無色の結晶。

化学式はNaCl、分子量は58.44、融点約800度、沸点約1,440度』等と70行にもわたって説明してあります。

どうですかエイリアン諸君、食塩とはこのような物質です。分かって貰えましたか。

恐らく、このような理論的な説明を幾ら詳しく説明してあげても、こと食塩の味については、永久に分かっては貰えないでしょう。然らば、どうしたら分かって貰えるのか。それは極めて簡単。それは、ここで、ごく少量なめて貰うだけで、その味は完全に分かって貰えるのです。実際に味わって貰う以外は手はないのです。このように、すべての事象は、自分が経験した事以外は絶対に分かっては貰えないと言う事なのです。

幸いにして明晩は皆さんと我々ロータリアンとが一緒になってバズセッションをする事になっておりますが、お互いに話し合ってどの程度まで相互理解ができるか、大いに期待し、楽しみにしているところであります。

最後にもう一つ、現在も尚、この地球上の多くの国々で続いている飢餓の問題について、この機会に皆さんに是非理解し、考えて頂きたいと思います。

先程は湾岸戦争による多くの犠牲者達の事を話しましたが、また一方では、今、このように話しをしている最中にも、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ等々70カ国以上に亘る国々では、1分間に34人(2秒で1人)の割で、『慢性飢餓』のために、次々に死んでいっているのです。

この割で計算しますと、1日に約5万人、1年で1,300万~1,800万人の人間が餓死しているのです。私の住んでいる高知市の人口が約33万人ですから、この規模の都市の人口が1週間と経たない中に、どんどん消えて無くなってしまっている勘定です。

どうですか皆さん、我々と同じ人間の尊い生命がこの地球上で、あのような悲惨な状況の中で次々に、然も、大量に失われているという事実。単に戦争だけではなく、このような不幸な人々が周囲の国々に、我々の到底想像すらできないほど沢山存在しているという事を知っている筈の我々日本人が、この情報化時代に『僕にはそんな事は無関係だ』『私はそんな事は知りません』と言って済まされる問題でしょうか。如何ですか皆さん。

ところが皆さん、何と云う事でしょう。このような悲惨な人達が我々の周囲に数限りなく存在している事実を百も承知している筈の我々日本の国民は、来る日も来る日も、暖衣飽食の中、やれグルメだ、やれレジャーだ、等と、己れの楽しみを追及する事だけに生き甲斐を感じ、これら悲惨な同胞達には見向きもせず、唯々太平極楽の夢をむさぼっている。

湾岸戦争が起きるや否や、『戦争は悪だ、戦争を止めろ』とあって盛んにデモをやっていた人々がおりました。戦争が悪いこと。戦争は悪だ。それ位の事は子供でも知っている。何故戦争が起きたのか。そして、侵略されたクエートの人々が今どのような残虐な殺戮行為を受けているのか。今彼等を助け、侵略を止めさせるには具体的に何をどうすれば良いのか、そのためにはどのような手段、どのような行動を取らなければならないのか、という事を十分に認識した上でのデモであったか。私は、彼等の行動を大きな疑問を持って見ざるを得ませんでした。

この人達には、今も尚、1分間に34人の割で死んでいる飢餓地帯の現状がどの程度に認識されているのか。これだけで情報網が発達し、地球が狭くなった今、近隣諸国にこのような悲惨な状態が続いている以上、この日本だけが、そんな他国の事は知らないよ、と言って、このままあの悲惨な人々を放っておくことが許されるのでしょうか。

戦争がない事だけが平和ではないのです。あれ程騒いでいたあのデモ隊の人達にこそ、次にはこの種の問題について真剣に取り組んで貰いたいものだと思うのです。

さあ、皆さん、21世紀はもう直ぐそこに来ています。我々の今までの経験と、そして新しい世紀を生きる皆さんの責任ある行動とによって(インディアンの伝説によると)子孫から借りているのだというこの地球上のありとあらゆるものを健全なる姿で子孫にお返しできるよう、あらゆる努力をしていこうではありませんか。

この意味に於いて、話し合ってもお互い、中々理解し合う事は難しいのではないかと思っている我々高年齢の者達と若人の皆さん方とのギャップを幾分なりとも埋めていきながら、出来得る限りお互いの理解を深めたいという私の切

なる願望から出て参りましたこのアンケートに是非ともご協力をお願いしたいのです。

記入はこれから3日間行われるセミナーの後で結構です。

紙面を見て頂いたら分かりますように、順位が1位から12位まで書いてありますが、各項目を必ずしも12位全てに振り分けて記入する必要はありません。異なった項目でも同じ重要度と判断すれば、それらと同じ順位に記入しても一向に差し支えありません。では、どうぞよろしくお願い致します。

《平和》とは

広辞苑によれば、①平らかにやわらぐこと。②戦争がなくて世の中が安穩であること。と最初に書かれています。

1988年11月6日から3日間、広島に於いて開催された、国際ロータリー第1、第3ゾーン平和会議に於いて採択された《平和》の定義は下記の通りである。

『平和』とは、単に戦争のない社会。という事だけでなく、お互いに信じあい、助け合い、苦しみや差別や、そして、貧困や疫病のない社会。この実現こそ真の世界平和である。

国際ロータリーの定義『ロータリーは人道的奉仕を行い、あらゆる職業において高度な道徳的水準を守ることを奨励し、かつ世界における親善と平和の確立に寄与することを目指した、事業および専門職務に携わる指導者が世界的に結び合った団体である。』

従って、上記、定義の中の『平和』はこの意義をもつものである。

或る視点



R.I.第268地区

ガバナー 深川 純一

皆さんお元気ですか。HOME COMING RYLA はいかがでしたか？
今にして思えば、時間が少し足りなかったかな、とも反省しております。しかし、あれだけの所要時間としては、まず密度の高い良質な討議が出来たのではないかと思います。

HOME COMING DAYS としてのあの三日間、余島に帰ってこられた皆さん達を見て、それぞれの地域社会で立派に活躍されていることを実感し、大変頼もしく思いました。

その地域社会は、現象的には時々刻々変貌していきました。科学技術は常に進歩し、人口も資源も自然環境も年々変動します。そして、二度と元には戻らないのであります。即ち、

一つの技術が進歩すれば、たとえその技術がなくなったとしても、進歩以前の状態にもどることはありません。何故ならば、一つの技術が進歩すると、それ以前の技術は要らなくなって消えていくからであります。したがって、私達現代の人間には、算用数字を使わずにソフィア寺院の構造計算をすることは出来ませんし、近代的な道具なしにインカの石積みを築くことも出来ないのであります。

人口や資源についても同じことが云えます。一旦増加した人口が急減すると、年齢構成が変わるので元の社会に戻るわけではありません。また、普及した資源が枯渇すれば、それ以前とは違った惨めさが残ることになります。

これから10年先、20年先、そして30年先の地域社会、それは、皆さん達がその中枢となって生き抜いていく社会であります。その社会の変化を予見し、その対策を考えておくことは、リーダーたる者の責務でありましょう。皆さん達が、知性を結集し、知恵を交換しながら、地域社会に指導性を発揮されんことを祈ってやみません。

最後に、悲しいお知らせをしなければなりません。

神戸垂水ロータリークラブの元会員高木正徳さんが去る8月7日この世を去られました。高木さんは、このRYLAをはじめの起動力となった最初のRYLA委員会(R.I.第268地区)の委員であり、第6回RYLAまで委員として御尽力下さいましたので、御存知の方も多いと思います。長らくボーイスカウト兵庫連盟理事長の要職をつとめられ、その生涯をボーイスカウトの育成に捧げられた方であります。

因みに、この最初のRYLA委員会は、今井鎮雄先生(神戸西)、山村徳太郎さん(西宮)、田中健一郎さん(神戸)、高木正徳さん(神戸垂水)そして私(伊丹)の五人編成でありました。ここで、今井先生の御指導により、このRYLAの基本構想が決められたのであります。

御逝去の約一ヶ月前、私は、高木さんから久しぶりに一通の便りをいただきました。そこには、RYLAのことについて次のように記されておりました。

「余島は私にとって思い出の地であり、そこでライラの取りもつ御縁で先生に親しくさせていただいたことは、生涯忘れることができません。余島の石尊^{アオナ}が緑に変わる、そして桜の蕾がほころび始める頃、私達は、未来を背負う若者の成長を念じつつ、夜遅くまで彼らと話合ったことが今でも私の心をゆさぶります。私の生涯のドラマの一頁に焼きついています。……」と。

第一回RYLAの時、山の上のカウンシルリングで、暴風の中でキャンプファイヤーを焚いて下さったことが、実に鮮明な印象として私の心に残っています。誠に誠に惜しみてもあまりある人のごぞいました。心から御冥福をお祈り申し上げますと共に、謹んでここに御報告申し上げます。

では皆さん、何よりも健康第一、呉々も御自愛下さいませよう、また、いつか、どこかでお目にかかれる日を楽しみに致しをります。

人生から(問われた者)



ディーン

安 平 和 彦

(姫路RC)

Home Coming RYLAは如何でしたか？ 旧き良き友や新しい仲間と存分に語り合われたことと思います。いろんな職場で、いろんな困難に立ち向かっていらっしゃる皆さん方の姿に圧倒される思いでありました。

私は、開講にあたり、柳田邦男氏の著作「死の医学への序章」のなかからいくつかの言葉を引用し、ガンを宣告され死に直面した多くの人達が、むしろ逆にその人の人生においていちばん輝き高揚して、最後の瞬間まであくまで人間的に生き抜こうとしていることを書いておきましたが、柳田氏は同書の別の箇所、アウシュヴィッツ強制収容所で奇跡的に生き残ったヴィクトール・E・フランクルの体験記録「夜と霧」のなかの次のような言葉を引用しております。

「ここで必要なのは生命の意味についての問いの観点変更なのである。すなわち、人生から何を我々はまだ期待出来るかが問題なのではなくて、むしろ人生が何を我々から期待しているかが問題なのである。そのことを我々は学ばねばならず、また絶望している人間に教えなければならない。すなわち我々が人生の意味を問うのではなくて、我々自身が問われた者として体験されるのである」、「人生は我々に毎日毎時間を提出し、我々はその問いに正しい行為によって応答しなければならない」「かかる考えは我々を救うことのできる唯一の考えであった。何故ならばこの考えこそ生命が助かる何の機会もないような時に、我々を絶望せしめない唯一の思想であったからである」

柳田氏も指摘するように、明日、いや今日にもガス室に送りこまれるかもし

れない囚人たちにとって、人生から何かを期待しようと思えば忽ちにして絶望に陥る外はありません。しかしながら、極限状況における真の生き方とは、そうではなくて、自分が最後の瞬間まであくまで人間的に生き抜くことによって逆に人生というものに応えるのだ、という認識、すなわち自分は人生を問う者ではなく、人生から〈問われた者〉なのだ、という認識にフランクが立ち至ったとき、その精神的境地がホロコーストの極限状況を生き抜く支えになったとされているのであります。

この境地はまさに「たとえ世界が明日終わりであっても、私はリンゴの樹を植える」境地に相通じるものであります。

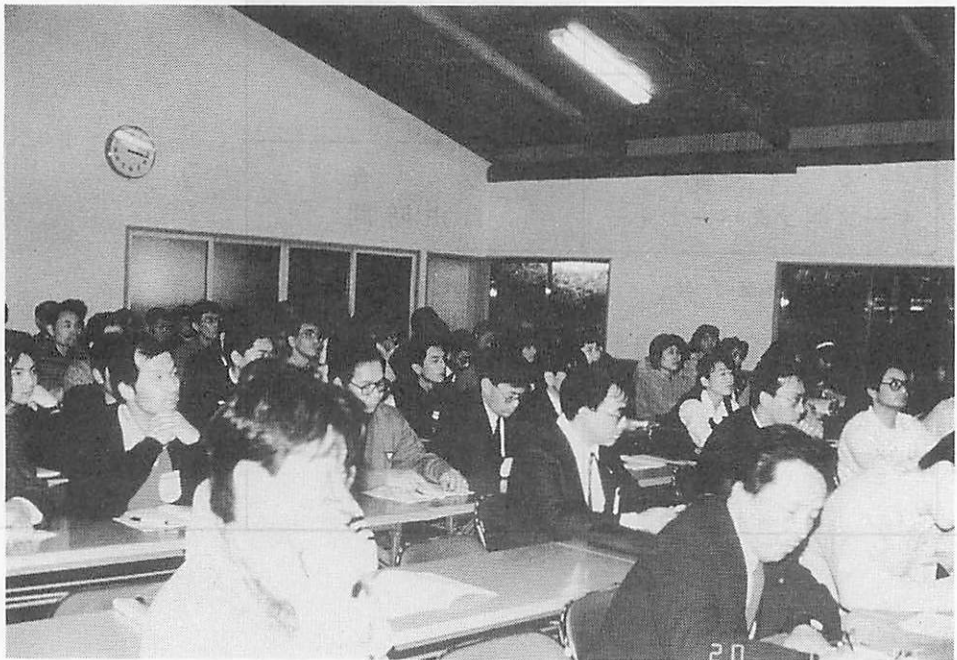
凡人である私などにはとても及ばぬ境地であります。それゆえにこそ、我々を深く感動させるものがあると言わざるを得ません。

皆様の御活躍をお祈り申し上げます。

セミナースケジュール

	3月29日(金)	3月30日(金)	3月31日(金)
8		朝食	朝食
9			
10		講義 (今井PG) (梶浦PG)	オープンフォーラム (深川G)
11			
12		昼食	閉校式 昼食
1			
2		レクリエーション	記念植樹 離島
3	開講式		
4		パネルディスカッション (執行PG)	
5			
6	夕食 オープニングパーティー	夕食 自由時間	
7			
8	キャビンタイム	バズセッション	
9		グループに分かれる	
10		キャビンタイム	

(金)日13月8	3月30	8月29日(金)	
食 時	講 演		8
スティーブ・マコーナ (深川 G)			9
先 校 閉 食 時	講 演		10
南 謝 念 堂 高 講 義			11
	レクレーション		12
		大 講 堂	13



私の人生観



R I 第267地区

パストガバナー

梶浦 暲 一

76年間の私の人生観が皆さんにご参考になるかどうか、私は化石人間ですから皆さんと価値観が違うかも知れません。その所はお許し願ってお聞き取り頂きたいと思えます。

私は昭和28年にロータリーに入りましたがそれからは38年間一度も休む事なく毎週火曜日例会に出ています。と言うのはロータリーには「頼まれてNOと言うなよロータリアン」と言う掟があるわけです。ロータリーに入ったら必ず何かの役割を与えられるわけです。責任があるわけですから休むわけにいかないのです。1週間ごとですから病気をしている間がないわけです。おかげでロータリーに入ったが為に私は今日までたいした病気もせずに来ました。ロータリーでは1業種1会員の中でお互いにお話し合いをする中で自己研鑽に務めるわけなんです。人間は先ず自己の事を考えます。ロータリーでは自分さえよければいいのではなく、ロータリーで得た親睦のエネルギーを世の為、人の為にお分けすると言うのがロータリーの行き方なんです。従ってロータリーの目的は、業種の違う人から色んな話しを聞いて井の中の蛙にならず広い視野を持つようになる。要するに人格を形成し、実力を涵養すると言う事です。この心を高めた状態をSERVICE 或いは奉仕の理想Ideal of Serviceと言うわけなんです。私は外科医です。医者と言うのはプロフェッションで、患者さんの為にお金持ちでも貧しい人でもお年寄りでも子供さんでも関係なく、唯人間関係をよくして早く病気を直して社会復帰をして頂くのが我々の目的なんです。医者と言うのは金儲けを頭においてはいかんです。私は大阪の天王寺中学を

卒業していますが、中学3年の時に先輩の医者が来まして「医者になる奴がおるやろ。しかしこれから医者になるんなら金儲けを主体にして医者になるんならやめとけ」こう言われたんです。私は4歳の子供の時に川に溺れて一度死んでいたのですが、それを通りかかった人が水を吐き出させて助けて下さった恩恵を受けました。それからキリスト教の幼稚園に行き、愛の精神を叩き込まれ、それが私の人生にとっての大きな柱となっております。地球上に53億の人間が住んでおりますが、人間の持っている人格の尊厳或いは生命の大切さはみんな平等です。こんな気持ちで今日まで来たわけです。従って心に一つもしこりが残らないわけです。

1. 天下の人の与に陰涼とならん

これは4、5年前にここに講師に来て頂いた松原泰道と言う禅の大家が書かれた「禅語百選」と言う本にこの言葉があったのです。これはロータリー精神と全く同じなんです。言葉の表現は違いますが、ロータリーはServiceと言います。Serviceと言う言葉は宇宙の森羅万象の建成発展を司っておられる神の秩序に個人が従うと言う意味があるのです。だから世の為、人の為に思いやりの心を持って対人関係をよくしてお互いに助け合おう、それがServiceの意味なんです。「天下の人の与に陰涼とならん」と言う言葉の起こりは、黄檗と言う禅の大家がおられ、この黄檗の弟子に臨濟禅師と言う人がおられたんです。黄檗の下で修業していた臨濟はどうしても開眼出来ず未熟だと言うので師の元を去って自分で修業しようとしたわけです。その兄弟子が密かに師の黄檗に「あの男は純粋な男で見所がある。将来悟りを開いて天下の人の為に必要となる様な1株の大樹となって人の為に陰涼となるでしょう。」と言ったのです。その後臨濟禅師は修行を積み禅の大家になった。

天下の人の与に陰涼とならんと言う言葉は私に非常に好きなんです。大樹と言うのは英語ではNurseと言いますが、旅をした人が直射日光を受けて非常に暑い時、大樹の陰に入った時に涼しい憩いの場となり、又その下で若木や若花芽を育てると云う意味があります。看護婦さんは体や心を病む人の為に日夜努力して1日も早く回復する様に患者の為に尽くしております。保母さんも子供

を中に包容し、愛情を持って日常生活をしておられます。皆さんも折角余島に
来られたのですから心だけは大樹になって少しでも世の中の人の為にお役にた
つ人になりたいと言う目的を持って頂きたい、これが私の第1の願いです。

2. わたしがやらねば 誰がやる

今やらねば いつ出来る

これは私が1983年にブラジル、サンパウロに行きました。そこは愛媛県から
移住して先没された方の慰霊塔があり、その地下室に等身大の比較的新しい
白木作りの観音像がありました。「この観音像はどなたの彫刻ですか」と聞か
れますと岡山在住の平櫛田中作だと言う事でした。私は出発前に先輩から松原泰
道師のテープを頂いてこれを聞いてブラジルに行ったのですが、そのテープに
は平櫛先生は「わしがやらねば誰がやる。今やらねばいつ出来る」と言いなが
100歳を超えてまだ現役で彫刻しておられたと言う事が話されておりました。
私はまだ1度も見たことがなかった平櫛先生の仏像を異国で見て大変感激をし
ました。道元禅師が中国に修行に行かれた事がありますが、その時日本から椎
茸を沢山持って行かれました。船着き場に禅の高僧が椎茸を買いに来られたの
で「あなたの様な偉い方がわざわざここまで仕入れに来る必要はないでしょう。
若い修行僧にやらせたらどうですか」と聞かされたそうです。「他はこれ我に
あらず」他人がやった事は私がやった事じゃないんだと言われたそうです。又
日中暑い最中、みな弟子は休んでおりました。ところがその高僧は一生懸命に
椎茸を干しておられるのです。「こんな暑い時にあなたの様にお年を召した方
がそんな作業をされなくてもいいんじゃないでしょうか。少し涼しくなってか
らやられたら如何ですか」と聞きますと、「今やらねばいつ出来る」時は待
ってくれないよと言われたそうです。そこで道元禅師も目を開いて「なるほど
その教えの通りだと言う事で日本に帰えられて曹洞宗を開かれました。

一人では何も出来ないが一人が始めなければ何も出来ない

その一人となろう

自分の事を言っておかしいかもしれませんが、このRYLAにしても1978年
8月17日に当時ガバナーだった私は香川県の長尾ロータリークラブに公式訪問

に行きました。それは土曜日で翌日は休みなので、かねてからここ余島に今井先生がキャンプ場を開いておられる事を友人から聞いており、一度余島を見学させて頂いてロータリーの青少年奉仕のRYLAを開かせてほしいと思い、小豆島ロータリーの当時の会長であった三枝さんに電話をしたわけです。そうすると神の恵みで「今井先生が今来てますよ」と言う事で日曜日に喜び勇んで参りました。そして先生と色々お話をしたわけです。先生の方でもRYLAをやるうと考えておられたので意気投合、丁度1970年までは同じ地区だった兵庫と四国でありますし、私と同期の執行ガバナーは大学の後輩でもあるのでびったり意気があって「よし！ やろう」と言う事になったんです。青少年育成と言うのは我々ロータリアンに与えられた大きな任務で、「ロータリアンは青少年の模範となれ」と言う標語があって、到らんものですがそのつもりでやったわけです。聖書の言葉に「神の御心にそって、神の御業を行うのに何故神は見捨て賜うか、必ずや協力者が現われるであろう」と言う教えがあります。志をもって発起したら神はタイミングをピシット与えてくれます。私の76年の人生の中でタイミングと言うのはいつも与えられていて、有り難いなと思っています。与の為、人の為に役立とうと言う意味を持てば神は必ずそのチャンスを与えて下さる。それは76年の間の経験で身をもって体験しております。従ってロータリーは心を磨いて純粋な心をもって、世の為、人の為に少しでもお役に立つのが我々の使命なんですね。ですから団体奉仕もやりますけれども非常に個人奉仕を主体にしています。一人が始めなければ何も出来ない、神は必ず助けて下さる。こう言う気持ちを持てば皆さんの人生も必ず開けて来ると私の体験から申し上げます。

生きることは分かち合うこと

貧しくとも心豊かに

岩村昇先生がこの言葉を我々に教えて下さっています。岩村さんと言うのは1961年から18年間ネパールで結核予防、栄養改善の為に一生懸命働いて来られた方です。そして後にタイにも行かれ、結局30年間奉仕活動に打ち込まれた方です。1981年サンパウロのロータリーの国際大会で第1回の国際理解賞を日本人として世界で始めて受けられたのです。第2回目はローマ法王ヨハネ・パウ

ロ2世です。岩村先生は宇和島市の出身で岩村後援会があって毎年青年をネパールに送り、今は植林やトイレ作りの奉仕を行っています。ネパールでは日本の明治時代と同じような貧しいけれども小さい子供も皆が助け合って生活しています。貧しいとかお金持ちとかそんな事は関係ありません。人間は心です。その心で生活をすれば実業の社会においても、専門の社会においても心豊かにServiceの精神を自分の本心にしておりますので常に心が豊です。思い思う事はありません。毎日が楽しいのです。この様な皆さんに会うチャンスにも恵まれるわけです。生きると言うのは天の恵や地の恵、友人の恵、全てに生かされているわけです。その事を思えば自分だけがいいというのではないのです。生かされている感謝の心をもって心豊かに日常生活を送る。そして自分に与えられた仕事を一生懸命やる。心を磨き精神統一すると言う事はみなさんの一生にとって非常に大事な事なんです。RYLAでは皆さんで互いに話し合いをされて、少しでも人間らしい心を養うと言うチャンスを与えられています。

人には出来るだけの事をしよう

たった1度の人生だから

年々怠らず善き友と交わり 神に従い

精進して自分を作っておこう

春風吹き来たとき

春雨降り来たとき

芽をだすことも出来よう

これは坂村真民さんと言う農民詩人の詩のいいと思う所を私が並べたものです。坂村さんの「念ずれば花ひらく」と言う碑が日本の各地に建てられているそうです。人生訓にして頂ければ大変有り難いとおもいます。

誠実、寛容、没我、親切、質素、人類愛

こう言う心を作っていないと前記の坂村さんの言葉のような事は出来ません。しかし心で思っただけでは駄目なんです。実行が伴わなければなりません。ロータリーは実践哲学なんです。例会で心を磨いてそしてその心でもって生活する。社会生活、職業生活、国際生活、家庭生活全てに適用し実践する。だから個人奉仕、個人の実践が大事だと云われています。

Money is but a measure of value.

Selfishness is the unenlightened self destruction.

Service to others is the enlightened self interest.

He profits most who serves best.

(Arthur Frederick Sheldon)

これは1921年のエジンバラのロータリーの国際大会でロータリーに奉仕哲学を導入してフレデリック・シェルドンと言う方がスピーチされた1節です。

お金と言うのは確かに大切で、お金がなければ生活は出来ません。しかし金に執着して守銭奴になるなよ。適正な利得を得るようにしなさいよと言うのが彼の主なる考え方です。経済的に繁栄すると自分さえよければいいと言う気持ちになりがちです。そんな気持ちで職業生活、日常生活をしていれば自己破壊になり生きがいのない人生を送る事になるんだよと言う意味です。自分1人で生きているのではなく、自然の恵、父母の恵、総てによって今日生かされておるんだと言う感謝の気持ちで他人に対して自分に出来るだけの事をする。奉仕をする事によってその人は非常に生きがいのある立派な人生を送る事が出来る。今までに申しました事の繰り返しなんです、こう言う事をシェルドンはエジンバラで言っております。ロータリーでは寛容と言う事を非常に大事にしています。自分の心が豊かでなければ人に対して寛容にはなれません。1911年にロータリーの機関紙The National Rotarianが出来ました。当時全米に16のロータリークラブが出来ていて、その連絡調整する為の雑誌を作ると言う事で出来たものですが、最初の巻頭論文にロータリーを作ったポール・ハリスが「合理的なロータリー的なものの考え方」と言う題で述べておられますがその根底は寛容であると言う事です。ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿ると言う事です。またロータリーの親睦と言うのは単に酒を飲むと言う親睦ではないのです。毎週1回の例会に集まって意見交換をし、お互いに他の業界の知識を得ることによって井の中の蛙ではなく広く物事を考えられる人になろうと言う事です。最近ヘリコプター人間になろうと言う事を友人が言いました。頭を早く回転させ高い視野から見られる人間と言う意味だそうです。人生経験から友人から聞いた色々な事、本や学校で学んだ知識を蓄積して、そして横の連絡をば

っとつける事が出来るように、奉仕のチャンスが与えられた瞬間にぱっと回転して発想が出来るように。その為には高い次元で物事が見られるように広い視野を持っておらないといけません。要するに心を磨いておかなければなりません。ポール・ハリスも言っております。「知性を磨くと言う事は自分に対しての或いは世界に対しての責任である。」親睦から奉仕の心を学び、そしてヘリコプター人間となって、世の為、人の為に働こう。職業人としては倫理基準を高めよう。

ロータリーでは四つのテストと言うのがあって

真実かどうか。 偽りがあってはならない、心にやましい所があってはいけない。

みんなに公平か。 人を別け隔てしたり、人を犠牲にして自分だけがよければいいと言うような気持ちは公平ではありません。

好意と友情を深めるか。 言葉・行動によって対人関係がうまくいくかどうか。

みんなの為になるかどうか。 これは我々みんなが守っている四つのテストなんです。

1932年にハーバード・ティーラーが作った標語です。これを私達は守っているのですが、要するにロータリーは心に人間性を宿しなさい。そうすれば信用、信頼と言うものが与えられる。そして世の中にお役にたてる人間になる、それがHe Profits MostのProfitsの意味なのです。商売でもあの人は信用があると思ったらお客さんはやはり来てくれます。医者でも同じです。私自身はいつまでたっても貧乏医者ですけれども、直って喜んでくれている患者さんは私の宝です。だから心はいつも平穏です。世の為、人の為という事を皆さんも考えておやりになったら皆に慕われる信用のある人間になれる。今国際情勢も非常に複雑です。しかし人間としてこの世に生を受けたのですから、皆平等であるという気持ちで日常生活を送って頂いたら、必ずあなた方の人生は豊かなものになると、自分の経験から信じております。どうかこのチャンスに色々な方々とお話しをし、人間としての心を磨いてほしい。それが私の願いなんです。

21世紀をになう諸君たちへ



R I 第268地区
パストガバナー

今 井 鎮 雄

今回のRYLAは、これまでの12年間に参加された方々のリユニオンを兼ねて開かれることになりました。これには私たちの課題と希望が込められています。その一つは、受講生の皆さんのフォロー・アップについてです。RYLAに参加し、共に学び、その意義を理解された皆さんがそれぞれの地域に戻り、その後どのように活躍しておられるのか。ロータリーが力を注いでいるこのプログラムから社会へ立派な人を送り出すことができているかということ、主催者であるロータリアンも考えたい。あるいは、一人考え込んでいる人がいるなら、もう一度ここに集まって皆で一緒に話し合ってみよう。また、現場で新たな問題を見出した人々がともに考える機会を持とう。そういう場を作りたいと思い、今回は“Home Coming RYLA”であり、アドヴァンスド・コースとしました。ですから、ここでは皆さん方により高い問題意識をもっていただきたいと思ひますし、あるいは毎年大きく変わる世界の状況を提示して、私たちの考えていることが時代と共に動いているかどうかを検証していきたいと思うのです。

世界の日本、アジアの日本

皆さんもご存知のベトナムのベトちゃんとドクちゃんの、身体の状態のよいドクちゃんに義足を付けて歩けるようにしてあげたいと、私の友人で医師の沢村誠志先生が3月の初めにベトナムへ行きました。帰国した次の日に会ったの

ですが、「ベトナム、ドクちゃんは日本でこんなに騒がれ、新聞にも取り上げられているが、義足を付けに実際にベトナムへ行ってみると、なんとベトナムには彼らと同じような子どもが大勢いるんです。身体に奇形を持って生まれた子どもたちはごみ箱に捨てられているような状態です。それを見たとき私は、日本からたいへんな費用をかけて最新の近代医学と最高の材料でドクちゃんの足を付けてあげるのが本当に全体としていいことなのか、それよりたとえ木製でもいいからベトナムの人に作り方を教え、自分たちで作ってもらって、こんなに大勢いる子どもたちが少しでも歩けるようにしてあげるほうがいいのか、わからなくなりました。日本へ帰ってきて新聞に書かれれば書かれるほど、苦しみが大きくなります。現実を見たとき、私自身も含めて世界と日本が協力するということを、一体日本人はどう考えているのだろうかと思ひました。アジアの福祉を考えることは、やはり日本の責任じゃないかとひしひしと感じたんです。」

また、以前RYLAの講師をして下さった関西学院大学の田中国夫先生は、昨年11月からアメリカの地域社会における人間の意識についての共同調査をするためにミシガンに行かれ、3月に帰国されたのですが、「えらいことでした。湾岸戦争が始まって、日本はいったい何をしようとしているのかと言われて、私は小さくなっておりました」と話しておられました。私たちが日本で何もせず、じっとしている間にも世界は刻々と動き、状況は常に変化しています。時代の動きに対して日本人は鈍感過ぎるのではないのでしょうか。

兵庫県のロータリークラブが、世界社会奉仕活動の一環としてフィリピンのある小学校のために井戸を掘り、小学校のどの蛇口からも水が出るようになりました。子どもたちは自分で作った日の丸の旗を振りながら、私たちの仲間に「僕はこれから勉強するよ!」と言ったそうです。それを聞いた委員長の田中さんは、涙がこぼれて仕方がなかったそうです。彼らの目の輝きに比べて、日本の子どもたちの中には、立派なランドセルを買ってもらっても「勉強せんとあかんのか」と積極性が見られない。

世界のいろいろな状況を見ると、貧しくとも苦しくとも青年たちが生き生きと夢と希望を持っているのに比べ、日本はこんなに豊かな生活をしているのに、

青年たちが将来に希望を持たずにいることを考えると、私たちはいったいどうすればいいのでしょうか。

かつてRYLAの講師をして下さった岩村昇先生がロータリーの第1回国際理解賞を受賞されたとき、東南アジアの草の根の人たちの教育を考えようとPHD運動を起こされたのは、ご存知のとおりです。ところがフィリピンやネパール、スリランカなどから来た青年が、日本の農村の青年とどうすれば米がたくさん取れるかという話しをしたときに、悲劇というか喜劇というかこんな話が出ました。日本の青年は「化学肥料をこれだけ使ってこうするとこれだけの収穫がある」というと、スリランカの青年は「私たちはそんなものは使わないけれど、もっと収穫がある」。化学肥料を使わないでそんなに収穫できるはずがないと考えた日本の青年が詳しく話を聞いてみると、やはり立派な収穫があがっているようだ。日本の青年にはショックでした。するとスリランカの青年は「あなたたちは農家の仕事を片手間にやっている。私たちは命をかけてやっているんだから、たくさん取れるのは当たり前だ。日本でお米が取れなくなったら私たちが送ってあげるから、そんなに心配しなくてもいい」と言ったそうです。あるいは、ネパールやスリランカの青年たちに、日本で習得したことが帰国後どれくらい役に立つか聞いたところ、5%そうだそうです。自分の村にない化学肥料や機械の使い方を教わっても役に立ちません。もう少し簡単で実用的なことを習うほうがいいと、大豆で豆腐を作ったり、鮎を飼うことを学んで、私たちの蛋白源ができた、喜んで帰っていきます。

このように考えると、世界、特にアジアの青少年が出会っている状況と、日本の青少年が出会っている状況は、同じ世界の流れでもどこかでずれ違っているのではないのでしょうか。ともすれば私たちは自分が現在置かれている立場と視野の中だけで物事を考えてしまいがちですが、本当にそれでいいのかどうかをここで考えて見たいと思います。

もう一つ、日本が直面しているいくつかの問題があります。これを少し歴史を遡って考えてみましょう。明治の終わりから大正にかけて、中国が新しい国を創ろうとしていたときの指導者に、有名な孫文という方がいます。この方は日本へ18回も来ております。今でも中国の国父と呼ばれ、中国本土のみならず

台湾でも尊敬されています。彼が神戸の当時の第一高等女学校の講堂で行った「王道か霸道か」と題する講演の中で、「私は日本が好きで、日本の知識と技術を頼って何度も日本に来ている。日本が王道、すなわち世界のことを考えてこれからの世界と付き合い、アジアと一緒に生きてくれるならば、私たちは日本を中心とした新しいアジアの世界ということを考えたい。しかし、もし日本が霸道を求め、自国の利益だけを考えるなら、私たちは日本と戦わなければならないと思っている。願わくば日本の皆さん、私たちの指導者の一人として王道を歩んでほしい」という話しをしています。

また、インドのタゴールが来日したとき、「日本はアジアの中で西欧化した国である。ヨーロッパ諸国を見習ってきた国であるが、近代化はしていない」と言っています。私たちは「西欧化」を「近代化」と同義語のように思っていました。タゴールの言葉の真意は何か。それは、日本人は西欧風の服を着て、西欧風なしゃれたことを言っているが、本当に大切な西欧近代の精神を学ぼうとせず、表面を真似ているだけではないか、と問いかけているのです。

このように、アジアの立派な指導者が、アジアの中で日本の問題を鋭く指摘しています。そして今日の指導者も同じことを悩んでいます。いいかえれば、日本はこんな国になったんだとはっきり言う自信を持たないといけない。ある意味で日本の政治の混乱が今の社会に反映しているのではないかと思います。私たち日本人は「どう生きるか」という哲学を持っていないのではないか。国益はあっても、他者の痛みをとともに感じるという生き方がないのではないか。湾岸戦争後の処理についてもいろんなことが問われていますが、このような状況に対処するにあたって、将来の方向とか問題意識を明確に持っていないというのが、日本人の困惑であり、悩みであります。私たちが今後どのような生き方をするのかを、真剣に検証する必要があります。ですからあなたがた青年諸君には、世界がどういう方向に歩もうとしているのかを、ぜひ考えていただきたいと思います。

歴史の曲がり角に立って

1972～73年あたりから、世界は急激な変化を始めました。日本に環境庁がで

きたのが1971年です。それは何故か。1960年頃には池田首相が「経済のことはこの池田にお任せください」と言い日本の経済復興に努力をしました。この人は日本が経済的に成長するためには貧乏人は麦を食え、と物議をかもしたこともありましたが、またヨーロッパへ行ったときに嘘か誠か、ドゴール大統領から「トランジスタの行商人が来た」と皮肉られたそうです。その結果、日本の経済は1960年から70年頃にかけて高度成長を遂げましたが、同時にいろいろな社会問題が指標となって現われてきました。

工場が大きくなるにしたがって排出する煤煙で喘息に苦しむ人々が出てきました。四日市喘息などがそれです。また工場排水による熊本の水俣病、あるいは富山のイタイイタイ病が大きな社会問題となったのもこの頃です。若者たちが「経済成長のために何か大切なバランスを崩しているのではないか」と言いだして、大学の教授たちを糾弾したのもこの頃です。いろいろな公害が現象として現われてきて、はっきりとはわからないが経済成長の裏側に人間に対する大きな問題が現われてきたのではないかと気づき始めたのがこの時代です。そのために遅ればせながら総理府の中に環境庁が生まれ、環境問題について考えることになりました。1972年に世界で初めて環境について考える国連人間環境会議がスウェーデンで開かれました。それから20年、経済の成長と人間の幸福はどのようにバランスを取り、どう生きればいいのかについていろいろな方面からの模索が始まりました。昨年(1990)「地球の日(アースデイ)」が、20年を記念して世界的に大きな行事を持ったのを、皆さんも覚えておられるでしょう。

急激な経済の変化を促えて的確な指摘をした人にアルビン・トフラーというアメリカの学者がいます。彼は1970年、80年、90年と10年おきに3冊の本を書きました。それぞれ『未来の衝撃』、『第三の波』、『パワー・ソフト』ですが、このうち『第三の波』は世界に大きな影響を与えました。お読みになった方も多いでしょうが、簡単に申し上げますと、これまでの人類の文明は三つの波になって現れました。まず第一の波は農耕文明です。それまで人類は狩猟・採集民として食糧を求めて移動生活をしていましたが、栽培を覚えて定住を始め、人間が他の人間と共に住む社会を創り、やがてその社会を支配する文化が生まれました。文化とは、一つの社会の価値の体系をいいます。そこから家族制度が生ま

れ、家族が多いほど農耕の生産が上がり、皆が豊かに暮らせることを覚えました。また村をしっかりと守って、村の長老を中心に一生懸命に仕事をすればよその村より豊かになることがわかり、村の秩序が生まれました。農耕文明はこのように人類に最初に現われた文明であり、今でもこの農耕社会は続いています。

第二の波は今から250年ほど前に起こった産業社会、人間が道具や機械を使って産業を行うようになった社会です。イギリスを中心としてオランダあたりが発展してくるわけです。この産業社会が出現するにしたがって、人間の生活構造は大きく変化しました。蒸気を利用して機関車が造られ、汽船が造られ、大きな紡績機が造られました。ちなみに1868年に日本は明治維新であり、それまでの幕藩政治から天皇制へと移行しました。革命が起こったといえましょう。この革命がなぜ起こったかという、実は産業社会という社会の波に触れたからなのです。日本にはない蒸気船がやって来て貿易を迫りました。日本の役人たちは文明の進歩に驚き、協調しなければしかたがないというので、5つの港を開港しました。そして日本の産業社会が始まったのです。西欧近代の場合、この産業社会の基底にはデモクラシーという思想やキリスト教という精神文化がありました。マックス・ウェーバーが有名な『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を書いたのは1905年、ちょうどロータリーの生まれた年でした。ロータリーもまた産業社会が人々の生活に反映した中で生まれた組織の一つです。こうして第二の波、産業社会が現れたのです。

さて、産業社会では工場をつくりますから、人は都市に集まってきます。つまり都市化、工業化という現象が始まるわけです。農村であればたくさんの方が一緒に住む大家族制度がよかったのですが、産業社会になると都市に住むようになります。大家族が移動するのは困難ですから夫婦二人が子どもをつれて都会へ出てくることになり、核家族化が進みます。このことでもわかるように、社会構造の変化が連鎖的に人間の状況を変化させていきます。農耕社会ではおじいさんやおばあさんのやっていることを見て、そのとおりにやればよかった。ですから「学ぶ」ことは「真似ぶ」ことでした。ところが産業社会では新しい知識や技術を習得していかなければなりません。そこで教育の構造もまた基本的に変わってきたのです。

トフラーは、1980年に、今や私たちの社会の産業構造は再度変わりつつあるといったのです。これを脱産業社会、脱工業化社会と呼びました。これが少しずつ進展するうちに、その中心となるのは情報であることがわかってきて、情報化社会と名付けられました。これらが『第三の波』でトフラーが述べた大きな問題点です。

今皆さんが混乱を感じ、私が先程から問題点を挙げているように、1988年から1990年にかけて時代が大きく動き、産業社会から情報化社会へと脱皮していくときに、どちらの方向に舵を取ればいいのかわからないのが、今の日本ではないだろうか。そのために青年諸君も目標をさだめられずにいるというのが現在の状況でしょう。しかしそれでは困るのであって、21世紀を担う皆さんへの願いは、主体的にこの状況を受け止めてほしいということです。人類の歴史の中で今非常に激しい変化が起こっていることは、今のトフラーの話でもおわかりいただけたと思います。

さて、トフラーは昨年(1990年)の12月に日本語訳の出た『パワーシフト』の中で、「21世紀に向けて、力と富と知識の間でパワーシフト(権力の移行)が起こりつつある」と書いています。彼は第一のパワーはまず戦力(暴力)であるといっています。戦争に勝つことこそが世界を制覇する大事な力でした。次に産業社会が形成されると、富さえあればなんでもできる、富が自分たちの国や社会にとってなにより大事だと、富の追求が行われました。それでは1868年以降西欧化を始めた日本は、世界の列強に取り込まれないためには、強い軍隊と豊かな富を持つことが一番大事だと、明治の人々は「富国強兵」を目指しました。そしてトフラーは、情報化がますます進展するこれからの社会は、知識や情報が新しいパワーとして重要になるだろうと言っています。

では新しい社会をどう捉えればよいのでしょうか。京都大学東南アジア研究センターの矢野暢氏は、世界を考えるパラダイム(認識の枠組)が変わったとして、三つのパラダイムを挙げておられます。第一に、イデオロギーの対立がなくなるということ。産業社会は自由と民主主義を基本とする考え方に立ちますが、一方で平等・公平を大事にする考え方を中心とした社会主義社会、つまりソビエトを中心とした社会主義国家はすべての国が公平にという論理のもとに

一つの体制を作りあげてきました。アメリカやヨーロッパ諸国を中心とする社会は、自由で民主的な社会こそ人間に活力を与えると考えました。1917年にソビエト社会主義共和国連邦が成立して以来、世界は社会主義と民主主義に大きく二分され、それぞれの体制が軍備を強化し、核を作りました。やがてこの両体制の間に入って、社会主義体制にも西欧側にもくみしない非同盟諸国が現われました。この中にはインドやスリランカ、あるいはアラブ諸国も入っていますが、西側にも東側にも偏らない国々で、これを提唱したのはインドネシアのスカルノ大統領でした。

冷戦が始まり東西両陣営は鉄のカーテンで仕切られ、互いに軍備を拡張し続け大量の核爆弾を保有するようになると、平和とは簡単にいうとアメリカとソビエトが喧嘩をしないこと、軍備を減らすことであって、もし核戦争が起きれば世界中が吹き飛んでしまうという不安が長い間ありました。しかしソビエトではもはや社会主義は経済体制を支えることができず、経済の世界では公平ということではうまく機能しないとわかると、ゴルバチョフはレーガンと対話を始め、経済面で互いに協力しようとするなど、米ソのにらみ合いは終わり、危機は回避されたと認識されつつあります。

この影響は様々なところに現われています。この2年の間にベルリンの壁が崩壊し、東欧諸国がそれぞれ独立し、またソ連の中にある15の共和国が独立を目指すという状況になってきた時代にあっては、この大きな対立の認識を変えなくてはならないと、矢野教授は言っています。

第二のパラダイムは、主権国家が力を失っていくということです。主権国家とは政府があり、権力があって、国民がいて、領土がある。そこで国ができ、それを国家と名付けるわけです。それを主権国家といいます。世界の国々はギリシャ、ローマの時代からありますが、主権国家として定着してきたのは近々100年ほど前のことです。いいかえると産業社会が現われてから後に、そのような国家が生まれて来ました。日本では1867年に大政奉還が行われるまではいくつもの藩に分かれていましたが、明治になって主権国家として統一されました。ドイツもイタリアも、日本の明治政府が出来上がったところに主権国家として統一されています。ソビエトも同じです。今から百数十年前に現われ始めた

この主権国家が、今崩れつつあると指摘されています。1987年くらいからこれまでの間に主権国家それ自体の概念が崩れ始めて、民族国家や種族を中心とする小さな文化がもう一度見直されるようになりました。

第三は、概念としての一つの文明の崩壊、いいかえるとヨーロッパ文明の崩壊。第一文明を考えていた世界の考え方。近代化といえはそれはヨーロッパ化であり、ヨーロッパ文明こそが唯一の文明であるという錯覚。いい物は何でも舶来だと、ヨーロッパを見習おうとした明治の人たちは、一つの文明の仕様、価値体系の仕様をヨーロッパ文明に置き、その他の文明は取るに足りないとみなしたようですが、しかしこういう考え方が崩れ始めました。民族国家を見ると、そこにはそれぞれ独自の文明と文化があります。その大事な文化を見つめ直そうではないかと、アラブ文明、アジア文明などが見直されるようになってきました。「ものさし」が多様化したということです。

少し整理しますと、第一にイデオロギーの対立が無意味なものになりつつある。第二に主権国家という国家形態こそ大事だと思われていたけれど、人間一人一人の問題を考えると民族とか単一の国をもっと大事にしなければならなくなった。第三はヨーロッパ文明を文化の体系として最も上位にあるとした概念を見直す時期にきた、ということです。情報化社会を迎えるときに、私たちはこの三つのパラダイムを考えておかねばなりませんよ、と矢野さんは言っておられます。大事なことは、これまでの認識の枠組みから脱皮しなければならないということです。では一体どんな新しい枠組みで文明、価値の体系を作り変えればよいのかが問われるようになったのが、現在であります。

新しい社会づくりをめざして

朝日ジャーナルの2月の臨時増刊号をお読みになった方もおられると思います。編集長の下村満子さんは永くアメリカにおられた、見識のある人として今注目を集めています。女性がこのような固い雑誌の編集長を勤めること自体画期的ですが、彼女は企業の社会的責任を企業の製品の優秀性や効果によって計るのでなく、もっと違った次元の「ものさし」を提示しました。どの会社が社会的に立派かという指標を作ったのです。これには日本の大きな企業100社に

アンケートをとり、返事の返ってきた70社が掲載されています。

このような考え方が生まれたのはごく最近のことです。経済成長が大事か、地球が大事かを考えるようになって、ロータリーにも子孫から預かっている地球を大事にしようという考え方が生まれてきました。あらゆる天然資源は無限、という考え方を見直す運動が起こって来ました。4月に「地球の日」がありますが、去年世界中で動員されたのは2億人とも言われます。この人たちは、自分のことだけとか自国の利益だけを考えるのではなく、みんなで地球を大事にしようとしたのです。アメリカでは1989年にアリス・テッパー・マーリンという人が、買い物をするなら、よりよい世界を目指している企業で買おうと、“Shopping for a Better World”という小さなガイドブックを作りました。企業の社会的な責任を中心とした11の尺度を作って表にしています。この本はものすごく売れました。これをもとに下村さんが行ったのが、企業の社会貢献度調査です。これはロータリーにも関係してきます。ロータリーでは「職業奉仕」といわれ、自分の会社さえ儲かればよいというのではなく、自分たちの職業を通して地域社会を支えていこうという考え方です。

下村さんが作った尺度は、たとえば企業の寄付については、寄付金額を税引き後の当期純利益と寄付金額の和で割った数値で、企業が自らの利益の何パーセントを社会に還元しているかを判断の材料としています。あるいは、平等な社会を創るために女性の管理者をどのくらい登用しているか。全管理者の1%以上登用していれば、それは優良な会社である。企業の国際化が問われる中で、職場にどのくらい外国の人が働いているか。外国人社員の割合が0.3%以上であればよい。また、地球に優しいかどうかという環境の問題もあります。地域参加の問題情報開示の問題、軍事関与の問題、企業の自己認識の問題など、たくさん項目を作りました。そのような指標で会社自体の社会的責任をもっと真剣に考えて下さい、ということです。これがいま世界的な運動となって来ました。

以上のような急激な変化のなかで新しい指標がいくつか出てきましたが、RYLAに参加した皆さん方は、一体どのような指標をとろうとしておられるの

でしょうか。皆さんにはこの余島でただ再会を楽しむだけではなく、一人一人がこのような時代認識と社会の新しい方向を見つけてそれぞれの地域に戻って行っていただきたいのです。これから何をすべきかをしっかり踏まえたくて、新しい社会を創るために献身していただきたいと思います。

いろいろなことが考えられますが、たとえば高齢化社会というと「お年寄りを大切に」と言われます。口で言うのは簡単ですが、それを深く掘り下げずに、とりあえずお茶を濁しておくというのでは本当の福祉の心は生まれません。これは私たちにとって新しい課題であり、真剣に考えるべきときが来ています。RYLAに集まっている21世紀を担う若い皆さんたちと一緒に、このような課題をともに考えていきたいというのが、私たちの願いなのです。



パネルディスカッション

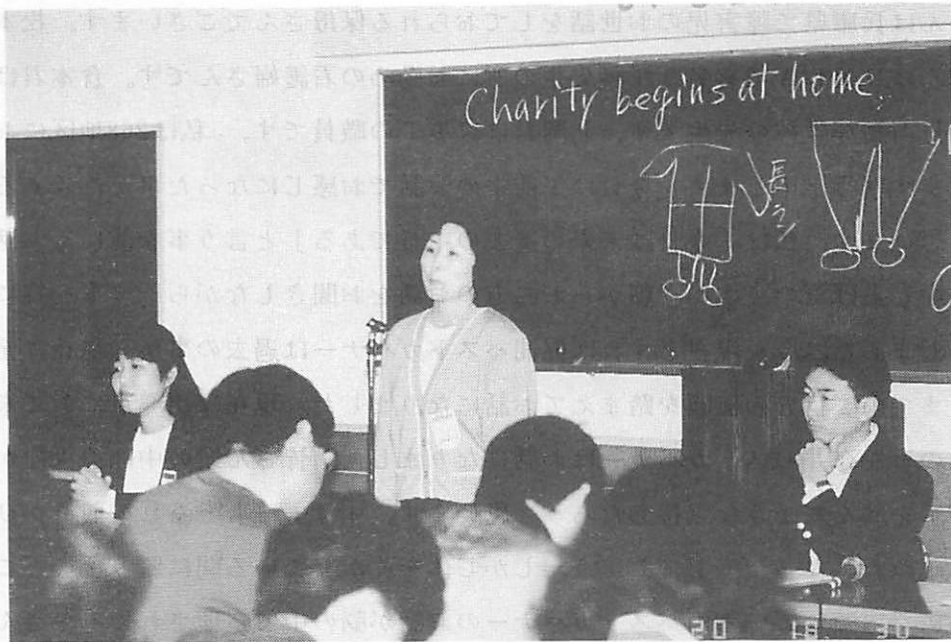
くまもと県立大学

「21世紀のふるさとづくり」

- | | | | |
|-------|---------|----------|--------|
| 司会者 | 黒 孝 彦 | コーディネーター | 一ノ瀬 真一 |
| (第1回) | 嶋 本 倉 | パネリスト | 伊藤 孝一 |
| (第2回) | 坂 岡 北 | | |
| (第3回) | 美井喜 本 悠 | | |
| (第4回) | 千 京 才 山 | | |

★ 実行委員会

くまもと県立大学は、2000年10月に「くまもと県立大学」を創設し、2001年4月に「くまもと県立大学」を正式に開校した。この間、多くの先生や学生が、この大学のために尽力してこられた。この間、多くの先生や学生が、この大学のために尽力してこられた。



この間、多くの先生や学生が、この大学のために尽力してこられた。この間、多くの先生や学生が、この大学のために尽力してこられた。この間、多くの先生や学生が、この大学のために尽力してこられた。

「21世紀を担うものとして」

コーディネーター	執行 孝 胤	パストガバナー
パネリスト	倉 本 勉	(第1回終了生)
	北 岡 弘	(第8回終了生)
	松 本 喜代美	(第9回終了生)
	山 下 京 子	(第12回終了生)

★ Rはロータリアン

執行(R)：パネルディスカッションと言ってもこれはダベリングディスカッションです。一応パネリストの方々のお仕事だけご紹介致しておきます。山下さんは兵庫県で障害児のお世話をしておられる保母さんでございます。松本さんはRYLAで有名な江藤先生の所にお勤めの看護婦さんです。倉本君は伊丹西高等学校の先生です。北岡君はNTTの職員です。私は268地区におります執行と申します。今日は午前中のお話でお感じになった事が色々あると思います。私は「今日は未来の過去の1日である」と言う事を前にもお話し申し上げたのですが、朝からお二方のお話をお聞きしながらその事を特に感じました。今を現在とすれば梶浦パストガバナーは過去の事から現在に至るまでのご自分の経験を踏まえてお話になりました。現在は出発点にして未来の事を今井パストガバナーはお話になりました。皆さん頭の中は消火栓から水を飲んだような気持ちだろうと思います。「ばぁー」と溢れて前身がびしょぬれになった感じでしょう。しかし体を乾かしている間に脳みそのどこかにくっついている両パストガバナーのお話が脳の中で整理されてみなさん方の将来の行動の糧になっていくんじゃないかと言う事を感じております。今井先生は、「人間が大切か地球が大切か」と言うお話をなさいましたが、13年前にガバナーノミニの研修がフロリダでありまして、その時のグループディスカッションで私は「宇宙船地球号のオーナーは誰だ」と問題を提起した事がございました。すると大部分のアメリカの人達は「神だ」とおっし

やいました。「人間だ」い言う方もおられました。最後に「問題を提起した君はどう思うんだ」と聞かれて「僕は神だとか人間だとかと言うのではなしに、石ころを始め、草木も全部地球上に存在するものはそれぞれが地球号のオーナーだ」と言う答えをしたのです。その事も思いだしておりました。特に今井パストガバナーのお話は結論が出ておりません。21世紀を生きる皆さん方若い方々がその結論をお出しになるんじゃないかと私は思います。人間の中に猫型人間と猿型人間があるそうです。猫は自分の子どもを運ぶ時に子どもをくわえて運びます。その時の子どもの格好は全身を総て親猫に任せてぶら下がっていきます。猿は全身でお母さんに捕まっていきます。人は逆境に立った場合「俺が頑張っ、もとを取り戻すんだ」と言うのが猿型人間。何かに頼る事によって安心出来るという気持ちになって逆境を抜け出すと言うのが猫型人間だと言うのです。私は逆境にたったら猫型人間がいいと思います。なるようにしかならんのです。それを抜け出したら猿型人間になる。梶浦パストガバーは高い所から物事を考えられるヘリコプターのような人間になれとおっしゃいました。だけど又どうしてよいか分からないと言う方もあります。とりあえず4人の方は今日の感想だけでも述べてください。

北岡：梶浦先生のお話の中から私が感じた事を2点ほど申し上げたいと思います。1点はまず命を助けて頂いた様な話がありました。私も10歳の時に脾臓をとりまして現在脾臓がありません。私は助けられたお医者さんになりたいと思いましたがその能力がなかったので何が出来るかと言う事を大きくなるに従って考えまして、自分が助けられた頃の子供の何かをお手伝いがしたいと思ったのが少年団との関わりの発端です。良い悪いは別として人間と言うのは与えられて初めて与えると言う事をするのじゃないかと思いました。今は私に出来る事をすれば許してもらえるのじゃないかと言う事を考えてやっております。もう一つ梶浦先生のお話を聞いて考えたのは25年程前の若い時なんです、少林寺拳法に熱中をした頃の道場長が「これからは我よかれ我よかれ、我、人の3倍よかれと言う人間が増えるであろう。お前らはそうではいかん。人よかれ人よかれ我の3倍よかれ。これは出来んから先ず我よかれはやむを得んであろう。先ず自分自身が揉まれながらも自分自身がしっか

りすると言う事は先決である。その次には人よかれと必ずもって来い。日本人はそう言う形を言いながらも我人の3倍よかれと言う気持ちを隠して持っている。この事は少なくともお前は持つな」と言う話をしてくれた事をふと思い出しました。徳島県の話なんですが国際交流の活動の中で留学生のお世話をやらしてもらっている時、一人の留学生はセーターがほしかったのですが、他の人たちはセーターはほしくなかったのにセーターを山の様に持ってきて、私は物貰いじゃないと言う様な問題が起きました。それは考えると何かをして自分達が満足と言う部分があって、相手がいいかどうか考えてないところがあったんじゃないかと。私は毎日の活動の中で色々な話が出来て色々な人の意見が聞けて、その中で自分の意見が恥ずかしく言える様な人間になりたい。周りで私が必要な時は何か手伝いたい。そして周りが私を必要としない時は休養をすると言う様な活動の在り方を現在しています。みんなの為にとか、人の為にと言うお話がありましたが「人よかれ」と言う事でこれからも「我人の3倍よかれ」と言う言葉は忘れて活動を続けたいと思います。

執行(R)：今、北岡さんのお話を承っていると、梶浦パストガバナーの言葉を受けて、北岡弘の人生観と言うものをお話になったんじゃないかと思えます。次に山下さんをお願いします。

お話の間でもご意見がありましたらどんどん発言して下さい結構です。言葉のキャッチボールをしていきたいと思えます。

山下：お二人の先生のお話を聞いて思い出した事があります。それは「清濁合わせ持つ」と言う言葉と「地の塩」と言う言葉です。清濁合わせ持つと言うのは私が高校を卒業する時にすごく仲が悪かった高校の先生が卒業式の日「山下、人生には清い流れだけじゃないんだ。清い流れも濁った流れも一緒に飲み込んでそれでも青い流れとなる。そう言う人間になってくれ」と言われました。その先生には高校3年間反抗をし続けていたのにこの先生はなんでこんな事を言ったのか言われた時には分からなかったのです。清濁合わせ持つと言うのは私の性格的な欠陥を正に言い表わしているんです。普段はぼーっとしているんですが突然かっーと血が昇ると嫌いなものは嫌いにな

ってしまうのです。先生はあの事をおっしゃっていたんだと自分が生きて行く中でよく分かって来てそれを直す事のむずかしさに悩んでいるのです。

私はボランティアと言うのは大学の時嫌いだったのです。なんだか偽善者みたいで、うちには障害を持った姉がいて、その人達に関わる行政とかボランティアと言うのがとても嫌だったのです。本当の苦しみなんか分からないのにと感じていました。大学を出て保険会社に就職も決まったんですけど、自分達家族に20何年間大きな陰を残していた問題を見つめてみたいと思って香川大学の特殊教育専行科と言う所に勉強に行かせて頂いたのです。これは自分に合わないのじゃないかと思ったんだけど、親の反対を押し切って来たので今更引き返すという事は出来ないのだけれども、自分に合わない事をするのは大嫌いな偽善をする事になるしと悩んでいたのです。その時に高松聖書研究会の先生が「京子さん地の塩になりなさい。地の塩というのはイスラエルには岩塩があって地に塩があるのですが、それを見て誰も有り難いと思わないけれども塩が人の命を保っていて、塩はあるがままの自分を捧げていて、そして尚かつ人の為に役に立っている。あなたは自分の柄ではないと思っているかも知れないけれども今のままでおやりなさい。地の塩は私には出来ないとかそんな事は言わない。今のあるがままのあなたを捧げなさい。」その先生はとても言葉少なに、その先生の人となりか初めて何か人を信じさせたと言うか、こんな人があるんだな、私をこんなに素直にさせてくれる人がこの世の中にいてくれたんだなと思ったらうれしくて、「どうして先生みたいな人格が作られたんですか」とたずねますと、「特別な事は何もしていないんですよ。でももしあなたがそう思ってくれたとしたらイエスを信じているからでしょう」瓢々として言われたんです。洗礼を受ける時も「教会に行けば行くほど自信がありません」と言ったら、「歩きだしてみなければ分からない。自信がなくてもなんでもいいから兎に角歩きなさい。」午前中の話ではその事が胸の中で改めて思い出されておりました。清濁合わせ持つと言うのは現在でもなかなか出来ないで四苦八苦していますし、地の塩にもなりきれないで文句を言いながらも時々ふと思いだして、「そうや、地の塩や。文句を言うのは止めよう」と心を引き締めています。この事を思

い出させて下さって有難うございました。

執行(R)：朝講義で緊張して、午後ちょっと昼寝をしたら、又こんないい話を聞けるなんて、皆さん素晴らしいと思いませんか。お互いに出会いがあって触れ合いがあって、そこに語り合いがあると言う事が今のお二人のお話から我々も教えてもらう事があるんじゃないかと思います。次は倉本さんお願いします。

倉本：1回目のRYLAの時に参加して家内と知り合って結婚したのですが、2人の子供は余島の申し子の様なもので欣奈、始学と2人とも余島にちなんだ名前をつけております。私は伊丹西高等学校に勤務しております。今は奉仕活動は何もしていないので心苦しいのですが、高校生活の中で一番労力をかけているのが生活指導です。生活指導の中では先ず服装で、制服はありますが今の若者は非常におしゃれで、校則で決まっているものとは同じ服装をして来ないです。男子ならボンタンと言う先のすぼまったズボンをはき、エントツと呼ばれる普通のズボンをはいていると皆から仲間はずれにされるのです。こんな校則違反のものは取り締まるわけですが、全くいたちごっこの様なものです。服装の乱れは心の乱れであると言って指導するわけです。女子であればリボンをしてはいけないとか、口紅はいけないとか、白いソックスを履かないといけないとかを先ず最初にやるわけです。また兵庫県では3ナイ運動と言いまして、乗らない、免許を取らない、バイクを買わない、と言う事で高校生のバイクを禁止していますが、実際は高校生は陰で乗っているのが実情です。高校生はお菓子やジュースを食い歩いてそのごみをほうり歩くわけです。教室でも同じ事をやるのです。色々注意をするわけですがどれもなかなか聞かない事が多いのです。また遅刻が非常に多く定刻にはなかなか来ないのです。教師は何故こう言う風になっているのかと悩むわけです。財団法人日本青年総合研究所がまとめた30歳になった時の高校生の意識調査と言うのが新聞にありました。30歳になった時の職業の項目では、アメリカでは医者や弁護士等、自由業が半数近い48%を占めているのに対して、日本は僅か13%でした。日本のトップはなんと中小企業の従業員が45%でした。やってみたい分野では、アメリカは学問、ハイテクの分野が38%ともっとも

多くて、その次はスポーツやボランティア等であるのに対し、日本はスポーツの34%を筆頭に音楽、学問、ハイテクの分野と続き、国際友好やボランティアの回答はアメリカのほぼ半分でしかありません。面白いのは30歳の時の経済状態について借金が多いか、貯金が多いかと言う質問に対してアメリカでは借金が多いと答えたのは僅か7%であったのに対して、日本では3倍の21%で、夢のない日本の若者を象徴している様な気がします。ボランティアに関しても欧米の学校は休みが多いが、日本ではずっと少ないと言う事も言えるようです。昭和61年の子供に関する国際比較調査によりますと、学校以外で活動しているのは日本では31%だけ、アメリカは61%、ドイツは63%と2倍の数字を示しています。何故こう言うデータになっているのか、高校生で言うと偏差値と言うものが非常に負担になっているのじゃないかと考えられます。今、高校生の基本的生活が出来ていないと言う事に関して家庭を指摘して、桂文珍が面白い事を言っているのですが「学校では躰をしてもらい、塾では勉強を教えてもらう。家庭はそれらの費用を払うだけ」。現に学校でも親に注意を促すと「先生もっと厳しく叱ってやってください」、こちらが厳しく叱らんのが悪いような今の親です。「遅刻をこんなにしていますよ」と言っても何とも思わないのです。今の家庭と言うものは昔の家庭と違って、唯単に金を与えて養っていると言う感じがするのです。これは養護学校生の岡崎さんの無責任な親に対する憤りの提案なんです、自動車を運転するには免許がいる様に、子供を生む親にもライセンスがいるようにすればよいと言う提案です。今の教育には教師自体にも色々問題はあると思いますけれども、家庭にも大きな問題があるんじゃないかと思うのです。今井先生のお話で農工社会では家族制度が中心であったが、産業社会になって核家族制度が生まれ、情報化社会と言う現在では家族の形態を失ってしまっている事が多い。1 昨年、昨年あたりの流行の言葉でディンクスと言う言葉がありました。夫と妻の2人だけで子供は作らないと言うライフスタイルが流行っているようですが、今の若者が家族というものを鬱陶しいという事で、家族から離れようとする気持ちが多いといえます。しかし逆に今はそれを見直して家族と言うものをもっと見つめ直そうという傾向も強くなっているよ

うです。またアメリカ等で子供の虐待が非常に問題になっています。当り前のことではありますが、家族という事をもっと大事に考えていかななくてはならないのじゃないかと思えます。梶浦先生の話の中でHomeと言う事に関しても説得力のあるお話をして頂きましたが、たまたま私もこう言う事を知ったのです。それは“Charity Begins at Home”というイギリスにある言葉です。慈善というのは自分の家から始まるという事です。例えばRYLAで学んだ色々の事もまず家庭に還元し、そして近くの地域社会へと広げていけばいいと私は考えています。

執行(R)：倉本君のお話を承っていると、RYLAの講師にお願いしてもいいんじゃないかと思うような色々な問題点を指摘して頂き、ありがとうございました。今、将来の暗い話をされたので思い出したのですが、コンピューターが今の状態が日本で進んでいくと600年後にはどうなるかと言うことを出しておきまして、それによると600年後には現在1億の人口が700人になるのです。そういう事も考えておかなければならないのじゃないかと思えます。RYLAのキャビンでのドンチャン騒ぎ、あれもいいことだと思うのです。私たちは旧制高校時代にストームをやったり、町ででも店の看板を入れ替えてみたり、今思えば単純ないたづらをやりました。今の若者はそう言うところがないですからね。最後に松本さんにお願いするのですが、最後と言うのは一番嫌だという事はよく分かっていますので、何かお感じになった事を気楽にちょっと喋って下さい。

松本：今井先生や梶浦先生の大変立派なお話について何を言ったらいいのかわからないのですが、私の人生観と言うのは自分の人生を良くするのも悪くするのも自分自身じゃないかなと思えます。私は看護婦になって14年間働いて来ていますが、今の江藤病院に入りまして、私が夜勤をすると患者さんが死ぬというジンクスがあったんです。病院の人達にもお払いに行ったらといわれて、まじめになって厄払いに行った事もあったのですが、中々悪い厄が落ちなくて、11人目の方が亡くなってやっと厄から逃れたという経験をしたのです。それは看護婦の経験の中で初めての経験だったのですが、その時強いていえば、患者さんが私に死後の処置をしてほしがっているのか

など考えてみたりしたのです。看護婦という仕事は、この世に生命が生まれ出る人生の最初の仕事と、人生の最後の仕事に携わるわけですから、患者さんの人生の最後に自分の精一杯の気持ちをこめて死後の処置が出来るという事に誇りも感じていたのですが、患者さんの最後を見て来て私の思ったのは、生きて来た生き様が死に様につながっている事を、11人目の方のお世話をする頃に思えて来たのです。赤ちゃんですと家族の面会も多いし、お世話をするのにも力が入ると思われませんか？ ところが高齢で、特に家で邪魔者にされている寝たきりの人を病院でお世話をしている場合というのは、本当にお見舞いにも来ないのです。患者さんの一番期待しているのは、先生の診療でもなければ看護婦のお世話でもないのです。家族の暖かい笑顔なんだと思うのです。私達が一生懸命にしているも、私たちに向ける笑顔と家族に向ける笑顔と言うものは違いがあるのです。何かどうやっていいのか分からなくなってきたのです。

執行(R)：看護婦としての体験を色々お話頂きましたが、松本さんが夜勤の時に11人を見送られたというのは、松本さんを待って旅立ったと僕はそう思うのです。患者さんの生き様、死に様は松本さんはご存知ないかもしれないけれど、死に様から生き様も感じ取っているんじゃないかと思うのです。そういう事があなたの人生にこれから大変にプラスになると思います。又思い出したら話して下さい。

松本：これからも色々な事を勉強して役だてていきたいと思っています。例えば気管切開をしている患者さんは、声が出ませんから手話を覚えたりとか、視力がかなり低下して来た人がもし全盲になった時、点字を勉強していたら役立つのじゃないかとか、私の人生でRYLAに参加したという事が一つの大きな考えを変えてしまうような気がします。これから先もRYLAに参加した経験を生かして、仕事意外にボランティアとして色々な事をしていけたらいいなと言う風に思っています。

執行(R)：4人の方々から、今朝のお話から自分のお考えを述べて頂きましたが、松本さんのお話を聞いていると、私も医者ですし、また自分も30年前までに8回も腹を切って病床についておりましたけれども、生き返ってこの様

に元気にしているわけです。この頃臨死問題をよく言われています。先日テレビを見ていて、私は昭和32年の12月の20日頃だったと思いますが、何か右側に暗い壁のある所を歩いていた記憶がふと蘇ったんですね。あれが臨死経験かなとも思ったりしているのですが、一方あれは幻覚だとも思うのですが、しかしそう言う経験を人間がするという事はそれぞれ1人1人が亡くなっていく瞬間にはそういう経験をしながら亡くなっていくのでしょうか。それを見送り、後始末をすると云う事は看護婦さんの仕事ではありますが、そこに介在する家族がない場合があると言う事をおっしゃった。それは非常に私は寂しいと思います。やはり私も患者を数十人も見送りましたけれども、患者の最後の場では目を見て上げる事だと思うのです。患者の目は必ず何かを伝えています。目は見ると言う事が一番大事なんです。診察する時も目を見ながら話をする事は大事な事だと思うのです。医療に携わる人でなくとも人の目を見て話をする、目を見て握手すると言う事が一番大事な事じゃないかと言う事を、松本さんの話の中から私は読みとったわけです。4人の方々は自分の職業的なものや、経験からお話頂きましたがどうでしょうか、今朝の先生方のお話で皆さん方の中から、私はこう思ったと言う事を2、3分で話して頂きたいと思います。亀井さん何か如何ですか。

亀井：私は現在、香川医科大学の新4年生ですが、松本さんの話で、生き様が死に様につながると言うのは本当だなとそれは強く感じています。日頃から私は考えている事は、死ぬ瞬間に自分の人生を後悔しないで死ぬるようにしたいなという事を考えているのです。私も将来は医者になるので、今日医者の先生方の話を聞いてとても勉強になりました。このRYLAに参加して本当によかったなと思っています。RYLAでは年齢の違う経験豊かな方が沢山いらっしゃるのので、社会勉強とか人生勉強とかが出来たと言う事がよかったと思っています。これからの人生でそれらを生かしていきたいと思っています。

執行(R)：有難うございました。マルチ・イバニエスという昔の人が「医師になると言う事は、人間と神の間に立つことである」と言っております。今朝梶浦さんの“Service above self”これを私は自分よりちょっと高くして神様にできるだけ近づいた状態でするserviceが“Service above self”

だと解釈する事を教えられました。そう言う意味で、非常におこがましい話でございますけれども、医師と言うのはそれくらいいけないのだなと感じております。現在は医者が少なく、医者屋が多うございます。そう言う風に私は感じております。次に、今の発言を捕えて皆さん方からおっしゃって下さって結構です。三田市にお住まいの山本邦男さん如何でしょう。

山本：第1回の受講生です。久しぶりに余島に帰ってまいりました。13年も前なのでほとんど覚えていなかったのですが、インフォメーションセンターまで来ると体が覚えいたような気がしました。私は30歳のとき仕事の関係で海外に赴任しました。環境としては日本のように季節感のない所で、サハラ砂漠に多い時には3,000人、私が入った時には300人の男性が生活しておりました。男連中ばかりなので、本音で話をしないと一緒に住めないと言う状況にほんとに入られたのです。恥じも外聞もないと言いますか、本音で話をすれば本音で帰って来ると言う世界です。最初はちょっと躊躇しましたけれども、慣れば本当にみんな家族のように暮らしていました。そこでこちらに帰って来てからその感覚的なものが体に残っていますんで、職場でもやはり本音に徹したらある程度分かってもらえるような気がしています。自分が何故そういう事が出来るようになったのかと考えてみると、やはりRYLAセミナーを受講してからなんですね。考え方がどんどん変わって来たんです。最初に受講してから12年もたっているのに、細かい記憶はほとんど残っていません。今日は来られなかった鳥羽さんの事は覚えています。でもそうして体が覚えていて、帰って来れると言うことは非常にうれしい事だと思います。

執行(R)：ありがとうございます。今鳥羽君の事が出ましたが、私は鳥羽君が好きで、年に1、2回車で彼の所に走って行くのですが、長野県の伊那郡の山の中で、パトカーが来るにも30分かかかる所で、情緒不安定の人2、3人、或いはいない時は1人で住んでいるんです。彼は仙人の様な人ですが、彼の話を聞いているだけでも心が暖くなる様な性格を持っている人です。山本さんのお話では、30歳で変わったと言う事をおっしゃいますが、30歳までは職人に徹する。それから後は人間形成に一生懸命がんばると言う事がある人が言っておられた事を聞いた事があります。だから山本さんもそういったの

ではないかと思えます。まだございますか。

一貫田：私は余島を覚えておりました。道も間違わずに来ました。倉本さんが今、奉仕活動をやっていないんだという事ですが、私は奉仕活動と言うのは、小さい事でも自分の出来る範囲でやればいいと思えます。例えば子供をきちんと育てていく、これも奉仕活動やと思えます。自分の家庭を守っていくこともそうだと思います。そう言った中で、奉仕活動を自分はやっていないと言う事はないんじゃないかと思えます。今井先生が話された中で、やはり自分が出来る中で、どんなちっちゃな事でもいいから人の為になる様な事を、気持ちを持ってやればいいんじゃないかなと僕は思っています。この頃買い物に行っても、どこでもナイロン袋に入れてくれますが、僕は「すみません、ナイロン袋結構です」と言うこの言葉一言、それが出る様になったんです。それだけでも一つの奉仕活動しているんじゃないかなと思えます。

倉本：正直な話、このRYLAにやって来ますと、非常に優秀な方で、バリバリやられている方の話を聞いていると、自分は何もしていないなと言うプレッシャーを感じるわけで、それで奉仕活動はしていないと言ったのですが例えば、環境問題にしてもごみを沢山出さないとか、或いは合成洗剤を流さないとか、油を捨てないとか、シャンプーに石鹼を使うとか、自分に出来る事を含めて家庭で奉仕活動をしていけばいいと、一貫田さんのお話を聞いて思いました。

執行(R)：最初にお話したいと思えますが、いい事したと言うのは何もしてないんですね。しかし貴方は奉仕活動をやっていないといわれるが、その何もしていない事をしているわけです。これが僕は素晴らしい事じゃないかと思えます。

北岡：今ごみの話が出たので、今思い出したのですが、これは徳島でユースの活動をしている青年リーダーの話なんです、焼却炉で働いている彼が青年のリーダーで、環境問題をテーマとしたディスカッションのテーマのアドバイザーをした時、その時ごみを分けると言う事が家庭の中でもだんだんに広がっているわけですが、燃えるごみと燃えないごみとに分けると言うのは間違いだと言はれるのです。燃やしてもよいごみと燃やしてはいけないごみ、

これに分けるようにする必要があるのです。炉の中ですごい高温になるもの
があって、燃えるからと言って燃やしたら、非常に高いお金で作った炉の能
力を低下させ、寿命を短くすると言う事になるんで、燃やしてもよい、燃え
るけれども燃やしてはいけないごみ、と言うごみがあると言う事をふと思い
ましたので、皆さんにご披露しといたら又思い出して頂けるかと思ひまして。
執行(R)：燃やしてはいけないごみ、よいごみを一般の人はどうして区別した
らいいのでしょうか。

北岡：ポリの部分は高温になるので燃えるんですが、燃やしてはいけないので
す。それで燃えないごみに入れるのが正しいです。

執行(R)：これは分けると言う技術的な事になるのですが、一般の人がそこま
で知っておいてもらわないと駄目なんじゃないかと思いますが。

北岡：PRがなかなか出来ないんです。

執行(R)：どうですか、そう言う事をPRする様にしては

北岡：徳島で今やっておるんですが、なかなかいい活動が広がらないのです。
それで今思い出してここで話しておけば、又どこかで思い出して頂けると思
ったわけです。

執行(R)：今、いみじくも、いい活動はなかなか広がらないと言う事をおっし
ゃいましたが、全くそうだと思います。悪貨が良貨を阻止すると言う世の中
です。今日の今井パストガバナーの、或いは梶浦パストガバナーのお話の中
にもそう言う意味が含まれたものがありました。

河野：私はいつも思うのですが、日本人は昔はセルフコントロールと言います
か自分自身を大変コントロール出来たような気がしますし、私が子どもの時
でもそう言う事を親から教えてもらったと思いますが、今は大人でも子供で
も我が侷な人が多いような気がします。やはり小さい頃から教えていかない
かんと思うし、少なくとも小学校の6年くらいになれば自分を意識しないと
いかんと思います。

執行(R)：河野さんはセルフコントロールと言う事をおっしゃいました。
人間の頭、頭脳と言うのは物を作り出す事が出来ます。同時に人間の頭は自
分の行動を抑制する事が出来る。抑制する事の強い人ほどいい人だと僕は思

う。アウシュビッツを経験したフランクルと言う人がいます。この方はアウシュビッツで奥さんはガス室にいれられ亡くなられたのですけれども、彼の方は生き残って、戦後オーストラリアのヴィーン大学の精神科の教授をされた方です。その著書で「人間の種族は二つある。即ち品位ある善意の人間とそうでない人間の2種類である」と彼は言うております。そう言う意味でいい人間になりたいと我々は願っているのです。アウシュビッツと言う極限状態から生き残った彼の話は貴重なものだと思うのです。日本語で「夜と霧」と言う書名で出ております。

家庭教育と言うのは、どんなに難しいかと言う事ですが、色々ご意見もあると思います。

橋本(R)：一言申し上げますと、ごみの問題ですが、高知市では各家庭で全部資源ごみとして9品目に種分けしてやっています。その売上げの一部は町内に返って来るので、それを有効に使っているわけです。

下野：相生の方で、石油から出るもので作られている資源ごみを、もう一度石油に戻すと言うリサイクルをすと言うメーカーがあるわけですが、現実にはそれをする為には、その種分けは家庭では、塩化ビニール系なのかポリエチレン系なのか、判断が非常に出来にくいのです。それが本当にきれいに分類されれば、それを再資源として利用する事ができるんだと言う事です。洗剤とかシャンプーの問題も水道局の下水道の方に勤めておられる方が言われるには、合成洗剤は下水場が整備されても絶対に分解されないのです。浄化と言うのはバクテリアがやっていますけれども、合成洗剤に関してはバクテリアは分解しません。だからいくら水道を整備しても駄目なんです。みなさんはもうよくご存知でしょうけれども、合成洗剤は止めて普通の洗剤にして下さい。今は朝シャンとかでかなりシャンプーを使っておられますけれども、シャンプーのほとんどは合成洗剤です。いくら天然の成分配合と言う謳い文句があっても、中味は合成洗剤です。だから石鹼洗剤のマークのあるものを使って下さい。環境を優しくする為にはそう言う所から協力してほしいと思います。

執行：下野さんのご意見では、環境問題が出てまいりました。環境問題は国際

ロータリーでも「人類は大地に属する」と言うビデオを作っています。1974年頃アメリカのスポケーンと言う町で万博がございました。その時のテーマが「地球は人類には属さない。人間が地球に属する」と同じ事を言っておりました。20年近く前に既に言われておったわけです。今日は環境問題を掘り下げるに時間がございませんが、今井バスターガバナーのお話「Shopping for a better World」と言うお話がございました。これは企業の在り方が地球に対してどんな影響があるかと言う事をとらえていますし、女性問題もございます。これに関して企業にお勤めの方でご意見のおありの方があられました。

中山：私は食品会社に勤めておりますので、今の話は中々耳の痛い話ですが、うちの会社でも実際の生産の効率と同時に環境問題を考える事を社長から言われています。一度に両方と言うのは大変難解な事ですけど、食品メーカーとしても今考える時期だと思います。ですからさっきのご発言のように自分で何が出来るかと言う事から先ず取り組もうと思っていますし、自分の中では環境問題を優先して考えたいと思っています。今が一つの過渡期だと思います。

もう一つお話させて頂こうと思うのは、私はRYLAから篠山に返って非情なギャップを感じました。何が出来るかと考えたら、私はやはり職業と地域の催しへの参加でした。私は奈良から篠山に来たので、その地域の催しに勇気を出して参加してみると、ここで1人暮らしのおばあちゃんと知り合ったりしましたが、そのくらいが自分に出来る事かなと思いました。私みたいな企業の人間は、出来る事からやっていくよりしょうがないなと思いつつ来ましたが、他の企業の方はどうされていたのか、それぞれ悩んでいられると思うのですが。

執行(R)：企業はどうしているかと言うのは、直接RYLAとは密接な関係はございませんが、何がしの関係はあると思います。環境問題にしる人間の雇用問題、ものの考え方、我々は職業奉仕と言っておりますけれども、職業と言うのは自分の生計をたてる為に必要な事でありましてけれども、それをもって社会の何かに役にたちたいと言うのが職業奉仕なんです。そういう風に考

えていけば、アメリカでランクづけされたと言う企業の中で日本の企業はどれくらいありますか？今井先生」

今井(R)：あまり沢山の会社が対象なのでよう分かりませんが、日本でも下村さんがアサヒジャーナルにとり上げたように、そう言う機運が次第に高まって来ている。企業自身が変わりつつあると言う事を若者はよう知っておいてほしいと言う事が一番大きなポイントだと思います。

執行(R)：今井パストガバナーがおっしゃった事は、非常に皆さん方の耳にちゃんと入れておいて頂きたい。若者に対してそう言う事をアピールしていくと言う事は、非常に大事な事じゃないかと思います。

西勝：第4回のRYLAに参加させて頂いたのですが、その時のカウンセラーから無形の財産と言う事を教えて頂きました。今回またハガキを貰った時、本当にうれしかったです。倉本さんと同じで私も今何もしてないのです。そんな人間に又来いと言ってくれるのはここしかないんじゃないかなと、心から込み上げて来るものがあつたんです。今、企業の話が出たんですが、実際にうちの会社なんかでもまずいなと思うのは、色んなノウハウとか動機づけの問題までちょっとした心理学の本に書いてある事位は教えるのですが、企業の倫理が自己満足のレベルで終わってしまうんじゃないかと僕は思うのです。特に最初RYLAに来た時、今井先生の話聞いて「世の中にこんな事を考えている人がいるのが」とすごいなと思って、今年もう一度見直すと言う事が書いてあつたので期待して来たんです。時間がなくて今井先生の残りの話を聞けなくてもったいなと思いました。自分がある程度、今井先生の話聞けるようになってここへ帰って来れたんだと、又、そう言う事に対しての感謝の気持ちを抱かせてくれるRYLAと言うのは素晴らしいんだと。さっきパネラーの方が「我、人の3倍よかれ」と言う話をされたんですが、すべての価値基準が満足のへんで止まるんですよ。今井先生のお話では、企業が本当に変わったと言う事を分からせてくれると思うのです。僕は4回のRYLAの時に無形の財産と言う事をカウンセラーがしきりにおっしゃって「無形の財産」とはいったい何なのか、最後まで答えは出なかったのです。今は子供が五つになるんですけれども、親として何も出来ないんです。

でも気持ちだけでも大事にしていったら何か分かる事が出来て来るんじゃないかと思うのです。さっき高い所で見ると言う事を言われましたが、自分がちょっとでも頑張って高くなっていく事が大事なんです、それで何を伝えていかなければならないのかと言う事を考えていかないと、僕はたった1人の子供にも伝えられないんじゃないかと思います。

執行(R)：西勝さんありがとうございました。非常に自分と言うものを謙虚に見られてのご発言だったと思います。私のような者にRYLAの誘いが来たと言う感激ですが、これは鳥羽君も言っておりました。「私の仕事を理解してくれる大人の方がこれだけあると言う感激。それは私の将来への励みになりました」と言っておりましたが、西勝さんもそれと同じような気持ちを抱かれたんじゃないかなと思います。感動と言う事ですが、先程お話したフランクが、あの苛酷なアウシュビッツの環境でユーモアを持って話し合うと言う事、物事に感動すると言う事、これが私を現在まで生き延びさせてくれたと彼は述べております。人間は素直に感動したらいいです。時間があと9分位しか残っておりません。ロータリアンの方を含めていかがですか？ 森バストガバナミえられましたね。ちょっといかがですか。

森(R)：今日はRYLAを修了された方々の成長された姿を拝見しまして、非常にうれしいです。私はいつもプラス人間になれという事を言っているんです。人間にはプラス人間とマイナス人間とあるんですね。100人を喜ばしても101人を泣かせたら地獄へ行くわけで、3人しか喜ばせなくても2人しか泣かせなったら極楽へいけますね。大きい小さいやなしに、そう言うプラス人間になりなさいと言ってるんです。今、執行さんが、このまま行くと600年後には700人になるという話をされましたが、実は2人で子供が1人しか出来ない、こういう人はマイナ人間です。いくら素晴らしい業績があっても子供がおらんかったらマイナス。その代わり他の方でうんとプラスしていかんといかんわけですね。たとえ頭があまりよなくて力があんまりなくても、子供の方でプラスになる人もおるわけでしょう。そういう事を考えていろんな面から社会に対する貢献度、世界に対する貢献度を考えていかんかんとします。例えば私が贅沢なものばかり食べたらそれだけマイナスで

す。贅沢なものを食べると人の何回分も食べる事になります。そういう風にいつも思いながら私自身過ごしています。今日皆さんはここで素晴らしい種を得て帰ってプラスにして下さると思いますが、一つだけプラス人間になってほしいとお願いしたいと思います。

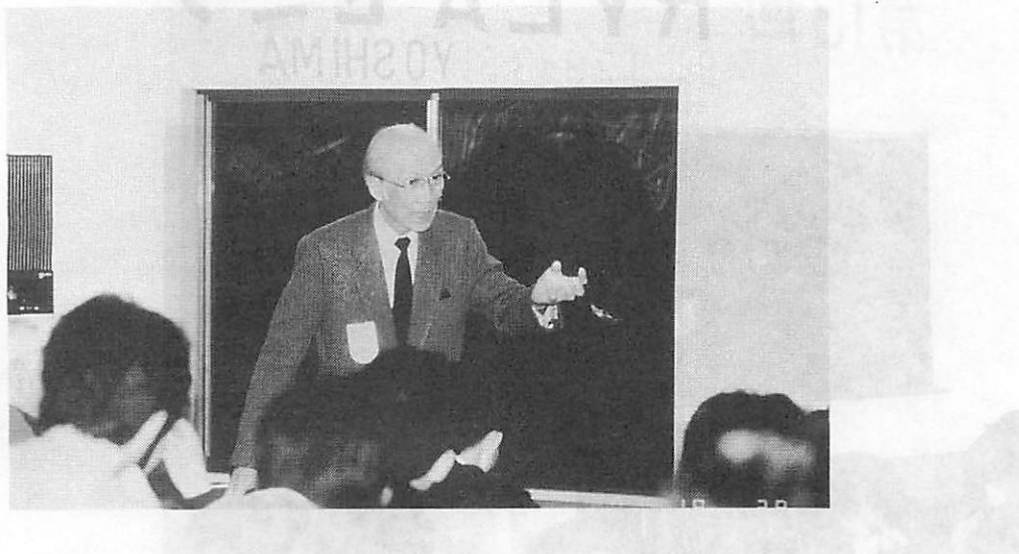
執行(R)：ありがとうございました。もうお一人牟礼パストガハナーにお願い致します。

牟礼(R)：私が思うのに、非常に強いインパクトを受ける、あるいは自己の人生観を打ち立てる指針を得るという事は偶然の機会が多いと思うわけです。例えば山下さんがお話をしたように、最も嫌いな先生が卒業の時に涙を流して話してくれたという事が、あるいは山下さんの人生観の中で非常に強い影響を与えられたと思うわけです。1時間、2時間の話を聞いて、話を全部覚える事は必要ないと思います。或いは厚い本でも、初めから終わりまで読んで全部覚える必要はないと思います。たった一つでもいいから自分に取り入れると言う気持ちが大事だと思います。私は最近、非常に強烈に打たれたのは、テレビを見ていて受胎した子供が母親の子宮の中でぐんぐん成長していく時に、身震いするような感動を受けたわけです。この姿を見るとセックスという問題についても、非常に尊厳な考え方をしなければならぬと言う事を思いました。命の尊厳という事をその時ほど強く打たれた事はありません。そのテレビを見ると、生まれて来る赤ちゃんが障害を持った子供であろうと、いわんや器量が悪かろうと、頭の程度が低くかろうと、そんな事は生まれて来る子供には何の責任もないと言うような事をしみじみと感じたわけです。何か偶然の機会に強く自分が打たれると言う事をとらえてみる必要があると思います。又そう言う意味でそれほど強烈なものをとらえられなくても、話の機会を多く求めて、そしてそれを自分の心の成長の一つの糧とすることも大事だと思います。

執行(R)：崇高なお話を承ったようでございます。深川ガバナー最後の締めくりに何か一言おっしゃって下さい。

深川(R)：私自身、今日は本当に色んな事を学ばせて頂きました。有難うございました。

執行(R)：と言う事でございます。朝のお話、そしてこのパネルディスカッションが、今夜のバズセッションや明日のフォーラムと広がっていく事と信じて、今日のこの会を終わらせて頂きます。どうもみなさん有難うございます。



オープンフォーラム

「オープンフォーラム」は、本会の活動の中心として、毎年1回、3月下旬に開催される。この日は、本会の活動の中心として、毎年1回、3月下旬に開催される。この日は、本会の活動の中心として、毎年1回、3月下旬に開催される。



フォーラム

「福祉社会に於けるリーダーの心構え」

司会 深川 純一(268地区ガバナー)
★ Rはロータリアン

司会者：フォーラムを始めたいと思います。時間がたった2時間しかございませんので、十分なディスカッションが出来るかどうか分かりませんが、これが皆さん方と最後のフォーラムです。今日お別れしたら今度いつ会えるか分からないと思いますし、このRYLAと言うのは、あくまでも皆さん方のRYLAでありまして、ロータリーの為のRYLAじゃないのであります。だから存分にいろいろな事をおっしゃって頂きたいと思いますし、私たちロータリアンもそれによっていろんな事を学びたいと思いますので、思いきって意見を出して頂きたい。昨年パネルディスカッション、バズセッションの時間を持ちましたけれども、意見が述べ足りないと言う方がございましたら、是非とも皆さんの為にいろいろな意見を出して頂きたいと思います。お互いがお互いに学び会う、その事がお互いを育てる事になるだろうと思います。私達がこの世を去る瞬間まで、その学び会う気持ちと言うのを忘れてはならないだろうと思うのであります。よろしくご協力をお願いしたいと思います。時間の関係で、先ずどこかの班から意見を出して頂いて、それを元にして論旨を展開して行きたいと思うのであります。まず、D班の方おられますか？昨日、バズセッションでどんな事をお話し合いになったのか、そのへんの所をお話ください。

中野昭示：D班ではすごく中味が濃かったです。先ず福祉に対して、これから高齢化社会において、行政のなすべき事と、自分で出来る事とにどのような事があるか話合いました。各自が出来る事というのは、例えば小さい事ですけれども、障害者やお年寄りの方に乗り物の中で席を代わって上げるという当り前の事ですが、若い人は声をかける勇気が出ないとか、分かっている出来ないとか、色々あると思うので、私達がまず当り前の事をしていく、

行動していきましょう。又、自分達が年をとってから、先ず行政に何かしてくれと言うのではなくて、自分が出来る範囲の事を自分でしましょう。あんまり甘えない、今は甘え過ぎるところがあるんじゃないかと思う点があるので、まず自分でやって、どうしょうもない時にSOSを出して、その時に行政側がすぐ対応が出来るようにと言う態度が必要じゃないかと話し合いました。もう一つは、子供の出生率が低下している問題がありますが、これは5年後、10年後には直接に関係して来る問題であります。今5人で1人を税金、その他で支えているようですが、結婚して子供を作らないとか、1人でいいとかだと、昨日のプラス人間になろうというお話のように大変な事になります。子供が少ないという事は、20年後を考えたら大変な事です。だから子供を作り、それを立派に育てるという事も、自分達に出来る役目じゃないかと話し合いました。

司会者：有難うございました。今、高齢化社会を迎えるについて、大変重要な問題が指摘されたようでございます。根幹にふれる問題であります。今出たご意見について、他の班で自分はこう考えるといった意見があったらおっしゃって下さい。（間）皆さんが考える間にコメントをつけますと、今5人が1人を支えていると言う発言がございました。20年後の事を考えると大変だとおっしゃいましたが、正にその通りなんで、この問題は皆さん方が高齢者になった時も大変だと思いますが、それ以上に、皆さん方の子供さんが高齢者になった時は、もう一つ大変だろうと思います。今から約35年後になるとどうなるかと言いますと、厚生省の発表では、統計上26%が65歳以上の高齢者になると言われております。26%と云う事は100人の内26人が高齢者、概算をしますと、4人に1人が高齢者になります。そうすると3人の人間が1人の高齢者を養っていかなければならない。高齢者が働けばいいですが、実際65歳以上になって、効率ある労働を提供していく事が出来るかと言う事になると、なかなかむづかしい。そうすると誰が養うのか？ 憲法25条に生活権の保証がありますから、国家が面倒みればいいじゃないかと言うけれども、国家の財源にも限りがあります。それをする為には、ものすごい税金を吸い上げなければそれは出来ない。そうすると3人で1人の高齢者を養うと

言うことになります。しかし実際は、3人の内には赤ちゃんもおれば、未成年者もおれば、働けない人もおります。だから2人が2人の被扶養者を養っていかなければならない状況が見えてきます。そう言う状況になった時に、現在の社会制度でそれが持ちこたえられるかどうかと考えると、おそらくそれは不可能だろうと思います。だから厚生省は、社会資本の備蓄をしようと言うので、どんどん金をためている。だけど社会資本の備蓄をしようと言う事は、優秀な若者が沢山おって、優秀な労働力があって、年々歳々その基金に金が流れ込んで来ないと備蓄は出来ないわけです。ところが高齢化社会と言うのは、若者の数がへっていきます。良質な労働力がだんだん減っていく。それにもかかわらず扶養者が増える。今、金をいくら溜めても、それは乗り切れないだろうと言う状況であります。じゃそう言う事になるとどうなるか？ 社会制度、農業制度、会社制度、学校制度、病院制度、弁護士制度、はては地方自治体に到るまであらゆるものが洗い流されてしまうだろう。唯この考え方にはちょっと行き過ぎだと言う考え方もあります。しかし、もしそうなった時にどうするか？ 昨日、今井先生がおっしゃいました、今まで私たちが効率の倫理だけで、役にたたないものはどんどん捨てていって、役にたつものを大事にしていく、この効率の論理が今まで日本経済を支えていったわけであります。経済大国になったのは、その効率の論理一本槍でどンドンどンドンやって来た為に、世界経済をリードするだけの経済力を蓄えた。しかしその考え方で行ったらどうなるのか、今井先生があるRYLAでおっしゃったと思うのでありますが、効率の論理一本槍でいって、高齢化社会を迎えた時にどうなるか？ 役にたたないものはポイ捨てと言う事になると、65歳以上のお年寄りには役に立たないから、姥捨山へと言う論理につながっていくだろう。今まで経済大国を築き上げて来たこの効率の論理、これは大切であり、これを無視しては駄目なんだろうけれども、それだけではこれからの社会は乗り切れないだろう。だから2人が2人を養うと言う状況になった時に、どのようにしてその激動の時代を生き抜いていくかと言うことが問題になります。それは皆さん方リーダーに課せられた一つの課題だろうと思うわけであります。そして皆さん方がこの世を去る時に、皆さん方の後

輩にその世界を生き抜いていく知恵を授けてやる義務が皆さんの方にあるだろうし、私たちもこの世を去る前に、みなさん方にその知恵を授ける義務があるだろう。そう言うものをお互いに模索をしながら、いろんな意見を交換していこうと云う事が、このRYLAを開いた一つの意味でもあるわけです。先程いい意見の出ていたのはその所で、それは量の発想、お金を溜めるといような形では絶対に乗り切れない、根本的に発想を転換しなければ、激動の時代は乗り切れないだろうと思われるのであります。そのところで昨日、今井先生から世界の状況がどンドンどンドン変わっていく、その一つに高齢化社会と言うものもある。それだけじゃない、皆さん方がこれから生きて行く時代と言うのは、大変な時代だろうと思うわけでありまして。それだけに、高齢者問題と言うのは、お年寄りの問題じゃなくて、今の若者の問題がまさに高齢者問題なんでありまして。そう言う事を考えて頂いてご意見を出して頂ければと思います。それから、理屈の上ではこうしたらいいと言っても、実際にその老人惚けのお母さん、お父さんを抱えている家族もあるだろう。その体験も大事にしなければならない。現実はどうしたらいいのかと言う事もあるだろうと思います。そのへんの所を、リーダーとして皆さん方が、自分はこう思うと言う意見をどンドン出して頂きたいと思います。

橋本文子：私は保健婦をしているのですけれども、今、自分が仕事をしていると思うことは、すごく現場はハードな面と言うか、老人福祉に対するサービスが整って来たのだけれども、それがなかなか生かされないのですね。行政の中で考えて、入浴サービスもあればいい、ヘルパーも派遣しますと言う風にゴールドプランと言うようなものがどンドン出て来ており、私達が手足になって動いているのですが、なかなか浸透していかないのです。それはいったい何かと言う事を考えると先程言っていた、甘えない、頼らないと言う理論ではどうもうまくいかないと言う事を感じるのです。健康相談などに行って老人の方に接するのですが、皆さん元気な方は「絶対に脳卒中になりたくない、寝たきりになるのだったら死んだ方がましだ。お上の世話になりたくない」とおっしゃるんです。人の世話になりたくないと言う事は今もおっしゃるんです。私達は寝たきりとか障害者の所にも行きますが、その方々が

「死んだ方がましや」とおっしゃられる時に、自分がどう答えていいのか、何も出来ない人は駄目だと見てしまうと、そこでプツンと終わってしまうような関係が出来てしまう。「生きてるだけでもいいんじゃないか」と言う本が今度、看護協会から出されたのですが、何か新しい価値観の展開をしないと、今もうやっていけない時期に入っていると思うんです。自立と言う事と依存と言う事をもっとしっかり考えていかないと駄目だと思うのです。自分の足でしっかり立ってやっていく、自立と自分で律すると言う、自分で決めて自己決定権と言うか、自分の人生を自分で決めて行くとかの自立。今そういう事に対して援助していく技術がすごくいると言われていますが、保健従事者のはしくて、いろんな事を言っても上にはあんまり伝わっていかなくて、やる気を無くしたりもして、ここへ来たわけなんですけれども、いろんな職種の人達が、これからの社会の事をいっぱい考えているのに、一番動かないかん私達がこんなではいかんのかなと思いました。「保健婦さんってなんですか」と言われるんですけれども、私の方にも、「これしてます」とはっきり言われない辛さがあるんですが、現場には頼りたくない、甘えたくないと言う人の方が多いように思えるんです。人の援助を受け入れられないような人は、人にも何もして上げられないのじゃないかと感じる事があって、働ける内はいいけれども、動けなくなったら終わりだと言うようなお年寄りに対して、私はそうじゃないよと言う事を言いたいのでけれども、長く生きていく人になかなか言えないんです。アメリカ型の自立とは違って、日本の中の相互扶助、甘える甘えられる関係というのはすごくいいんじゃないかと最近看護の世界でも言われて来ましたが、サポートネットワークとか、自分自身に心安らげる人がいますか、自分を助けてくれて、自分を励ましてくれる人がいますか、と言う視点で人と人を見ていく事が、今盛んになって来ているんです。この間も、精神障害者の問題に取り組んでいる先生の講義を聞いた時に、精神障害者の人を後ろから社会に押し出すのじゃなくて、一緒に歩いて、何かがあった時に相談出来るような関係を作っていくって、困った時には相談にのると言うような形でないとうまくいかないと言う事が、20年位のその方の経験で分かっていると言う事に感動したのです。頼るとか、甘え

とか、依存とかと言う事をきちんと押えて、今井先生のおっしゃった、次のパラダイムの新しい概念の枠組みを作っていく、今の中間の理論を作っていないと駄目だと思うんです。私は今の社会と言うのは、男の人の論理で動いているように思うのです。今アルコール依存の事を取り組んでやっていらっしゃる先生があるんですが、アルコール依存と、仕事中毒と、煙草中毒も甘いものに対する過食症、拒食症とかも、全部根っ子是一緒だとおっしゃるのです。依存のメカニズムと言うのは、全部ベースが一緒だと言うわけです。俺が働くから家の中の事はしっかり守ってくれ、と言う昔からの役割分担では、今の世の中うまく回っていかないのですよ。私達は育児に悩んでいるお母さんに接する時、なんであんな事が応用が出来んのかなと思うけれども、高層ビルの中で朝から晩まで子供だけと付き合っ、旦那さんは朝早くから夜遅くまで帰って来ないし、相談出来ない中でやっていく核家族の女の人には、切実な問題なんですね。5階以上に住んでいる子供と、それ以下の子供と、遊ぶ友達の数が全然違うと言いますが、一杯問題があるわけで、もっと子供を生もうよと言うのはいい事だとは思いますが、私は素直に女としてそうだとは言えないんです。

司会者：大変いいご意見でありました。実は、これは福祉社会と言うのはいったい何だろうと言う事の根幹に触れたご発言だったと思うのであります。ちょっとだけコメントをつけておきますと、人の世話になりたくない、と言う意識の方がむしろ多いと言うお話でありました。アメリカ、イギリスあたりは福祉の先進国だと言われております。アメリカは1936年にSocial Security act社会保険法を作っております。イギリスは1947年National Insurance act国家保険法というものを作りまして、そう言う法律が出来て、そこに住んでいる国民がどう言う意識を持っているかと言うと、人の世話になりたくないと言うよりも、自分が国家の保護を受けなくてはならなくなったら、誰に恥じる事もなく、堂々と役所へ行って保護を要求する。この事が良いか悪いかは別として、日本では生活保護を受けると言う事は、何か恥ずかしい気持ち、隠す気持ちがありますが、そう言う意識がある間は本当の福祉社会はまだ到来しないだろうと思います。少なくとも、欧米では国民

の意識が違っていると言う事は、やはり日本に於ける福祉社会と言う事を考える時、ちょっと違うのじゃないかなと思います。日本は終戦後福祉の問題を考え出した、まだ暗中模索の状態でありますし、本当に国民の1人1人が福祉とは何かと言う事について、まだ理解がっていないのじゃないかと思うのであります。それから、死んだほうがましだと言うお年寄りがおられる。どうしてそう言う気持ちになったのかと言う事を、やっぱり私達は考えないといけないと思うのです。それはそういう環境におかれてそうになっていく。じゃそう言う環境とは何か？ 核家族で年寄りが阻害されていて、誰にも相手にされなくなる、いわゆる人格の否定が行われる、そこから老人ぼけと言うのが出て来るのです。そう言う家族制度とか、制度的なものは一度考え直す必要があるんじゃないか。そうじゃないと福祉社会と言うのは出て来ないのじゃないか。そのへんの問題も一つあります。私は専門化じゃなくて人から聞いた耳学問で、人格の否定が老人ぼけの重要な原因になるのかどうかよく分かりません。そのへんの所も福祉と言うものを考える一つの要素になるだろうと思います。死んだほうがましだと言う人がどんどん出てくる様では、まだ福祉社会は到来していないのじゃないかと思います。昨日、バズセッションで、福祉とは物を与える福祉ではなく、技術を授ける、自分でなんでもやって行けるような事を考えなければならないのじゃないか、と言う発言をなさっていた班がありました。これはまさに橋本さんがおっしゃった自立心を養っていく、これがやはり福祉の大きな柱だろうと思うのであります。自己決定権も大事だし、そこから甘えるなとか、頼るなとか言う問題も解決されていくのじゃないかと思います。今橋本さんの話を聞いて、それ位のコメントだけをつけて次のご意見を伺いたいと思います。橋本さんの今の考え方に対して、それは駄目だ、私はこう考えると言う意見があったら出して下さい。

河野一麿：老人はどうして自分でなんでもしにくくなるのかと言ったら、体力が下がって来るからで、体力と言うものを見たとき、生まれた時からだんだん発達して20歳位で一人前の体力が出来、また下降していくわけですが、一番理想的なのは、最後までその体力を維持していく事であり、これが出来た

ら福祉なんていらないうわけですが、そこまで働いて自分の力で生きられないわけです。そこで若い時から自分の体力を作っていく、いろんな分野で自分が伸び伸びと生きる事をやはり考えていかないと、人間らしく生きるエネルギーが沸いて来ないのじゃないかと思うのです。たまたま年取って、人の世話にならないかん時は、やはり素直に世話になると言う事が大事で、一生懸命努力していると素直になれるんじゃないかと思います。現実には精一杯生きる、そう言うエネルギーを蓄えていかならんとします。自分がお世話になる時になんで心苦しく思うかと言うと、今まで常に人にして上げてなかったから心苦しいのじゃないかと思います。だから出来る時には色んな事をして上げるという心構えが必要だと言うんです。福祉福祉と言っても自分の親を人に見て貰ってなんともない人が多い。自分の親と一緒に住んで、いろんな事を話し合い、自然に生きていく、そういう事をせんと、自分は働く為とかいって外に出て、親はしょんぼりしていると言うのが現実です。子供が何故増えないかと言うと、みんな豊かな生活をしたいわけです。子供が沢山いると生活が苦しくなります。だけど我々の親の時代には、苦しくても一生懸命子供を育てていった。もっと家族みんなが助け合って一緒にいくと言う事が必要じゃないかと思います。

司会者：有難うございました。河野さんのご意見も福祉社会の原点に触れる事でもあります。皆さん方が考えるのに参考までに申し上げますと、家族みんなが助け合っていく、これが本当は福祉の原点であります。アメリカやイギリスのように堂々と保護を要求すると言う事はいいことではありますが、淋しいだろうと思うのであります。昔は例えば飛騨の高山などに大家族制度があり、何世代にもわたる人が、一つ屋根の下で自然の脅威に耐えながら、お互いに助け合って生きておった。例えば赤ちゃんが生まれ、お母さんが野良仕事に行ったらおばあさんが助けてやるとか、病人が出たらみんなで面倒みるとか、年取って中風になったら従兄弟が面倒みるとか、血縁の愛情を以て弱者が出て来た時にそれを見守っていくと言う、これは確かに人間を上下の段階で位置付けてしまったから、封建的で悪いと言うのだけれども、福祉と言う視点から考えたら、河野さんがおっしゃったように、家族がみんな

面倒見ていくと言う事になれば、封建社会の大家族制度に福祉社会の原点があるんじゃないかと思うのです。例えば行政がいろんな施設を作りますし、又、作らないと駄目なんだけれども、立派な施設が出来て、お父さんお母さんがもし入られたとしても、それよりもどんなに貧しくても、自分の身近かな愛情を持って最後まで看病してあげられる方がいいのじゃないか。昨日のパネルディスカッションで松本さんが、死ぬ間際には本当に必要なのは家族の愛だとおっしゃった、本当にそうだと思います。どんな立派な施設に入っておっても、家族の誰にも見守られる事なくこの世を去ると言うのは本当に寂しいだろうと思います。そこには福祉はないだろうと思います。確かに施設はある、しかし福祉の心はないだろうと思います。私は大家族制度が福祉の原点だと言ったけれども、これは個人の権利を保証しなかった。戸主が絶対の権力を持っている、その代わり全家族を養う義務を持ってたんです。個人の平等に反すると言うのでそれを廃止し、そして個人の権利を平等に独立保障した、その為に核家族が出来た。だから、一对の夫婦があって、子供があって、その一つの生活は旦那さんが働いて来る賃金で賄う。そうなるともうおじいちゃん、おばあちゃんの面倒までみきれないと言う事になって来るわけです。そこで仮に同じ家に住んでおっても、お年寄りが阻害されていくと言う事になってくるのです。これは既に福祉の崩壊だろうと思います。封建社会を打破して近代社会に移って行ったその事自体はよかったんだけど、人間のやる事は必ずプラスとマイナスがあります。この事のマイナス面は何かというと、個人に権利を与えて権利の平等を保障したが為に、権利主張が横行する社会になった。権利主張のどんどん出来る健全者はいいいけれども、反対にハンディを持っていて権利を十分に主張出来ない人達は、本当にみじめな事になって来る。先程、橋本さんもちょっとおっしゃいましたが、女性の権利は随分高まったけれども、どちらかと言えば弱い側であった、女性の権利はまだ確立されていないという問題があります。今は男性の論理の社会でありますけれども、それは諦めないでほしい。今から200年前のイギリスの社会では、男性と女性とでは別の道徳を持っておった。と言う事は別の道徳教育をされておったのです。これはおかしいのじゃないかと言う事で

メアリー・ウルストンクラフトという人が「女性の権利の擁護」という本を書いたのです。これが200年にわたって今まで来て、それがやっぱり現在のイギリスやアメリカ女性解放の元になっている。この考え方は、その後サルトルの实在主義の考え方の底流に根強く流れている思想だと言われています。メアリーさんが言ったということは大変勇気のある事なんです。ものすごい迫害があったと思うんだけど、それを言い続けたと言う事はたいした事だとも思います。河野さんが言った生活が苦しいから子供を生まない、しかし自分の親達は生活が苦しくとも子供を生んだ、これは昔の大家族制度の福祉というのは、本当に血の通った暖かい愛情の中で自分達の仲間から弱者が出たら庇っていくという考え方が流れていると思うのです。私はやはり先輩のそういう考え方と言うものを、もういっぺん考え直す必要があるんじゃないかと思います。みなさん方がこれから激動の高齢化社会へ生き抜く為の一つの知恵になるかもしれないと思うのです。

森滋郎(R)：発想の転換も大事です。例えば私は精神薄弱の子供達や身体障害者の子供達もお世話しています。精神薄弱の子供達がやっと義務教育を終えて、普通なら有名高校、有名大学に入れてという親の心でしょうが、その精神薄弱の子供の親は不幸な親、気の毒な親だと僕らは思っとんたやけれども決してそうじゃない。薄弱の子供を育てていく中に、その親ごさんは素晴らしい幸福感を持っているのですね。それを僕いつも見てどきっとするわけです。私とこは精神病院で、わめくは、暇さえあれば着物を破るは、しょうのない子供もいるわけです。薬で押えといたら静かなんやけど、年取ったお母さんが面会に来て「先生、今日はうれしい。」「そう、どないしたん？」「今日は私がお飯やったら、にこっと笑ってくれた」笑ってくれただけで親がそんなに幸福に思うわけですよ。私らはそんな事と思うけれども、いつも暴れる子が笑ってくれたと言う事で、親ごさんは幸福感に満ち満ちて帰っていく。幸福と言うものはこうだとしみじみ思うわけです。皆さん方が幸福と思うのは、お金をうんと持って、子供がよい大学に行って、これが幸福だと思っているから、それ以外は全部不幸になって来るのです。違うんですよ、よい大学に行かなくても、お金持ちでなくても、幸福はどこでもある。こち

らの頭の切り替えなんです。今、福祉とかなんとかおっしゃっていますけれども、例えば明治時代だったら、ひねってもお湯なんか出ないやないの。今どこでもお湯が出る、それを当り前にしている。お湯が出なかったら不幸だと言う風に思うんだけど、それが当り前だったと、という風に頭の切り替えをして頂くと、不幸が素晴らしい幸福になる。私はいつも親ごさんを見て、幸福というものを考えることがあります。

司会者：有難うございました。今、森先生からいいサゼッションを頂きましたが何か他にございますか？

中山剛志：今の話、大変いい話だと聞かせてもらいましたし、又、河野さんの話もまったくその通りなんですけれども、私は前も言いましたけれども、ここ終わって帰ったとたんにギャップがすごくあるんです。例えば今おっしゃったような体に障害のある人は会社にはいてないですし、実際、企業に帰れば、例えばAとBとどちらを選ぶかとなったら、効率はどっちがいいやろと言う事になってしまいます。そうすると、さっきの話が全然生きて来ないんです。昨日パネルの時に出ましたが、学校では学則にはみ出た人間は駄目やとした方が楽ですね。うちの会社にも社則と言うのがありますが、かなり人間性を無視されている所があるなと思いつつも、子供の頃から規則にはまらん人間はあかんと教育されていますし、学校の勉強も早く計算出来なあかんと教育されたから、当然会社の中でも社員の人に話さなあかん時には早く出来る人がいいんですよとついつい言ってしまんです。最近それじゃあかんのと違うかと思う事がありますけれども、ここで話を聞けば聞くほどすごいギャップを感じるんですね。何故か言ったら、ここにいらっしゃるロータリーの方は確かにいい事をおっしゃいます。しかし会社とか自分の病院とかに帰えられたらいったいどうなんかなと言ったら、絶対効率とか生産性の話が出てしまうと思います。ここにおられる受講生は社員であったり、末端におられる先生だったりするわけですから、なんぼいい話を聞いてもうなづけない私がおるのも事実であると言う事も聞いてほしいと思います。会社はそうですが、先生でも看護婦さんでも、分業制がひどくなって来たんじゃないかと私は感じます。昨日、子供が好きだから先生になられた、それはいいんで

すけれども、仕事をしたいから自分の子供を託児所に預けて先生をされているんですが、子供にとって幸せはいったい何か？ お母さんと話をしている時じゃないかなと思うわけです。いつの間にか自分のしたいことが優先してしまって、本当にせんならん事が最近忘れてしまっているんじゃないかと思うわけです。会社でよく聞きますが、家族サービスの為に休むというのは有給休暇が出にくい、男性社会なんですけれども、男性はなかなか家庭のために休む事が出来ないというノルマを課せられてしまつたのも事実なんです。企業の中では今の話がなかなか直には通りませんけれども、そろそろ仲間の我々の意見も重要視して頂きたいと言うのが、私からお願いしておきたい事なんです。うちの社長に直接いうと困る事もあるんで、大きな立場から今ここでお願いしたい事なんです。

司会者：有難うございました。いいご意見だと思うのであります。会社というのは今、私が申し上げましたように、効率一本槍でこの経済大国を築いて来たんです。それは正に効率の論理に生きておるわけです。むしろそれ以外の論理を入れる事は、会社を阻害すると考える社長さんもおられるわけです。けれども、今みなさん方は会社の一つの歯車として動かざるを得ないだろう。けれども、いつかはあなた方が会社の管理者になっていく、その時には今のこの考え方は駄目だぞ、俺の意志が通る地位に立ったらそう言う形でやって行きたいという考え方の種蒔きをしておこう、芽生えるかもしれないし、或いは芽生えないかもしれない。けれどもそれだけの事はしておこうと言うのがこのRYLAなんです。一つ例を申し上げます。九州の水俣病の原因になる会社がございまして、そこに或る若いローターアクトが勤めておったんです。そのローターアクトはボイラーマンで、ボイラーを一生懸命炊いておったんです。このボイラーを炊けば炊く程どんどんどん水俣病の原因の水銀が海に流れだして行く、「ロータリーの皆さん、あなた方は職業奉仕とか社会に害悪を流さない為に色々な事をおっしゃるけれども、自分はこの立場に置かれてボイラーを炊く事を止めたら会社を辞めなきゃならない。この問題はどうするのだという」質問が来たわけでありまして。ロータリーとしては、現在は水俣病の原因になるものが海に流れているかもしれないけれど

ども、自分のいま与えられた仕事というものを一生懸命やりなさい。唯、漫然とボイラーを炊くだけじゃなしに、自分がいつれこの会社の管理的な立場に立った時に、絶対に止めてやろうと思いつながら炊く。同じ事をやっておつても、目に見えないものが大事だろうと思うのであります。1 昨年の R Y L A に岡山ノートルダム清心女子大学の学長さんが来られた時の話に、先生がアメリカで修行をしていられた時に、毎日食卓に皿に並べる作業をやっておられた。或る年寄りの修道女が「あなたは今何を考えていますか」「別に」と答えられたら「あなたは時間を無駄にしておる。同じ皿を並べるのだったら、いつれその場に座る人の為に、お幸せに、お幸せにと行って祈りながら置きなさい」。その言葉に大変教えられたと学長さんはおっしゃっておられました。そこに座った人が本当に幸せになるという祈りが私の信仰になった。皿を並べる行為は全く変わらないのだけれども、それにお幸せにという祈りを込めるかどうかによって違って来るといふ、大変いい話をなさった事を今思い出したのであります。だからボイラーマンがボイラーを炊く事も、あなたが会社の仕事を一生懸命やることも、唯、漫然とやるのか、この高齢化社会の問題や福祉社会の問題を心において一生懸命するのとは違ふのではないかという感じがするのです。今まで福祉の問題について重要な発言がありましたので、今井先生、何かそのへんの所を中間のまとめとしてコメントをつけて頂けたらと思います。

今井鎮雄(R)：大変みなさんが真剣にいろんな事を考えていらっしゃるのに感心を致しました。中山君のお話も現実に一生懸命生きようとしても生きられないんじゃないかという叫び、これももつともだろうと思います。その事について私達は今「中山君の考えは間違いだよ」と言えない、あなたのお話はその通りだとおもいます。唯、昨日、私が言った事を覚えていて下さっていると思います。私は会社と社会のいう本を出しましたね。これはアサヒジャーナルという今の日本の思想的な指導をしているトップの会社が、企業の社会的な責任をもう一度考え直さなければならなくなったという事をコメントしているわけです。昨日、私は、今皆さんは福祉社会という社会が効率の社会から変化していく中で、どっちに行つていいか分からないと思っているだ

ろうけれども、橋本さんが言われたように、新しい価値の体系を生んで来るという混乱の中であって、しかもそれは企業が基本的にはどちらが経済的かと考えた時に、効率という目先の事よりも、人間社会を豊かにする事の方がもっと効率がいいんだと言うことに気付きはじめた所に、私達の転換があるんだと。そしてその事を私達は両方から信じてほしい。先程の深川さんのお話のように、一人の人間の心の中にある価値の変化と一緒に社会それ自身も価値の変化を来たしていくと言う事を信じて、その方向に向かって諸君達の力を結集してほしいと言うのが一つの問題であります。私達が考える福祉社会とは何だろうかと言う事を、もう一度考えておきたい。私達のいう社会福祉という言葉と、福祉社会ということが逆になっています。社会福祉というのは、一つの制度として特別に私達の社会の中から、ある時には経済的な意味で、ある時には身体の障害等という形で、あるレベルから脱落した人を何とかしてもう一度救済していこうと言う風な制度が社会の中に仕組まれた時に、福祉という形で多くの施設であるとか、いろんな方法がこうじられていく。我々はそれを社会福祉制度と考えております。ところが福祉社会と言うのはどう言う事かと言うと、例えば、一人一人の市民が、今の状況の中で考えている幸福というものの自己実現と、幸福を目指すという共同社会を作ろうという所に、福祉社会と呼ばれる新しい社会の形成があるわけです。従って、この福祉社会と言うのには、皆の権利と皆の義務というものがあります。最初に行政に甘えない、自分達でやると言う話をして下さいましたが、それはどういう事かと言うと、どんなに福祉行政が充実しても、人間が自分の自由とか、自分の思いをもって自立をして行く事が出来なければ、言い換えると、自分の地域社会で自分の家族を自分達で守っていく事が出来なければ、そのような共同社会は福祉社会には値しないと言う事です。それはどう言う事かと言いますと、我々の自由という物の課題、我々がボランティアに自分達でそれを目指そうと言う事が必要だということです。もう一つ必要な事は、福祉サービスという物は行政の専売特許ではない、これも皆さんが言われたことです。それは家族が家族の面倒を見ること、友人が友人の面倒をみること、ボランティアがお年寄りの面倒をみること、いろんな意味で個人

から始まって、いろんな段階におけるその様なプログラムが重層的に多元的に我々の社会に現われる時に、初めてそれが福祉社会を作っていく、連帯の思想と言う事であります。今、皆さんがおっしゃった事は、大変重要な事だと思いますので、この様に整理をしておきたいと思います。そうすると、これからの課題が出てくると思います。子供の数が1.57と言っておりますが、ついこの前もう2、3年したら1.38になるという統計が出てまいりまして、そういう事実の中で考える大事なことは、我々の考える福祉社会というのは、一人一人が自分の中において最も豊かで幸福になると言う事を自己実現出来るような社会を形成する為には、社会のいろんなシステムが全部新しい価値体系をもって作り替えられなければならないようになって来ている。この事が今私達に問われている、それを担っていくのが若い人達なんですよ、と言う事です。何度も言いましたけれども、この余島で小児麻痺の子供達のキャンプを30年前からやりました。30年前に10歳だった子供達は今40歳になっています。10歳の子供達が集まってキャンプファイヤーを炊いた時に、私は「君ら将来何になりたい？ になりたいと言う物の為に一生懸命努力をせよ」と申しました。或る脳性麻痺でアテトーゼのある子供が「僕、絵描きになりたい」と言いました。正直なところ私は吃驚しました。でも手の使えない子供に「君は絵描きは無理だから、他のものになれ」とは言えませんでした。その子がなりたいと言うのです。「よし！ 君がんばれよ」とこう言ったんです。その書いた絵が今メインホールにある大きな“ばら”という絵なんです。彼は自分の手で書くことはとうとう出来ませんでしたから、足で書きました。あの絵は日展に入選し、彼は太平洋障害者美術協会の会員になり、彼が書いた絵をお金を出して買う人が沢山いるような立派な絵描きになりました。彼は日展に初入選した時になんと言ったか！「先生、あの時に、よしがんばれよ、と言ってくれたから、僕は一生懸命頑張って、そしてこの絵を書きました。私は絵描きで生きていける様になりました。ついては最初の記念の入選のこの絵を余島に寄付したい」と言ってここへ持って来てくれたのがあの絵です。私達はそういう意味で、一人一人のレベルにおける自己表現が出来るような社会、トータルな形で何か出来ないといけない効率の社会の

混乱の中であって、どちらを選ぶかは私達の責任であります。皆さん方がどちらに向かって歩くかによって我々の社会が変わって来ると言う事をひしひしと感じながら、それを福祉社会、言い換えたら、橋本さんが「福祉社会とは、福祉と言うものが或る価値の体系を持つ社会」と言われたように、それは文化としての体系を持つ社会であります。そう言う価値観を持った文化社会、これが我々のこれからの社会であります。

司会者：今、大変さわやかなコメントを頂き誠に有り難うございます。今井先生のお話をお聞きになって、何かご意見があったらおっしゃって頂きたいと思います。

山下京子：今井先生のお話とはちょっと離れてしまうかもしれないのですが、聞いてほしい話があるのでお話しします。私は重度心身障害児施設と言って本当に知能の面と身体の重複した一番重い0.6歳の赤ちゃんから出口がないので48歳の人までいらっしゃる施設に働いています。そう言う所に働いていると言うと「本当に意義深い良いお仕事をなさっていますね」と言ってくれる方もあるし、偏見を持って見られる方もいらっしゃるのですが、でもその中で働いている人間が幸せかと言うと、そうでもない時があるんです。この春に私が本当に信頼して素晴らしいと思っていた後輩が辞めていきました。つぎにどういう仕事につくのかと聞いたら「一生涯施設でだけは絶対働かない」と言って辞めていったのです。この子は、こういう施設で働く為にホテルでウェイトレスをして働いて、保育専門学校に3年間夜間で勉強し、非常に優秀な成績で大阪知事賞というのを頂いてうちに入られた方なんです。本当に仕事ぶりも最後の最後まできちんとしておられたのですが、「こんないい人が、何をどうこんなに傷ついて辞めるのか、やっぱりこの辞め方というのは、人生の挫折だなと思ったんです。」私自身も働いていて悲しい事が一杯あります。ある時、私は夜勤明けで兵庫医大という病院の前を歩いていたら、同じ職場の違う病棟の人が、こまちゃんという17歳の子を連れてタコ焼き屋の前にポーッと立っているんです。「どうしたの？」と言ったら、「こまちゃんが、タコ焼き食べたいと言っている」、こまちゃんは喋れませんから目で合図するんです。かつては暴走族だったこまちゃん

ちゃんは、半年前にオートバイの事故で脊髄をやられ不自由になり、喋る事も出来なくなって施設に入って来たんです。こまちゃんが目線がタコ焼き屋の前で止まったままなんです。私が「タコ焼き食べたいの?」といったら目で合図するんです。でも私達施設にいる人間は中にいる子に外部のものは食べさせられないのです。と言うのは集団生活ですから外部のものを食べさせて中毒なんか起こした時に責任が負いきれないんです。こまちゃんを連れていた子はいま勤務中ですから、タコ焼きを食べさせて上げられないのです。

「じゃ私は夜勤明けだから、食べさせてあげるわ」と言って一つ口に運んだ時に、こまちゃんがうれしそうに笑ったんです。その時思ったのは、半年前までは普通にコーラーだってマクドナルドだって、食べたいものを食べていたこの子が、施設に来た為に、私達もこの子にタコ焼き一つ食べさす事ですらドキドキしながらするなんて、こんな事があっていいのかって。一生涯タコ焼きなんて食べる事もなく生きていくのかと言う、そんな疑問を一杯抱えながらやっていて、本当に真面目な人ほどそこに行き詰まっていくのです。私も親に反対されて入って半年目に思った事は、これが親に反対されてまで来た仕事なのか。はっきり言って、子供達が要求する事に対して「駄目です」、外に出たいと言っても「今、人手がないから駄目」、家に帰りたと言っても「そんな我侷を言うてはいけません」、でも我侷じゃない、家に帰りたと言う当然の欲求でさえ我侷だと言って諦めなさいと言うしかない、それ以外言えないんです。私が本当に一番悲しかった出来事というのは、はるちゃんと言う私が見てた子があっけなく肺炎で死んだ時の事です。お父さんが引き取りに来られて「ここで葬式あげて下さい」、「せめてお家に帰らせてあげて下さい」と言ったら、「この子は赤ちゃんの時にこちらに来まして、近所でこの子がいる事すら知らない人が多いのです。家で葬式をしてもお焼香に来て下さる方すらいないかも知れない。それなら見て頂いた先生方にお焼香して頂く方が」とおっしゃったんですけれども、その時に、この人は地域に生まれて、その人が生きていたという事さえ知られず、田舎の小学校より小さい施設から出ることなく終わるのかと思った時に、私達のしている事は何だろう? もしかしたら私が死ぬとき天国に行けないんじゃないか

なって思ったんです。これはどう解決出来るのか分からないんですけども、お金をどんなにかけても施設で処遇されている人も、私たち働く人間も本当に満足して幸せに働いているかと言えばそうじゃない、福祉と言うのは、何故それをしなければならないかという所を、人間としての観点でみんなが持っていなかったら駄目だという気がするんです。人が生きていくと言う事は、相手に対する自分自身の愛とは何か、と言う事が分かっていなかったら、片手落ちになるような気がするのです。

今井鎮雄(R)：今の山下さんのお話、みんなも胸を打ったと思います。さっき僕は行政にまかせるのではないと言いましたね。この事は私達にとって大変な事です。行政が決めている福祉施設で働いている皆さんたちが、今のお話のように或る種のじれんまのなかでみんながいる、これをどうして自由と連帯の中で破っていくかと言う事が大事な仕事になると思います。私も体の不自由な諸君の施設を作りまして、理事長と言う事でありますけれども、唯単なる理事長と言う事でなしに、しょっちゅう行って子供達と出会い、時々は彼らが行きたいと言うので、いろんな所に行きます。行政からは色々な質問があります。例えば、シャンプーをしたいと言っても、一人の子供は「私は牛乳石鹸のシャンプーをしたい」、「私は資生堂のシャンプーをしたい」、「私は外国のがいい」、みんな当り前の事なので、「そいじゃみんな自分の好きなのを買ってこい」と言うわけで、それぞれのシャンプーを用意したら行政の人が来て「シャンプーの種類が多すぎる。一つにしろ」と言うので、私達は「これがみんなのニーズです」と反対するのです。タコ焼きが食べたいと言って食べさせた時、その責任はその施設長が負わなければならないけれども、あえて施設長がその責任を負う様な施設をこれから作ろうよと言いながら、みんなが努力を始めている所です。僕は現場の人の言う事はよく分かるし、行政の縦割りによって決まった施設の状況の中で困難をしている事は沢山ありますけれども、それでも僕が何故ここで言ったかと言うと、山下さんや又他の人達に挫折しないでほしからです。

一貫田達也：山下さん、どうしてそんな悲しい思いをしながらその仕事を続けているのですか？

山下京子：後輩が辞めて行った様に、子供達の事を親身になって考えれば考えるほどいたたまれなくなる時もあるのです。けどよく考えると、やっぱり違う、辞めることは出来るけれども、辞めたからといって現実が改良されるわけじゃないのです。それなら自分のやれる範囲でやっていった方がいいんじゃないか、あるがままの自分を捧げていく事によって、私をもっと先でみんなの欲求に答えてほしいと強く言える人間になれるかもしれない。今ここで逃げたら終わりだと思うのです。

岩本英慈：さっき山下さんは、自分は天国の門をくぐれないのじゃないかと言われましたが、山下さんは立派に天国の門をくぐれる人だと思います。がんばってほしいと思います。

堤康雄：話が元に戻りますが、先に話された橋本さんの考え方に私も同感です。私は精神病院に6年間、老人病院に約10年間、看護の方でご奉仕しております。5、6年前から訪問看護と言う事が叫ばれておるんですけども、私の病院では全然掛け声だけで実質的には0であります。何故ならば作っても銭にならんと言うことです。家族が老人の入院OKと決まったとたんにはほっとした喜びの顔です。もう退院の許可が出てます、迎えに来て下さいと言った場合のむっとした不満な顔、あげくの果ては他の病院を紹介してくれ、老人ホーム紹介してくれで、我々は啞然とするような状態です。病院にも、もう退院して家におってもいい患者さんが多数おります。私は現在の託児所の横に託老所を作ればかなりいいんじゃないかなと思います。最近、中間施設と言うのがばんばん立っておりますが、あれは老人病院と同じようになってしまいます。老人小荷物一時預り所と言う風な感じになると思います。現在、私の病院も中間施設を建設中です。建設につきあ或る程度の助成金は出ます。中間施設の場合は100人以上でないと経営が成り立たないそうですが、うちは50床です。院長は50人でもやるという考えで踏み切っております。ほんまの福祉でやる、和田島町の福祉だけの考えでやるそうです。橋本さんの考えに同感で、私も不満も一杯あります。じゃけん行政に頼っておれないので今のところ我慢しておるんですが、色んな事を考えております。今、看護婦不足と言う事が言われておりますが、捻った見方をすれば、看護婦が多過

ぎると思います。何故なら病院の数が多いから看護婦不足になるんです。医者が多い、病院の数が多いのです。余談になりませんが、NECのコンピューターでは600年後は今の1億の人口が700人になると言っておりますが、富士通のコンピューターによれば一人の人間の頭脳をお金に換算すれば300兆円の値打ちがあるそうです。みなさん自分の脳みそ大事にしてください。

司会者：有難うございました。いいご意見を拝聴致しました。私の方であまりコメントをつけるのもどうかと思いますので、ご意見がもしございましたら続いて出して下さい。

青木每祖：先程言われた中山さんの様に私も企業に就職しています。そこでどうかと言うのをちょっとご紹介します。私はいま横浜でアサヒガラスという所に行っておりますが、私自身は知らなかったんだけど、新聞を見てうちにこう言う人がいるんだと言う事を知ったと言うのがあります。それは私共の会社の労務関係をやっている部所で、出張者の為のチケットの発券を下さっている方が車椅子に乗られている女性で、両足がないのです。私も電話で喋っていて会った事がなかったので、丸っきり知らなくて普通の人と同じような感じでやっておりました。うちの事務所でも新聞に載ったので話したら「へえーこの人車椅子に乗ってんの」と言う感じでみんな全然認識を持たずにやってたわけです。一つうれしかったのは、それを知ってからでも同じ様に接している。そう言うところを感じて、今ちょっといい職場にいるなと感じました。うちにはもう一人、社員旅行で片足を失った車椅子の方がいられるのですが、うちは製造業ですから実際のワーカーとしては無理です。そう言った方が出来る仕事場に当然配置がえがありました。会社の階段の所にスロープを作ったりしています。今井先生の朝日ジャーナルの話の中にありましたが、今環境の問題についても会社やっていく上でそこに組み込まなかったら企業は駄目やと、お宅の品物は買えないよと言う事になっていて、じゃそれを使わん為にはこうやったらと言う事で私は技術の方ですから、その時はそう思っていないんですが、今こう言う話を聞くとちょつとは為になつとるんやなと言う感じは受けています。最後に昨日のC班の話になりますが、とにかく色々な事に先ず取り組まなあかんと言う事です。それを家庭

から先ずやって、子供の躰から取り組もうと言う事でいろんな事は出たんですが、まとめは出来なかったんです。

司会者：企業の事もありますが、今まで話が出て来た中で、やはり福祉という事はどう言う事かという、大変難しい事だろうと思うし、どんなに福祉の心もち。福祉社会になって行ったとしても、目の見えない人に目を与える事は出来ないし、足の無い人に足を与える事も出来ないと言う風に考えたら、人間の出来る事といったら本当に僅かなことしか出来ない。けども先程、今井先生のおっしゃった様に、どんなにハンディを持っている人でも、お互いに手を取りあって堂々と生きて行ける合意のある社会、これが福祉社会だろうと思うのです。だから山下さんがおっしゃった様に、いろんな事を体験すればするほど惨めになって行く事もあるだろうと思います。だからと言って諦めるわけにはいかないし、私達が生きて行く社会だから、やっぱりみんな知恵を寄せ合って行くべきじゃないかなと思うわけでありまして。行政に任せるのではないと言う事がございました。確かに行政も必要だろうと思いますが、行政だけでやると言う福祉というのはやっぱり冷たいし、入っておる人には淋しいだろうと思います。これは日本の福祉の在り方にも問題があるのですが、アメリカではむしろ民間のいろんな人達が力を集めて、そしてフォード財団やロックフェラーとか、そういうお金持ちも金を出しと言う形で、民間主導型の福祉が出てきて、そしてその後で1936年に社会保障法が出てきた。だから法律が出来る前に実態が出来ていて、どかんとその上に乗かって法律が出来た。ところが日本は国家主導型ですから、法律を作って何かしようとすると言う風に後先になるわけですね。国家主導型を私は悪いとは言いません。けどもその時に民間主導型の心をやっぱり入れて行くということが一つ大事な事じゃないかなと思います。いろんな事を考えながら暗中模索でやるよりしょうがないし、今井先生のお話なんかかなりそれについて先を見通すいろんな資料を提供して頂いていると思います。企業のあり方の問題も効率の論理でお金儲けばかりじゃ駄目だよと言う事は実はロータリーは80年位前からそういう事を言っているわけです。目先のお金を儲ける事ばかりをやっていると結局は駄目になるよ、企業と言うのはやはり社

会的責任を負わなきゃならないと言う事を言いながら80年間ロータリーはやって来た。ロータリアンの企業というのはいつもそれを心においていなきゃならないんです。一つの例を申しますと、例えば自分の会社からは出来るだけ公害を出さない、公害を出すような事をやったら、それはあの会社は駄目だぞと言う事になる。烙印を押されたら、その会社の品物を買わなくなる。それから、自分が作り出した製品には、絶対の責任を負う。だから、もし欠陥商品を出したら、誠意をもって全部回収をし、元の通りお客様にお返し下さい、これが一つの社会に対する企業の倫理の在り方だと言う事をいっているのです。じゃそんないい格好いっているけれども、その欠陥商品を全部回収して元のお客様の所へ返すという作業をやったら、その会社は計算上倒産すると言う事になった時にどうするのだという問題が出て参ります。それでもロータリーはやれと言います。この意見に対して現場の人達は、ロータリアンでも「会社潰しちゃったら奉仕もへちまもないじゃないか。社員が路頭に迷うようでは社長としての責任はとれないし、株主に対しては義務違反になる、どうしたらいいんだ」という声があった。けども、それでも80年前のアメリカのロータリアンはやると言う考え方もあったんです。そこまでやる必要はないと言う考え方もあった。いろんな考え方があるんです。今井先生がさっき提示された問題は、その事にちょっと関連があるんです。企業というのは、やはりそれをやり抜かないと生きていけないんじゃないかと言う事がいえると思います。じゃ、その計算上では倒産すると言う責任をとったその後ではどうなるか？ 日本の諺に「振りおろす太刀の下こそ地獄なれ。身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」というのがありますが、やってみろと言うんです。やり出したら銀行の助けもあるし、「お前そこまでやるんだったら助けよう」と同業者の助けもあります。それをやり遂げた後に何が返って来るか？ 絶大な信用が帰って来ます。そう言う事を行った企業は全部大成しています。そう言う実例をもって私達はこう言う事を説いているわけです。だから目先の金を儲けると言う目に見えるよりも、目に見えないそういう信用を大事にする心の問題。目先は損するかもしれないけれども、やがてそれが大きな利潤になって帰って来るだろうと説いています。こう言うのは一般

の辞書には載っていませんが、ロータリーでは職業奉仕と言うのです。その事をちょっとご参考までに申し上げておきます。

山田祥千子：今、目先のやりとりとか、目に見えるものをほしいから色んな事をすると言うのは違う、感謝が裏側になればと言うようなお話をされたのですが、昨日、色んな事を話している中で、特に高齢化社会になっていく中で、福祉は大事なのにいつでも行政の中では一番後回しになってしまうと言う話になりました。私は核家族に育っていますから、直接的な体験はほとんどありません。唯ボランティアみたてな形で、たまに社会福祉協議会のお世話でヘルパーに行ったりするだけで、自分が日々体験しているわけではなくて、そう言う人のつらさがちょっとピンと来なくて、みんなに話を聞いたのですけれども、昨日は高齢化社会の中の福祉について考えていたのですけれども、やっぱり人間結果がいつでもほしいですね、いつでもそれを求めていますか？ 例えば一生懸命がんばったらこんな事があるからがんばろうとか。私は学校の教師をしています、一生懸命子供が勉強するのは成績が上がったらいいとか、通知表に5が1ケ増えたらいいとか、いい高校に入りたいとか。大人が一生懸命働くのはようけお金が儲かったらええからとか、有名になれたらええからとか、そんな感覚で一生懸命働く一つの目的となってやっていく事が出来る。でも老人福祉とか言うのは、さっき障害者に関しても出口がないと言っていましたけれども、結果がないんですね。さっきスコンと死ねたらと言う事がありましたが、それが出口であるかもしれないけれども、でもこんな終わり方と言うのは満足出来て終われるものじゃないですね。心の中になんか「ああ、よう面倒みれてよかった」それが結果なんかなと思ってみますが、どうしてもそう言う結果の為には、人間は努力しないからどうしてもやっぱり後回し、後回しになってしまう。もし自分がそうなった時はどないしようと、問題を提起された時は考えるけれども、普段の生活のなかではそんな時はどうしても後ろになってしまうと思うのです。今回こう言う機会があって、こう言う事を考える事が出来たと言うのはよかったなと思うし、さっきお話の中で、自分らが知識を得てそれを後の人間にいくらかでも残す事が出来たらええんやと言う事があったんですが、私は

RYLAセミナーに行くって事は何がメリットかなと考えたら、ここ3日間の中で色々な事を知ることが出来たと言う事です。人間何か物をしようと思っても、知ってなかったら出来ないですね。だから、知る機会を貰っていると言うつもりで、このセミナーをとらえています。初めて参加したのは学生の時だったので、もっと勝手に若いからと言うので、何をしても許される状況だったんですが、今回仕事を持って自分に何が出来るかと考えてる時に、昔はやはりこんな事をしたら人が認めてくれるからとか、こんな事をしたら行政がお金をくれてバックアップしてくれるからとかがあったんですけど、この頃はあまり結果を期待しないで活動していく。悪い言い方をすれば自己満足だけを得る為に行っているかもしれないんです。でもそれが自己実現につながるのと違うかなと自分では思っています。何か結果を求めようとしていたら、すごいしんどい事が一杯ありますね。うまい事いかなかった時に悩まなあかんし、でも人間だから失敗することもあると私は思っているし、あかん事はあかん事、まあええやんかと言うちょっとずるいかもしれないけれども、甘えた様な考え方で何をする時もしています。ボランティア活動をしている時も、失敗したらもう1回考え直したらええと言う考え方で取り組んでいます。昨日から高齢化社会の中で福祉と言う事を考えて来たんですけど、何か一生懸命人の事を考えてしたら、それでええんと違うかなと思うんです。席を譲って上げる事だってそう違うかなと思います。席を譲るそれだけの事かもしれないけれども、心が相手にいけばいいのと違うかなと。これも一つの福祉と違うかなとここへ来てから考えたんです。ここへ来るまでは、今余暇と言う事が盛んに言われていますが、日本人は余暇の使い方がみんな下手やから、余暇を老人福祉に使ったらええんと違うかと、実は思ってたんです。昨日、色々話を聞いていたら、ああ言う問題は穴埋めで出来る事ではなく、日々の生活と一体化していく事なんやと教えてもらいました。そやから言って、私が何が出来るかと言われても、これが出来ますと公約みたいには言えないですから、何かちょっとづつ自分の心を相手に与えていけたら。自分もこれからあっちこっちでがんがん頭をぶっつけながら、そのうち何か出口が見えたらいいし、出口が見えなかったら、はずれた籤だった

んかなとそれ位の気持ちでやっていかないと、頭で一生懸命考えたって、結局何にも出来ないんと違うかなと思うんです。みんなR Y L Aに来たから帰ってがんばらなあかんとか、地域でニーズがないから出来ないとか言っていますけれども、そないしゃっちょこぼって考える事ない、出来る事だけしたら、それは自分で精一杯やっている事やし、一生懸命生きている事と違うかな、そやってたら自分も心豊かになれるし、人も心豊かになれるし、だんだんその輪が広がってええなど、ユートピアみたいな夢みたいな事を考えていけますけれども、そういう事を3日間の間に勉強させて頂きました。いろんなお話を聞かせて頂いてよかったと思っています。

司会者：ありがとうございます。今山田さんは普通人間はいつも結果を求めて事をする、言わば何かのゴールに向かって行動していくけれども、福祉の社会の問題となると結果が見えない。その時にどうするのかと言う疑問を投げかけられて、自分としては結果はあまり期待しないで、出来るだけの事をやったらいいんじゃないかとおっしゃってるわけです。山田さんは国語の先生ですから、教育の仕事と言うのも終わりのない仕事です。そういう生活環境からの考え方もおありかとも思います。それでそんな事をおっしゃったんだと思います。結果が見えなきゃどうも出来ないと言う様な方いらっしゃいますか？ もしあったらおっしゃってください。そりじゃ今山田さんがおっしゃった事について何か？ じゃC班、D班は大体聞きましたので、B班この事だけはと言う事がありましたら……。

井口光児：昨日はそれぞれの班の方がおっしゃった様な事を、我々も考えていたのですけれども、一つ最初におっしゃった行政に頼ってはいけないと言う事とは違いまして、ボランティアの善意の行動と言うのが、行政に引っ張られる事は具合悪いのじゃないかと。だから頼りすぎると言うのもしっかりした活動が出来ないんですけれども、でも行政と民間とがうまく協力しながらやって行かなければいけないと。中に行政の仕事をしていられる方がいられてうまく行政を使って下さいと言う御意見を頂いたんですけれども、それが別々になってしまっても具合悪いので、そういう協力態勢の中で何をするかと言う事は、結局、今盛んに言われているハンディキャップを持った人々、

或いは高齢者の人々の理解から始めないといけない。何を望んでいらっしゃるのか？ 何が今ほしいのか？ と言う事を理解して行って、そして更に考えるならば、介護している家庭の方、それを取りまく人々への心配りを我々はやって行ったらどうかと。こう言うセミナーに参加して、何かやらなければいけないとか思っても、なかなか出来ないけれども、先ず意識の、心の問題からやっていこうやないかと。我々は地域に帰って、又、地域の人々と接するけれども、お金や行動じゃなくて、こう言うセミナーで学んだ心で洗っていこう、広めていこうと言う話し合いをやったんです。

司会者：行政の事をちょっとおっしゃいました。先程、私が行政が福祉をやる
と冷たいと言う事を申ししたと思うのですけれども、言葉が足りなかったと思う
のです。誤解を招かない様に申し上げておきますと、それは労働基準法と
言う法律がございまして、それを福祉施設の場合にも厳密に適用して行くと、
細かい所に心がいき渡る所まで出来ないと言う事が出て参ります。その
へんのところの可能性があるから、冷たくなりがちだと言う事を申し上げた
んで、行政の作った福祉施設と言うもので働く人達に、福祉の心があればそ
れは温かい施設になるわけであります。ちょっと言葉が足りなかったので申
し上げておきたいと思えます。いよいよ時間がなくなりました。A班の方で
一言何か？

片井祥雲：色々の話を聞かせてもらいまして、先程の堤さん300兆円の脳が喜
んでくれた話を一言致しますが、人間生まれた環境も育った環境も同じ人と
言うのはこの世の中に絶対一人としていません。ですから、見る事も思う事
も、聞く事も考える事も、する事も全部違います。しかし人間の世の中には
色んなルールもありますでしょう。色んな決まりもあります。人間が生まれ
てから死ぬまでの一挙手一投足無駄と言う事は何もないと言う事です。これ
が非常に大切な事じゃないかと私は思います。そしてやはり無駄とは言う事
は何もないんだと言う事さえ心にあれば、のびのびと自分の思った事を心に
暖める事が出来ます。そうすれば目先にとらわれずに、大局を見る心でこれ
からのリーダーとしての生活を送っていけるんじゃないかと思えます。人生
無駄と言う事は何一つない、そう言う心さえあればどんな災いが来ても福と

なす心となります。そして喜びが来ればそれはもっと素晴らしい喜びとなす力となるんじゃないでしょうかと思います。この話をしましたら300兆円の脳が喜びましたので以上で終わらせて頂きます。

司会者：片井君、有難うございました。私の代わりに素晴らしいまとめをやって頂きました。心から感謝を申し上げます。最後に今井先生まとめの事をちょっとお願いしたいと思います。

今井鎮雄：先程からみなさんのお話を大変感動をもって私も伺っておりました。私は最初に申し上げた様に、いつも私達がみなさんをお願いするんだ。時代が新しく変わって来た時に、私達もっていたルールではやっていけない事が沢山出て来ている。それは次の時代の人達が新しい時代のルールを作ってやったらいいのかと言うと、そうはいかない為に色々な悩みや問題を持っています。しかもそれを越えて行くのは、若い皆さん方でないと出来ないで、その事について是非お願いをしたいと言うのが私達の気持ちでございます。例えば、ロータリーの事を考えた時に、ロータリーは職業奉仕と言う事をいいます。私達はそれぞれ違った職業の人達が集まって来て、一つの地域社会を作って来る時の一番大きな問題は何かと言うと、私達の役割をそれぞれに決めて、それが私達の地域社会を支えると言う事です。ところが、かつての社会と言うものは、お互い同士がみんなで村でもってやっていたものから、違った職業の人達が支えあっていくと言う社会に変わって来た。こういう社会を作りながら、しかもそれを機能的にやっていくのはどうしたらいいのかと言う事を考えて来た時、そこには非常に大きな価値の転換があります。エーリッヒ・フロムというアメリカの社会学者が“To Have or To be”という言葉を行いました。日本語に訳されて「生きるという事」という本になりました。それは何かと言うと、お金を持つこと、地位を持つことと言う意味で一つの社会が成り立って来たものから、そうではなくて人間としてどう生きるかと言う事を考えるような価値の転換をしようじゃないかと言うような事を考えながら言った言葉であります。実はロータリーも一つの価値の体系であります。じゃその価値の体系と言うのは何か？ 損か得かという事から、何が正しいか何が正しくないかと言う事を考えていくことで

すね。実は子供の権利宣言というものが何度も何度も出されているにもかかわらず、日本でも子供の権利宣言というものが出た時に、それを批准するという事になると問題がありました。それは日本の法律が子供の権利を認めないで作って来た法律でありましたから、子供の権利を基本的に認めようと言う時に、一つ直さなければならない。子供の権利を認めたら日本の学校教育も色々問題がある、そう言う事の為に、未だに子供の人権宣言の批准を日本でやっておりません。もっとも日本だけじゃなくて、どちらかと言うと先進国はやっていないのです。ところがもう一つは、つい昨年アメリカで「アメリカの障害者法」という法律が通りました。これは大変な法律でありまして、体の不自由な人が出かけて行く時に、例えば食堂で車椅子でもって食べるスペースをちゃんとおいておかななくてはならない。この頃は車椅子で入るお手洗いの事はみなさんよく分かっておられますが、食堂だろうとバスだろうと、車椅子で上る時にはリストをつけないと駄目だと言う事で、この為にはどれだけ大きなお金をかけなくてはならないか。乗る人の数から言ったら僅かな数かもしれませんが、それに変えていかなければならないと言う事は、今までは私達の持っている価値の体系をもっと基本的な人間の問題で考え直そうという世界の動きであります。私はその事に期待していると言う事でもあります。それはロータリーが1905年に出来た時から、或る意味で発展して来た大きな願い、人間の側に立って考えていくと言う願いでありました。損か得かと言うよりも、何が正しいか正しくないかと言う尺度で、新しい世界をもう一度再構成していく様な時代が21世紀という時代ではないか。それを担っていくのは大変困難であります。皆さんですよ。同時にお願いしませうのが私達の願いです。もう一つ、さっき行政の問題がありましたが、これは前のRYLAの時にこんな事をお話しました。プライベート私的機関とパブリック公的機関とに分けた時に、何か日本では行政が公的機関みたいに思われるがそうではない。行政は“Governmental”だと言う事なんだと、だから、行政とプライベートが一緒になって、私達の地域社会のパブリックな物に挑戦をしていく時代になったと言う風に考えて頂く。だから、何方か行政の人が「行政をうまく使ってくれや」という言い方をされたのはその事でありま

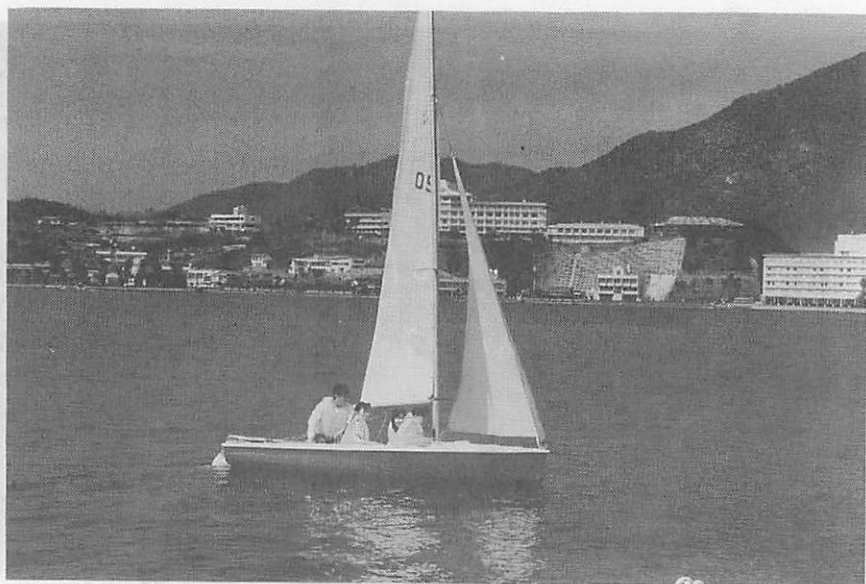
す。我々はもっと広い意味で人間の事を考えながらgovernmentalな方の努力をしながら、大きな地域社会を作っていくと言う仕事がある。私はそういう意味で、福祉社会と言う事が先程いった様に、総ての人の幸福の自己実現を願う社会である事だと想定した時に、その事に対する大変な努力がこれから始まるのであり、皆さんに期待しております。皆さんの色々なお話を聞かせて頂いて大変有り難かったと思います。ありがとうございました。

司会者：どうも有難うございました。本当に皆さん方素晴らしい意見を出して頂いて有難うございました。ロータリアンの私達も色々な事を学ぶ事が出来ましたし、このRYLAセミナーが明日への心の糧になればと思うのであります。心から感謝と御礼を申し上げましてこのセミナーを終わりたいと思います。どうも有難うございました。



参加者感想文

... (mirrored bleed-through text from the reverse side of the page) ...



倉本 勉（1回）

久しぶりに余島へ帰って来て、懐かしい友に再会し、新しい友に出会い、本当に幸せな時をすごしました。みなさんの話題が豊富で色んなことを学びました。

梶浦さんのお話では、キリスト教、ロータリーの精神などにのっとった人生訓をお聞きしました。今すぐには実感が湧かないところもありますが、ひとつひとつこれからかみしめていくべき言葉ばかりです。

今井先生のお話では、世界の移り変わりの大事なエッセンス、問題点を指摘され、私たちがこれからどうすべきなのかという問いを投げかけられました。グローバルな視野で、大局的な見方で、物事を考える機会を与えてくださいました。

バズセッション、パネルディスカッション、キャビンタイム等、たいへん有意義に楽しく参加できたと思います。

これからも、こういう、たいへん貴重なセミナーを多くの若い人々に分け与えていただきたいと思います。

山本 邦男（1回）

久しぶりに余島へ来て、島の様子が全く変わってないのがとってもうれしかったです。

また、多数のロータリアンの方々の笑顔を久しぶりに見ることで、大変うれしく思いました。

今日までの年月は、あまりにも早くすぎ、己れを鍛え、磨くことができたであらうかを考えてみたが、満足な行いは、これと言って無かった様に思う、でも今回お会した祥雲氏の言葉「人生に無駄はない」というのをお聞きして、正にその通りではなからうかと思える様になってきました。

これからも微力ではあるが、少しでも善き友と交わり、誠実で、子供に恥じないで話せる父親として暮らしてゆきたい。

（追） 久しぶりのキャビンタイムと、明日は最終日というのも手伝って、明け

方5時まで皆とすごしてしまい、少々目頭のおも〜い状態で書いています。楽しい機会を与えて下さった皆様に感謝しております。

1991.3.31 Y.Kunio

荒木 一生 (1回)

なつかしの余島にもどってきた。今回はライラセミナー終了者のためのアドバンスコースということで参加させていただき、我がD班はすばらしい人たちが集まり(他の班もそうであるが)なにしろ盛り上げ方がうまい、はっきりいって全員しゃべりである。あの10数年前の第1回セミナーの時と同じように初めて会った人たちが、まるで旧友のように語り合えたことがうれしかった。

ふざけるときは大いにふざけ、そしてバズセッションとなればポイントをついたするどい意見がとびかい、まことに有意義な3日間を僕に与えてくれた。現実にはきびしく、理想を語るだけでなく、自分にできる範囲から奉仕をやってみよう、まずやるのが大切である。

僕は自己表現がアンケートでは一番初めになったが、それは人は生きていること自体一つの自己表現であり、愛とか自己犠牲奉仕の心などが自然な感じで表現できたら素晴らしいと感じたからである。激しく変化する現代社会において奉仕の中に遊び心をアレンジしてやってゆきたいと思う。

凧 益 秀 (1回)

一人一人がそれぞれの日常の悩みと、希望を持ったまま、この余島に来島、意見をぶっつけあううちに少しずつふくれていく友情。以前に参加して知り合った友、そして今回新しく生まれた友。ライラの友として自分の頭の片すみに忘れずに、又、深くきざまれている。

今までの自分自身、そしてこれからの自分の姿、どのようにして行動し、どのような結果が生まれるのかは、わからないが、でも、このライラセミナーに参加出来たので、少しぐらいは今までの自分とは違った行動がとれるような気

がする。梶浦先生の講義の中で“わしがやらねば誰がやる、今やらねばいつ出来る……”と教えていただいた言葉のように自分が出来る小さな事から1歩足を前に踏み出せるように思う。人にでも多くのやさしさを持った人が、又このライラに参加でき、地域に帰ってそのやさしさの輪が少しでも広がる事を願ってやみません。

この素晴らしいセミナーを計画されたロータリークラブ、ロータリアンに感謝し、又、再会できる事を希望いたします。

ありがとうございました。

栗本啓二（2回）

11年ぶりにライラに参加出来て非常にうれしかった、残念なのは同期生の方々が参加されてなくて、思い出話が出来なかったが残念でなりません。

今回は、OBの方々にリーダーや人生においてもOBの方々がおられ、大変な勉強をさせてもらった様に感じます。また、本日より初心にかえって1歩進む日々を過ごそうと思います。

私は、昨年ライラの案内通知が来た時には、早く行きたいと思う心と神様がもう一度余島で勉強をやり直せと言われていたのだなあ〜と思う心の二つの面で少し複雑な気持ちでしたが、やはり来てよかった。

身体は歳をとって行くけれど、心はヤングリーダーでありたいと常に思っています、ライラに参加して11歳若くなったと思っています。

お世話下さいました方々にありがとうございました。

また、今回の様なライラがありますように!!

中村圭一（3回）

久しぶり(10年ぶり)に余島へ来させていただきました。磯の香りが大変なつかしかったです。マンネリな生活をしている中で、ロータリアン、受講生の方々に接し、又、新たな風を感じた気がします。明日からの仕事に、ボラン

ティアに生かしていきたいと思います。ただ残念なのは、3回生の参加者が少なかったことです。

宮本益雄（4回）

今、午後5時、あと少しで3月31日の夜が明けようとしています。いつもなら、会社での仕事が始まる時間なのに、今は、今日で4日目で4回目の帰島？の朝を向かえようとしています。

1回目は、第4回のRYLA、もう9年も前、だれ一人知る人がいない余島へカブスカウトのリーダーをしていたおかげでやって来ました。

2回目は「バスの会」（我が4回の同窓会の名前）の何回目かの同窓会、お腹の大きかった我が嫁さんも一緒にやってきました。

3回目、3年前第10回のRYLAの時にOB会が開かれた時、前回、嫁さんのお腹のなかにいた長女寛子を連れて2人で来ました。

そしてこの4回目、最初に参加した時よりグループの仲間の年齢差は倍ほどに広がってはおりましたが、夜を徹してのキャビンタイムはやはり余島ならではの感覚でしょうか。

初めてあったとは思えぬ懐かしさを感じる友、又、その人との共通の友人がいたり等々……………、他の会では味わえない余島の味、何度訪れても、いつも新鮮な気持ちを持たせてくれる余島、久ぶりに訪れても、昨日、別れた友のように迎えてくれる余島、いつも新しい友を作ってくれる余島、いつも友情を暖めてくれる余島。

そんな余島、陰でRYLAをささえてくれているロータリアン、and余島のスタッフに感謝。

そんな余島

そんなRYLA

イヤサカ

弥 栄

西 勝 秀 (4回)

イースターおめでとうございます。

こんな自分でさえ、9年ぶりに、余島に再び帰ってこれる。こんな素晴らしいことがありますか。

9年の年月は確かに自分を変化させてゆきます。人は時の重みに持ちこたえ耐え忍ばなければなりません。

余島には希望があります。日常生活で忘れてしまいがちの希望です。

ほんの少しの勇気を持って生きてゆくことが信じられる所でもあります。

感謝、この一言の他に何もありません。ほんとうにありがとうございます。

一貫田 達也 (5回)

“余島”私のふるさとになりました。

“RYLA”私の心のよりどころになりました。

何年ぶりにRYLAセミナーに参加して、またあらたに前に進めます。

講師の方々のご講演を拝聴して、また仲間と話し合った中から、大切にしていかなければならないものが見えて来ました。

このような機会を与えて下さった多くの方々に感謝します。

“ありがとうございました”

この言葉だけしか、浮かんできませんでした。

河 野 一 麿 (5回)

セミナーの案内状を頂いた時、私の頭に次の言葉が浮かびました。「ロータリアンは、頼まれた事は必ず実行します。そのために十分な時間を取って連絡するのです」と云う菊沢先生の話された事を、懐かしい思いと一緒に……。

また、それにしても、沢山の費用をロータリーの方に出して戴く事が少し心苦しくもあります。

私のスポーツ少年団におけるボランティア活動は人の為になると言うよりも

私身の人生に豊さがもたらされるところの自分の趣味を通しての少年や青年、また同士達の交わりであり、学びの場でもありますので、人様からほめて頂けるほどのものではないからです。

しかし、本当に心を空にして、2泊3日、人と我と共に語り合うことができることは、私にとって幸せなことでありますことをロータリークラブの皆様へ感謝すると同時に一層の精神努力を肝に命じるところでございます。

鈴木和彦（6回）

やはり来てよかった、私は太子町内で町内の小学校生を対象にキャンプ、レクリエーションを通じ、自分なりに人生での生き方、考え方を教えています。また月に2回、高校生～青年で有志の会合を持っていますが、精神的にRYLAのようにハイレベルな集団なのではないので、このセミナー(アドバンス)を受けるたびに、もっとがんばらねば他の有志諸君も精神的にハイレベルに持って行ってあげたいのですが、月日が経つと私も日常生活で徐々にレベルが落ちていくのが自分自身でもわかり、何とかしなければならぬと思っている私です。

梶浦先生の、わしがやらねば誰がやる。今やらねばいつ出来る。一人では何も出来ないが一人が始めなければ何も出来ない。今度の部会で私なりに他の有志と語らいたい。

中山剛志（6回）

何もわからず参加した7年前とくらべれば、今回はまわりもよく見えて人の意見も素直に耳に入ってきました。

余島から元の生活へもどって、ここで感動した他人への愛情が、今までの7年間でほとんど姿を変えずに、自分の行動の元になっていたことを、今回あらためて見つめる事ができました。ありがとうございます。

今回も同じ班になった人たちが本当に元気で明るく、キャンビタイムも初日

からバカさわぎができましたが、その中にも、キラリと光る話がゴロゴロころがって、「この話は、帰ってからすぐできるぞ、自分が今困っている事には、こんな答えもあるんじゃないか」と考えられました。

ライラセミナー自体は、私の普段の生活の中とはギャップがありすぎるのも事実ですが、同じ班の中野班長、河野さん、北岡さん、そしてD班のみんなが私に身近かなカウンセラーとなって頂けたようです。

また、みんなでお会いしましょう。次は篠山で……。

堤 康 雄 (6回)

7年ぶりに、なつかしい余島に来たことに感謝しつつ、第1日目は同期の人々と旧交をあたためあいました。

第2日目の2人の先生による基調講義は、私の頭脳にカルチャーショックを与えました。(いい意味において)

清く正しく強く豊かに生きて行こうという姿勢の梶浦先生。世界的視野で常に物事を考えて、そして実践なされている。今井先生の2人の御講話は、これからの人生にやる気と自信を湧く思いになりました。

また、キャビンタイムで出会った片井祥雲さんのお言葉「清濁合わせのむ心境」「人生無駄はない」の話はこれからの私の人生にとって有意義なものでした。

ロータリーの役員の皆様、色々とお世話になりありがとうございました。

井 口 光 児 (6回)

7年ぶりに余島に帰ってきて、3日間、自分の心を本当にリフレッシュできたかが、多少不安です。地域に帰り、ここで学んだことをフィードバックするつもりです。

自らの仕事の他に地域の活動に汗を流していらっしゃる方々とは異なり、私は教育に奉職しているので、学ぶところは多い3日間でした。様々な仕事に就

いている人たちや、人生経験の豊富な人々と語り合い「教師の視野の狭さ」が少しでも広がればよかったと思っています。

ただ、教師1年目に参加した若かった頃感じていた世の中の様子と、今の世界の様子があまりにスピードが早く変化して、ついていけない部分があります。

親の変化や、その子供の変化に驚くことばかりです。しかしこの地区には、少なくとも余島でセミナーを受けた人たちは、理解してくれているということをはげみにして、また初心に帰って、努力していきたいと思います。

この企画をした下さった人たち、また、地区のロータリアンの人たちに感謝します。またこんな機会を与えて下さることを祈りつつ……。

ありがとうございました。

岩本英慈（6回）

7年ぶりの余島も、あと数時間でお別れ。今回も、素晴らしい人たちと出会う事ができ、朝まで語り合う事ができて本当に良かったと思っています。

4月1日より新しい職場になりますが、この3日間で、今までの整理と新しい備えのための時間が持てた事は良い経験だったと思います。

個性ある仲間たちや、同じ様な立場の仲間と過ごした3日間を原点として、まちづくりの心と行動を持ちつづけて行きたいと思います。

なお、職場は変わっても「うだつのあるまち・わきまち」のご案内はいたしますので、お立ち寄りの時にはぜひお声をおかけ下さい。出来る限り最大限の御案内をいたします。

最後になりましたが、ライラセミナー運営委員会、余島のスタッフ、セミナー参加者の皆様方のご繁栄とご健康をイースターの朝にお祈りの申し上げます。復活の朝にふさわしい陽光が窓からさし込んで来ました。102キャビン元気を出ていきます。

1991.3.31 A.M.9:19

黒田 信幸（6回）

期待に胸ふくらませ参加させていただいた今回のライラ「リ・ユニオン」だけあり、内容密度はさすがに濃いと実感させられました。しかし、終わりも近づいた今、参加前に考えてきたことがすべて消化できず残念にも思っています。2泊3日でしたけど(できればもっと長い期間でゆっくりと考えてみたかった)成果はあったと思います。また地域社会に帰って、今回得たそれをゆっくり思い出し、考えて、これからの指標ともしたいと思っています。また特にA班の方々には色々とお世話になり、有難うございました。この出会いをいつまでも大切にしたいなぁと思っています。

芥原 実（6回）

久しぶりに余島に帰り大変感動しました。二度と余島への用事はないと思っていましたが、この様なライラに出席できた事は、又自分の何かに役立つと思います。仲間の発表にも感動しました。10年後に又、何か集まる時があればと思っています。

ライラ 余島バンザイ！

中野 昭示（6回）

このセミナーの案内状が来たとき、7年前を思い出しました。6期生で参加した私は、何と楽しい、又、高いレベルのセミナーだったという思い出が頭にかけてぬけました。まよわず参加に○をつけて、ハガキを出しました。

今回参加して思ったことは、1回～12回までは、いやいや来た人が何人かいたと考えられました。(だまされて来たとか)。しかし今回は、すすんでもう一度行ってみようと思うつわものが集まってのセミナーなので、又、各団体が指導される人なので、変に気をつかうこともなく、皆がすぐ仲良くなり、話ももり上がり、やはりすばらしいな、来て良かったなと感じています。

「RYLAで得た経験は、この後、地域に帰って、すぐにどうこうというも

のではないかもしれないが、私に元気を与えてくれた事は事実で、そして今後は、仲間、子供たちに伝えて、いっしょに勉強していきたいと思います。

ほんとうに、楽しかった。

関係者の方々、ありがとうございました。

高 島 清 明 (7回)

13回RYLA・アドバンスコースに参加させていただいて、感謝の念が絶えません。ただ、私の7回の方の参加が少ないのが残念です。

私は、このRYLAのテーマが、おそらくGulf CRYSISだと思っていましたが、そういう話題にはならなかったようです。日本はやはり平和なんだなぁとつくづく思いました。今井パストガバナーの話の中で、ベトちゃん、ドクちゃんの話があり、ショックを受けました。確かに、ベトちゃん、ドクちゃん以外の同じような子供たちに、私は何もしてやれないのです。何かしてやりたいけれども、何もできない。私が大変腹だたしく思います。平和ぼけの中で、本当に手助けが必要な人々への手助けの仕方もわからないのです。このRYLAセミナーでは、福祉社会の大切さや、愛の心や、概念を教えてください。しかし、ベトナムの例のように何もしてやれないのでは、気持ちだけがから回りしています。RYLAの先生方、世界で見てこられた事、聴いてこられた事をわれわれに伝えて、何をしたらよいか教えてください。そうする事で少しでも国際社会に役立ちたい。私は、このRYLAに参加をさせていただき、こう強く感じました。ありがとうございました。

追伸：7回の時いただいたオリーブが、2階の屋根を越えようとしています。

いつまでも大切にしていきたいと思います。

坂本正徳（7回）

これで3度目の余島となります。

毎回思うのですが、様々な考え方や価値感の方々と話し合い、意見を交換できる貴重な場所がここにあります。

今回も福祉関係・政治問題等についての数多くの事項について勉強させて頂きましたことを感謝します。

先の項、地元の友人宅で彼の奥さんが、深夜の湾岸戦争のTV速報を見て、「私は子供を産みたくない。今後の世界情勢や人間社会の移り変わりでは、産まれても不幸になる。そんなことなら生まれてこない方が幸せなもの」と言ったんです。私は人間それぞれの価値感を持っていますし、それを尊重されるべきであり、どんな価値感でも否定は出来ないと思っていますので反論はしませんでした。でも私は「不幸ならば産まれない方が」という考えではありません。たとえ出生する次の日がノストラダムスの言う“怒れる神の降りて来る日”であっても産むべきであると考えています。人生を一生を闘うチャンスには、チャレンジすべきであり、平等に万人に与えられたものです。「生まれてこない方が」と言う考え方は賛成できません。

日本では、子連れ心中を同情を持って受け取る感があるように思えますが、外国、特にアメリカでは、自殺と子殺し(殺人)でしかないそうです。まさに、その通りなのだと思います。私には、幸いにも家や生活をまかなえるだけの田畑があります。将来出来るだけの子供をもうけて、他人に迷惑をかけないような人格をそなえた未来人を育てたいと思っています。

私には、ハイレベルな考えはありません。そんな力もありませんが、明日を生きる事を全員で真剣に身近かな所から考える事が出来ないと、真の福祉は始まらないと思います。

きれい事ばかりで、まとまりのない文章で申し訳ありません。ロータリアン及び参加者の皆さん、どうもありがとうございました。

今回のセミナーでよく湾岸戦争や派兵問題についての話が出ました。その事について、薄い知識で少々意見を申し上げます。

この戦争で思ったことは、政教一体の思想の恐ろしさです。過去何度、政治

の根底に入り込んで宗教のための戦争があったことでしょう。大変難しいことではありますが、今後世界が一つになるためには、宗教的思想と政治の分離、つまりは政教分離型の国家形成が必要だと思えます。宗教は、人民の心の寄り所です。大切だと思えますが、決して政治に入り込むべきではないと考えます。

派兵については、「やれ反対だ。行くなら丸腰だ。」等々、TVで見る国民の代弁者、政治家達が討論している場面をよく見ました。まるで理屈の先行する現代の日本社会をシンボライズしているように思えました。

個人的には派兵については、難民、救済に関してのみ賛成です。深夜のTVで見たんですが、空白の千歳基地で年間何百回もスクランブルを行っているパイロット達が非番の日に宿舎で懇親会を催している場面がありました。彼らは「自衛隊員として最低限の身を守る装備をしてなら行きます。」と答えていました。おそらく戦地へ出向くことなどが無いような立場の者達が「行くなら丸腰、なんて笑っちゃうぜ」って思います。私が難民なら「何だかんだと言っている間に救助を出せよ」と、私は言いたい。戦争も終局に近づいてから、「自衛隊を使用せずに民間チャーター機で救助しましょう。」なんて、ゆうちょうに募金なんかしているのを見ると平和ボケのような気がします。善意は解かるけど、やっぱり自分も含めて、対岸の火事的な感じでしか受け止めてないなと思えました。メキシコ地震・コロンビア火山噴火等々、世界の批判を受けるからではなく、人間同志として動いてから考えることも必要な場合もあったはずです。福祉でも人間社会でも理屈が先行する日本社会って、不安に思えます。ちょっと体が右側に傾いてきそうで危ないですので、以上で終わります。

長崎 亀四郎 (7回)

Home Coming RYLAで始まった第13回RYLAセミナー。私は、今回もまた新たな感動がこみあげてきています。

本当に余島は不思議な所である。今回も新たな仲間や人生豊かなロータリアンに出会い、大きなインパクトを与えてくれた。“君たちよ、激しく変化している現代社会に対応して、21世紀をにになっていただきたい”とおっしゃられた。

私達は機敏に、しかも適格に世界状況を把握し、次の第一歩を踏みだせるか疑問である。

情報化社会の中で、全世界の社会情勢は、茶の間でキャッチすることが出来る。そして、私達がどうしなければならないかが、わかったとしても、なかなか一人では行動をおこすことは大変です。

まよっている私達に先生は、“一人では何も出来ないが、一人で始めなければ何も出来ない、その一人になろう”とおっしゃられた。

社会の片隅でも、私に出来ることをやらなければならないと、思いおこさせるRYLAであった。

このような機会を作っていたいただいたロータリアンや、キャビンで夜遅くまで語りあった仲間の皆さん、本当にありがとうございました。また、いつか、どこかで、お会い出来ることを願っています。

青木 每 祖 (7回)

今回のHome Coming RYLAに参加させて頂き、仲間と再び出会い、さらにRYLAの先輩、後輩との交流を持てたことに非常に感動しました。

私は県外へ就職し5年が立ちましたが、その間に非常に多くの大事なことを無くしかけていたと思えました。今日、余島を離れて地域にもどり、また新しい新鮮な気持ちで何かをとにかく実行していきたいです。

この様な機会を与えて下さった皆様に感謝の気持ちをこめて、有難うございました。

片井 祥 雲 (8回)

「感動、感謝、生きる喜び」

生命あるからこそ感動、感謝があり。感動、感謝があるからこそ生きる喜び、生命ある感激があるのである。この世に生まれたからには何か世の為、人の為に役立たせて頂くことができるはずです。そしてこの世の中に必要とされ

ているからこそ命、授けて頂いているのです。命ある喜び、生きる喜びを再確認し「天下の人の与に陰涼と作らん」、世の為、人の為にお役に立たせて頂くことの出来る人間とならせて頂けるよう、今回のライラを通して新たなる感動を得させて頂きました。

北岡 弘（8回）

5年ぶりのライラ、参加することができてよかった。（仕事の都合で、参加できなくなるかも知れない心配があったので。）

新しい人達と仲間意識の中での生活は、いつものことながら有意義である。日常の生活のなかで、青少年団体活動を続けていると、ついつい自分の活動だけしか見えなくなってくるので、ライラのような幅広い世代での仲間としての意見交換は自分を検証する点で大きな機会になる。感謝をしています。今回、パネラーを指名され、折角特別な機会を与えて頂いたのに、自分の意見を十分まとめて発展することができず残念であったし、申し訳けないことをしました。

しかし、どうかすると、くじけてしまいそうになる青少年活動に対して、情熱をかきたててくれた事は、大きな土産である。前回(第8回)の仲間での同窓会は、残念ながら開催に至ってないが、今回は、同窓会が開催されそうである。

大きな期待を持って地域に帰り活動することとする。

梶浦、今井両先生の講演。

私にとっては、とても印象に残るものとなりました。

有難うございました。

新川 芳満（8回）

第8回ライラに参加して、その後青少年活動に幅がひろがった気がしていた。普段の日々の中、そんな気持ちが次第に薄くなってきていたのでしょうか。今回、第13回に参加して、再び原点に戻ってきた気がしてきました。

講義はねむくて、半分聞いていなかったけれど、「私の人生観」と「21世紀

を担う青少年達へ」という講義は現在、社会の諸々の問題、ひいては青少年活動への考え方、とらえ方を問い直すという点で重要だと思った。

パネルディスカッション、バズセッションをする中で、明確な答えというものはわからなかったけれども、ぼんやりとしたものが、見えたように思います。時間というとはじめと終わりの区別がわかりにくいもので、ただなんとなく過ごしている時間はいっぱいあるけれど、ライラの3日間はあまりにも短いと思います。

ライラに参加できて感謝します。

大海智宣（第9回）

4年ぶりに余島に帰って来ました。当時と変わらぬ余島の姿、今回集まった人々の純粹さと努力に、自分のことを思い赤面の思いでした。

福祉の精神は心からという大切なことを学び、地域に帰って公共奉仕の仕事に役立てていきたいと思っています。

この企画をして下さったロータリアンの方々や、夜おそくまで語りあった友に感謝します。

笹山芳宏（9回）

お年寄りの方がいい顔をしていると思いました。ああゆうお年寄りになりたいと思いました。

いい友と出会えました。また、わかれて地方へ帰りますが、ライラの仲間が同じ空の下でがんばって生きているんだと思うと、力が湧いてくるような気がします。

みなさま、お健やかでおすごしてください。また会える日の近からんことを祈ります。

浦上良樹（9回）

久しぶりの余島、懐かしい思いがしました。仲間の体験的な発表に感動しました。私もしっかり頑張ろうと思います。

ライラ関係者の皆様、どうも有難うございました。

高家 徹（10回）

人間を洗濯してくれるところ余島

3年ぶりに余島に来て、たいへん勉強になりました。プログラムが決められている時間に進行していくのですが、なんとも自然に時間が流れ、誰が指図するともなく、話が始まり討論する。このセミナーに参加している人たちの、普段の行動が、伺いしれるような気がしました。

今井PGや梶浦PGの講義や、パネルディスカッションの話を聞くうち、自分は、何と視野が狭く、先のことまで考えていない人間かと感じます。目先のことだけに追われ、四苦八苦している。梶浦PGの言われた「ヘリコプター人間」になるためには、もっと人間を磨く必要があると思いました。

キャビンタイムでは、幅広い年齢層ではありましたが、みんなどこかにつながっているのではないかと錯覚をしてしまい、それな雰囲気では時間が流れていきました。片井祥雲さんの言われた「人生に無駄はない」、「清濁合わせもつ心境」という言葉を胸に秘め、余島を離れようと思います。

本当にみなさん、有難うございました。同じ時に来た仲間たちに、再び出会って、このセミナーに参加したことを報告してあげたいと思います。

このライラセミナーが、数多くの青少年たちのリーダーを育てるものとして、さらに発展することを願い、感想といたします。

清水 智（11回）

第13回RYLAセミナーに参加させていただいて、自分は第11回の際にこのセミナーに参加させていただき、こんなに早く、このようなチャンスがめぐっ

てきて、またこの余島にもどってくる事ができたことを、うれしく思っています。

第12回までで約1,000人の人が、このセミナーに参加したにもかかわらず、約1割の人しか返事が帰ってこなかった事を聞き、ちょっと残念です。

11回の時、自分はC班でしたが、これも3人しか顔を見る事ができなかったことも、さびしいです。

また、何年間か先に、このようなOBセミナーをやってもらいたいと思うし、この余島にチャンスがあれば、何度(?)でも来て、セミナーに参加したいです。

三谷章生 (11回)

第11回に参加して以来、2年ぶりに余島へやってきた。

第11回の際は学生が多く、学生時代に帰ったような、何かなつかしい気分にあつたことができた。彼らはここ1、2年の間に就職し、それぞれの最前線で活躍していることと思う。ただ、今回、同期生の参加が少なかったのが、やや残念である。

今回は、いろいろな職業の人々の貴重な体験、それぞれの人生観などを聞かせてもらい、心と命の洗濯をすることができた。

とかく閉鎖的になりがちな教職に就いている私にとっては、このような機会を2度も与えてくれたことに、大変感謝している。

また、いつの日かこの余島で、新たな出会いをしたいと思う。

松本和孝 (11回)

久々に帰ってきた余島にて、また新たなる出会いがありました。

特に塾年のおじさま達のパワーには押さればなしでした。なにしろ笑いあり、ペースあり、怒りあり、前回とは色々違ったRYLAでありました。

お世話になりましたロータリーの皆様、余島の皆様、そして特にB班の皆様、どうもありがとうございました。

都 築 省 司 (11回)

今回で2回のライラに参加できて良かったです。今回は2度目ということで、中味の濃い内容でした。

初日のキャビンタイムで、みんなが話をしているのを聞いていて、自分では何とも思っていない、ムダとか感謝ということばが出てきました。

感謝という意味は何ですか、ということを一人的がいい、感謝とはありがたい、うれしいことだと、自分は思いました。

安城寺の祥雲さんが言ったことで印象に残っているのは、自分がいまここにいるのは何故だ、ここに自分がいるのは、お父さん、お母さんがいるからだ。そしたら、そのお父さん、お母さんは何故いるのか、それは祖先の人がいたからいま自分がいるのだといわれて、そうか祖先の人がいて今の自分があるのだなぁと思いました。

物に対しても、誰かがその物を作ってくれて、デパートなどに売っているから、自分たちが不自由しないですむ、それも感謝ではないか、体が、手、足がそろって何も不自由していなかったら、それも感謝だと言われたと思います。

その話を聞いて、まだまだいい話をしてもらい、ものすごく自分にとってプラスになり、今回のセミナーに参加できて、初めの1日目でプラスになったと思います。

今回のセミナーでいろいろ聞いたりして、自分にプラスになるようなことを何でもいいから、このライラから学び、できるだけ自分のものにして帰り、社会で活用していきたいです。

下 野 博 康 (12回)

昨年(第12回)RYLAに参加した時は、銀波園から余島へ渡る船の中、不安で一杯でした。

しかし、今年、銀波園から余島を見た時、船に乗って余島が近づくにつれて、昨年、余島を離れた時の感動がよみがえると共に、我、古巣、余島に帰って来たという思いを強く持ちました。

私の好きな言葉「一人は皆のために、皆は一人のために」は、昨年RYLAに参加したことからはまった様に思います。RYLAの参加者は皆素晴らしい人ばかりで、その中に自分の身を置くことの幸せを感じています。

RYLAで得たことを伸ばしながら、自己を高め、少しでも“皆のために”を実践して行きたいと思う。

そして、また、何年か後に、我、心の古巣、余島で再会したいと、心より願っています。

矢野 裕太郎 (12回)

今回RYLAセミナーに出席させて頂きまして、一番強く感じましたことは、本音で語ろうとする人たちばかり(中には、そうでない人もいるかもしれないが)が、集まって一つのことに感じて、考え、そして自分で結果を出し、自分の意見として、他人と討論し合うと言うことでした。

今、私は学生です。毎日、毎日、学校へ通い、多くの人々と接しています。ところが人々と接するといっても、表面だけの付き合いが殆どのように感じられます。自分が心を開いても、相手はそれを受け入れようとせず、逆に相手が自分に心を開いてくれている、自分でその相手を、自分の心の中に入れていないようにしていることが多いように思われます。私は、まだ22年間しか生きてきておりませんので、この先、自分の中の寛容さ、他人の寛容さというものが大きくなっていくのではと期待はしていますが、今日ではこのように感じているのです。

ところが、このRYLAセミナーに参加した人達は、皆、本音で語ろうとし、真剣に他人の意見に耳を傾け、他人の語りかけに自分の本音を返してくれる。これだけ多くの人が集まって、殆どの人がそうであった。日常生活では皆がそうではないかもしれないが、余島に来れば、本当の自分を受け入れようとしてくれる人達が大勢いると皆が分かっているから、あれだけ自分の意見をぶつけることが出来るのだらうと思いました。

今年の7月から、私は香川医大ローターアクトクラブの会長として部員を

引っ張っていくわけですが、この研修会で見たり、聞いたり、考えたりしたことを、何かの岐路に立たされ、決断をせまられた時、これまでの自分の視野に比べて、ずっと広い視野で物事が考えられるのではないかと、また、そういう時にこそ、本当にRYLAセミナーで得たことが、生かされるのではないかとという気がします。

山崎孝弘（12回）

2泊3日のプログラムも、あとわずかで終わろうとしている。眠たい。とてつもなく眠たい。そして、何だか、とても早い気がする。

昨年に続いて2回目のライラ。旧友に再会することを楽しみに、また、素晴らしい出会いを期待して、なつかしい余島にやってきた。

旧交を暖め、新しい出会いに、感激しながら過ごした3日間。このライラは私に、新たな勇気を与えてくれた。

Coming Home RYLA。また近い日に、素敵な招待状が届けられることを期待しつつ、私に、こういった機会を与えて下さった多くの方々に感謝いたします。

ありがとうございました。

渡辺正広（12回）

第13回RYLAセミナーに参加して、今回のライラセミナーは、ホーム・カミング・ライラということで、激しく変化する社会の中で、今一度、私達の古巣、余島に戻り、仲間と共に旧交を温め、語り合い、友情の輪を明日へと広げるといふねらいであったが、今回のセミナーは、今までのセミナーと違って、現代社会で働いている人が多く、年齢の方も同年代、また年上の方が多く本当にいい勉強になりました。社会というものは常に変化していて、いろいろな方向に良く、悪く変化している。その変化というものがどう変化して、私達がどの様な方向に向いて、変化させていかななくては行けないか。その方向がこのライラセミナーにより、少しわかった様な気がします。直接私は福祉活動には参

加できてはいませんが、人間が生きていく上で、私は一番大切なものはパネルディスカッション、またキャビンタイムで話し合った上で感じたのは、基本的な事がやはり一番大切だなと感じました。

ほんの小さな事でもいいのですが、子供の頃感じてた素直な気持ちで、基本的な行動をする。その様にして、この変化する社会の中で、私はまず自らが基本的な行動をし頑張っていきたいと思います。

いろいろと目に見えないお世話になりまして、本当にありがとうございます。

金 野 健 (12回)

昨年の第12回RYLAセミナーに初めて参加して、そして、今回の第13回RYLAセミナーにも、参加させていただき、ありがとうございます。

前回同様、期待と不安の入り交じった気持ちで、この余島にやって来て、最初の1日目で、今回、初めて出会った人達と共に語り合い、共に夜を明かし、前回の時のように、初めて集まったことは思えない程、親しくなりました。

前回の時は、学生の方が結構いられましたが、今回は役所関係の方が結構おられ、自分の知らない事や、地域開発といいますが、町おこしのやり方など、いろいろ考えさせられました。

今回も、また、夜光虫を3日目の朝5時頃、海辺の砂浜で(去年は、水辺で)見て、また新しい、神秘的な自然の情景を改めて感動しました。

また、今度、RYLAセミナーだけでなく、観光旅行でも、一度来て見たいですね。

疋 田 稔 (12回)

私の場合は、第12回のRYLAのOBですので、一番記憶が新しい訳であります。

現状の変化といえますと、大学が4年生から5年生に進級したことだけです

ので、余り変化はありません。

実社会には、後2年の余裕があります。しかし、クラブなどでは、リーダーとなる機会が増えてまいりました。

RYLAの貴重な体験を生かさなければならぬのですが、なかなか現実はいまうまくいかず、力不足を痛感しております。この第13回のRYLAはAdvanced Course Seminarですので、私より当然先輩の方が多くおいでになりましたので、正直にいうと、初めは戸惑いを覚えました。昨日(3/30)になりますと、その固さも和らぎ、貴重な実社会からの意見をうかがい、感謝しております。

福祉の問題も色々あると思います。私が医師を目指しているということでの周囲の期待が大きいというのを改めて認識し、その責任を果たすことの難しさをかみしめております。

しかし、考えてるだけでは進歩はありませんので、このRYLAの精神を踏まえて、前身の一步を踏みだそう思っております。

では、再びどこかでお会いする日までごきげんよう。

来年の14回には、新しい大学の後輩が参加することになりますので、その節は宜しく願いいたします。

池田 宇次 (12回)

昨年、第12回に参加して、連続2年の参加となった。

今年は“同窓会”ということで、昨年に比べて年上の方が多く、僕は最年少に近い方だった。そのためか、やはりはじめのうち、少しとまどいがあった。しかし、そこはさすがRYLA修了者だけあって、すぐうちとけ、独特のあたたかさと。懐かしい匂いに包まれた。2晩のキャビンタイムが大いに盛り上がったことは言うまでもない。特に、昨年と異なり、社会人の方、既婚の方が多く、普段聞けない様々な話を耳にし、また、僕の話をもんな人たちが聞いて下さり、とても有意義だったと思う。例年より1泊少ないこともあって、とかく時間が足りず、せっかくの講義や討論が、今ひとつしっくりこないまま終わったのは残念だったが、それなりに得るものは多かった。特に印象的だった

のは、同じ班の方が「忙しいというのは、やる気のない言い訳にすぎない。みんなに会いたければ、何かを得たければ時間はつくれるものだ。」という言葉だった。僕には結構耳のいたい言葉だったが、改めて、人と会い、触れ合い、そこから何かを得ることの重要性、その貴重さを思わせるものだった。今後はすべてのチャンスに、どん欲にチャレンジしていこうと思う。

……この文章、31日、A.M.5:00ごろ書きましたので、乱文はお許しを。

小林 隆一 (12回)

今回のRYLAは昨年までと違い、RYLA修了者のアドバンスコースとなり、RYLAの良さを知っている人たちばかりでしたので、最初から、和気あいあいとしたムードで、大変盛り上がりました。

私は昨年(第12回)に参加させていただきましたが、昨年のD班は静かで、自分の意見を出すことに遠慮がちでしたが、今年は経験者ばかりで、雰囲気になさげなく、活発に意見を出すことができました。

RYLAのすばらしさは、年齢、社会的立場を越えて、同じ土台で意見をぶつけ会い、様々な考え方を吸収できることだと思います。そして、また来てよかったと思える数少ない場のうちのひとつではないでしょうか。

最後に、2度もRYLAに参加させていただいたことを、皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

書き人知らず

印象に残り、自分の心にとめ、実践して行きたい言葉

- 清濁合わせ持つ
- qualitey of lifeを高める。
- わしがやらねば誰がやる、今やらねばいつ出来る。
- 一人では何も出来ないが、一人で始めなければ何も出来ない。
- RYLAで得た経験を自分の家庭に還元する。

charity begins at home

○ homeの原語

h:hamony o:order m:mutual e:effort

○ shapping for better world

○ ヘリコプター人間

○ 何ごとも天命

○ 精神統一が健康を作る

RYLAは精神的な心を高揚する事も目的としている。

○ この余島での2泊3日の生活が、実り多きものであった事を、感謝したい
と思います。

倉本洋子（1回）

今回のライラに参加させていただいて、私自身、一番に感じたことは、まだこんなに一生懸命に考えて、しっかりした考えを持っておられる方がたくさんいらっしゃるということに、子を持つ親として安心を覚えます。

今の社会は目に見えるものにとらわれ、もっと人間として、根底に流れる大切なものを忘れてしまっていると常々思っていました。確かに、我が家のまわりにも一人っ子が、この頃どうして一人っ子さんが多いのかしら、と感じていましたし、環境問題においても、自分の家の中が奇麗になることだけを考え、又、テレビのCM通りにどんどん便利なものを使って捨てる。どうして、合成洗剤が環境によくないことが、はっきりわかっているのに、石鹸のCMは出ない。石鹸と合成洗剤の違いを知らない人もたくさんいるのです。

子供を持っていつも思います。この子達が大きくなる頃は、地球はどうなっているのかしら、危機感を持ちます。

私は、おじいちゃん、おばあちゃんのいる家庭で育ちました。

小さい頃からご仏壇に手を合わせ、『父からは、おじいちゃん、おばあちゃん、そのまたおじいちゃん、おばあちゃん、そのまた——がいたから、今、お前がいるんだよ。兄弟は皆仲良く、戦争している国があるけれど、家中が仲

良くしていれば、国と国との戦いもなくなるんだよ、ご飯をいただくときも、今、お前が口にできるのは、大勢の人の力があってからこそなんだよ』と言われてきました。

私は子供を持って、どうしてこの子を育てよう、どんな人間になってくれるか、親として出来ることは、どんなことが大切なんだろうと、考えました。

長女が3歳8ヶ月のころです。私のお友達が胃ガンにかかったのです。同じ年の男の子が一人います。手術のあと、私たち友達はただ祈ることのみで、千羽鶴を祈りました。夏の夜、主人と二人で鶴を折っていると、長女が「どうして鶴さんを折るの」と聞きました。私は「きよのぶ君のママがご病気なの。鶴さんは空をとべるでしょ。だから鶴さんに神様のところへ行ってもらって、どうかきよのぶ君のママを元気にして下さいって、お願いするためよ」と話しました。その夏の終わり、大山へ家族で旅行した時、大山寺をお参りの際、長女が「ママ、何てお祈りするの」。その時私は「そうね、これからも欣奈が元気で大きくなりますようにってお祈りしましょ」と言いました。すると欣奈は「ママ、違うでしょ、きよのぶ君のママが元気になりますようにでしょ」。それを聞いた時、胸がいっぱいになりました。私が小さい時に教えられたこと、いつも思っていたことが、欣奈に小さいながらも伝わっていたんだなあと、嬉しさと、又、何て子供って純粋なんだろう、こうして手を合わせる時に、私はとっさに子供のことしか頭になかったことの恥ずかしさとで、泣きながらお寺を降りてきました。

この時、私は子供には、宗教がとても大切に思えました。ですから、幼稚園は宗教色のあるところと決めて、幸い近くにキリスト教会の中にある幼稚園がありましたので、2年間通うことにしました。普通の幼稚園に比べると元気があり、歌も、童謡よりも讚美歌の方が多いい位です。この春、卒園しましたが、小さい子供の心の中に、大切なものが与えられたように思います。

今の社会、たくさん問題、不安がいっぱいあります。福祉やお年寄りに関すること、すべてにおいて、大人になってから考えがかわることもありましょ。うが、その人の中にある根本的なものは、やはり小さい頃に出会えたものが何であったかによって決まるのではないのでしょうか。

今回、たくさんの方から、とても良いお話を伺いました。自分の信念を増す増すしっかりと持って、生きていかななくてはと、心新たな思いでいっぱいです。

皆様、本当にありがとうございました。又、子連れで、ご迷惑をおかけしたと思いますが、ありがとうございました。

兵 頭 啓 子 (1・2回)

なつかしい余島で、なつかしい人たちと再会できてとても嬉しい。また、新しい人たちと出会えてよかった。

3人の子供たちを残して、1人で参加させてくれた主人、両親に感謝している。

専業主婦で、子供会の行事に参加することしか出来ない私にとって、何ができるか。

まず、家庭の中から始めようと思う。

子供に「外に落ちているゴミを見つけたら拾いなさい。お年寄りや体の不自由な人には、席をゆずりなさい」と教える前に、まず、私自身がいつでも実行できる人間にならなければならない。そうすれば、子供も奉仕の心を持ってくれるようになるのではないだろうかと思う。

思いやりのある人間になってほしいと思えば、私がもっと家族に対して、やさしい気持ちになり、子供の気持ちをわかってやれる親にならなければいけない。今まで、しかることばかりだったので、反省している。

子は親の鏡だということをしっかり頭に入れておきたい。

そして、毎日、毎日をもっと大切に生きていこうと思っている。

このすばらしい3日間を与えて下さり、感謝している。

本当に、ありがとうございました。

橋本文子（2回）

第3回ライラセミナーの講義録を片手に、この余島に帰ってきた。

講義録はとじ目がはずれ、ボロボロになっていたが、私にとっては大切な思い出であり、愛着がある。おおげさでなく、私の人生の転換期となる出会いがこのセミナーであった。自分自身、本当の気持ちがかめないうまま、恋愛問題に右往左往していた時、ある人から「もっと素直に、理屈でない自分の感情に気づき、そしてまず、自分自身を好きになりなさい。」ということを教えてもらった。

私は人前でホロボロと泣き、そして何ともいえない、清々しい気持ちで余島から離れた。

あれから10年、再びセミナーのお誘いを受けた時、本当に嬉しくて、「どうしても行きたい、私の心に新たなエネルギーの補給をしたい。」と参加を決意した。

家庭と職業の両立という聞こえはいいが、毎日、心の余裕がなく、自分の時間を切り売りしている感覚がつきまとったが、じっくり自分を見つめ直す作業をしてみたいと思っていた。

今回の感想は、自分の人生観を変えてしまうほどの人との出会いはなかったが、「自分の人生は自分で選び取ってゆかなければならない。自分で責任を負ってゆく人生。」ということに改めて感じたことである。一人一人が、それぞれの人生を大事に生きてゆくプロセスにおいて、ほんの一瞬ではあるが、ライラの仲間（あえて仲間と呼びたい）と過ごせたことは、本当にうれしい。

今回の企画をしてくださったすべての人々に、心から感謝いたします。ありがとうございました。

曾根 さゆり（6回）

「来てよかった」と今つくづく思います。

皆様のあたたかい心に、自分は本当に縁あって、ライラの一員に入れて頂いたんだなぁと、感謝の気持ちでこの文章を書いています。

「生かされている者」として、何かを、自分がいま現在出来る事柄から、一歩、足を進めてみよう。

新たな道が少し見えたような気持ちです。ありがとうございました。

清水教子（6回）

久しぶりに訪れた余島。6回の際には、不安な気持ちでいっぱい、初めて参加、10回の記念大会には、懐かしい人達と再会、そして今回で3回目になりますが、余島は変わりなく、私達を迎えてくれました。

“ボランティア”というと、する側、される側という関係になってしまいがちですが、どこか違うと思っていたところ、同じ考えを持つ人たちに出会い、そういう立場を無くし、同じ仲間として「遊び」を通して、色々な事に挑戦していこうと“フリーウェイ”というグループを作りました。5周年を迎え、メンバーの数も増え、もう一度、初めの頃の気持ちを思い出してみようとしていたこの時期に、余島を訪れることができたのは、とても良いタイミングでした。

ボランティア・福祉を考える時、一番大切なのは、常に他人の事を思いやる心なんだということ、改めて心に刻み込みました。

核家族、受験戦争等で、最近心は病んだ人がとても多い様に感じます。困っている人を見かけたら、自然に手をさしのべられるような、又、ハンディをもった人が、「手を貸して下さい。」と気軽に声をかけられるような、社会になってほしいと思います。

初めから、大きなことをしてやろうと考えると、息切れしてしまうことになるので、身近かなところにある小さいことから、一つづつでも実行していきたいと思っています。

以前にライラに参加した時から、それぞれ地域が経験を積んで来た人たちが集まっていたわけですから、内容の濃い話もでき、充実した3日間でした。

地域に帰って壁にぶかった時、今日の事を思いだして、頑張っていきたいと思っています。

春雨降る、余島は、例年になく、肌寒く、
桜の花も、私達をむかえることなく、過ぎてしまったセミナーでしたが、
今回も又、私達に、色々な事を教え、導いて下さったように、思います。
ライラを、色にとたとえると、光輝く虹色、
物に、たとえると、宝石箱と、思っている私は、2日目にして、今迄とちがった、
ライラの色を見、
今回、なぜか、暗闇の中を、模索しつづけている、自分に気がつきました。
それは、バズセッションでの、あるロータリアンの方からの、一言で、始まったのです。
福祉医療に、従事する、私の職業から、考えると、
想像を絶する、発言でした。
私は、“生命について” これほど尊い物はないと、確信し、
生きることの、素晴らしさ、人が人を助けることの、素晴らしさ。
その中で、日々、我々は、生活しているのだなぁと、常に、感動しております。
ですから、私は、その人に、声を大にして、叫びたい。
私達は、命芽ばえたその時から、老いて死に至るまで、
人として、立派に、生きなければ、いけないんだ。
命のつづく限り、生きなければ、いけないんだ、と。
苦しい時、悲しい時、私達は、共に助け合って、生きなければ、いけないんだと。
ライラは、福祉について、私に自己を、みつめさせ、
これからの人生、一人でも多くの人の役に立ち、生きていかなければと、
教えてくれた。
私は、希望で、胸が、一杯です。
3日間、共に、語り合った、ロータリアンの人達に、カウンセラーの人達に、
Aグループの友に、乾杯、そして、ありがとう。
ライラで、結んだ、深い絆を、土産に。

ライラよ、ありがとう。

余島よ、さようなら。

山田祥千子（9回）

「客観的に、現在社会が、どのような社会なのかというのを、まず知らなければならぬ。」確かに、知るということの必要性は感じています。それを知って次に何をするか、というのは難しいことです。事実、自分自身何をしているのかと問われても、答えはありません。なぜなら、自信がないからであり、目的意識が、ぼんやりとしているからだと思います。

前回RYLAに参加させていただいた時は、まだ私は学生でした。学生というのは自由なものです。その頃のことをふり変えると、勝手気ままなことをしていたことを痛感します。あの頃は無我夢中でした。何も恐くなかったし、常に何かを追い求めていた。ただあの頃は無責任でした。失敗は若いからということで許されている部分があり、それに自分も甘えていたようです。

あれから、6年がすぎました。今の私は、仕事を持つようになりました。5時になれば退社できる。そんな会社ではありませんので、できることはだんだんせぼめられていきました。土・日とて休みではないので、かつてほど自由にパワフルにというのはできなくなっています。

そんな私の、今の考え方は、「結果につながることを期待したい。」ということです。色々な取り組みはやっていきたいとは思っています。でも、何かを求めたりはしない。ただ「心」を求めるだけでいます。そうすると、自分だって、あきらめたり、くじけたりすることはなくなってくるのです。仕事と様々な活動を両立していくことも可能になっていくように思います。この考え方は、消極的なものかもしれないけれども、何もしないよりはよいと思うのです。

そして、もう一つ必要に思っていることは、「“自分と同じ人間はいない”ことを理解すること。」です。他人を見つめて、常に学んでいたいと思います。

一人でいては知らないままのことが、たくさんあります。一人でいては、広がっていくこともありません。だから、こういう場で多くのことを知っていきたく思います。

今回のRYLAの参加者が、同じ話を聞き、同じテーマでものを考えて、この2泊3日をすごしました。

しかし、このセミナーの消化の方法は参加者の人数分あると思います。年・性・仕事・生活が異なる人とが集まっていたのですから、当然です。又、何年かたって、今回のセミナーの消化の方法を、みんなから聞くことができればいいなあーと思います。その時には、私も又、変わっているだろうと思います。自分なりに無理をしないで、頑張っていきたいと思っています。

大島美穂（10回）

3年ぶりに余島にもどり、又もや色々な友達に出会うことができました。

本当に、この2泊3日の思い出は、私の中でとても大切な役割をしていくことになるのを信じています。

バズセッションの時に、深川先生がおっしゃったのですが、「ボランティア」という言葉にこだわるより、心の中の問題の方が大切なのではないかと、私もそれを聞いて、ホッとするというか、安心と決心をしました。

ボランティア活動をしている……ということより、日頃の心がまえが本当に大切だと思います。友達と待ち合わせて、服もきれいに着飾って、待ち合わせの場所にむかっている時、もし、手伝ってあげた方がいいような問題にぶつかったら、私は、時間をさいて、服を汚すかもしれないけれど、心からの支えをしてあげることができるだろうか？

これからは、その心のボランティアというものを考え、日々、心に留めておきたいと思います。

B班の中には、様々な職種、価値感、経験をもつ方々がいて、私は3年前と同様、かなりのショックを受けました。

本当にB班の16人の顔は、忘れたくありません。

最後になりましたが、ロータリアンの方々、カウンセラーの方々、又、余島のスタッフの皆様方に、厚く御礼申し上げます。

(B班は、1日目A.M.3:00まで、2日目A.M.4:00までがんばりました。)

小島 之子 (10回)

人間は、一生のうちに、どれくらい本を読むことができるのでしょうか。

ここRYLAのセミナーでは、みんな一人一人が、私にとっての家庭教師でした。

「この人は、何を語ろうとしているのか」

「この人は、今から何を私に話してくれるのか」

まず、目を見て、最初にその口が開かれるのを、胸をドキドキさせながら、どの人に対しても、そんな気持ちをもって、話を聞かせて頂きました。

本では学べないことや、最新情報を、じかに聞くことができました。学ぶことがいっぱいありました。有難うございます。

やっぱり私は余島が大好きです!!

岩 国 志 保 (11回)

今回のRYLAは2泊3日と、これまでより1日短いので、当然かもしれませんが、非常に早く時間が過ぎてしまいました。それだけ多くの充実したひとときを持てたのだと確信しています。

以前、参加したときの感動が忘れられず、今回もう一度、余島に戻って参りましたが、「以前学んだことが、生かしきれているか。」と自問してみると、まだまだ未熟であることを痛感します。頭では分かっている、行動に移すことができず、どうしたら最善の道を歩むことができるのだろうかと思ひ、歯がゆい思いを感じていました。そしてまた、そんな自分に対する解決(?)の糸口として、「私は、まだ学生の身で、色々学んで、成長していかなければならないから、人のために役立つのは、これからの先のことだ。」という甘えた意識を

抱いていた事実気付かされました。

このように、自分の至らなさがたまらなく思われていたときに、今回のセミナーで、新たな方向のあり方を見出す機会に触れることができ、本当に良かったと感謝しています。

「頭で分かっているけど、どう行動してよいか分からない。」と言った私に、「自分が体験して感じたことを、人に話したい、伝えたいと思う気持ちでいれば、相手に何かを与えようとして無理することはない。」と答えてくれた、同室の曾根さん、亀井さん。

「行動しようしようと思ってるうちは、本当じゃない、自然に動けるようになってこそ、本当じゃないかしら。」と教えてくれた北代さん。

こんな会話のできたことが、私にとって何よりの収穫でした。

梶浦、今井両先生の講話を、ただ聞くだけでなく、それぞれの感想をぶつけ合い、様々な価値観や人間性に触れることができる。何かをぶつければ、必ず返してくれる人々がいる。このことが、私の大きな支えとなっています。

皆さん、ありがとうございました。

これからも、よろしく願います。

向井夕可里（11回）

私は、第11回の時に参加して、また今回も、このセミナーに参加し、この余島に帰って来ました。

前の時の仲間とも、また出会えて、とてもなつかしく、その時のことが、昨日のように思い出されました。

カウンセラーの菊澤先生、嘉納先生の顔を見て、前の時と同じで、ぜんぜんお変わらない姿に、とてもうれしく思いました。

すぐ班の人とも、うちとけられて、2日間とも朝まで自己紹介や、今、自分も持っている悩みなど、お互い出し合いました。

さすがに、今まで振り返ってのセミナーであるため、中味の濃い話で、私ははたしてどうだろうか、と考えさせられました。

講義やパネルディスカッションを聞く中で、「一人では出来ないが、一人が始めなければ何も出来ない、その一人になろう。」といわれて、ちょっとしたことからでもいい、人の為にならう。そうすることによって、自分自身の心もみがけ、視野も広がっていくということを、また新たに感じました。

私は、特別擁護老人ホームの厨房で働いています。そんな中でも私に出来ることがあれば、進んでやっていこうと思っています。

また、私は、4月29日、結婚することになりました。

相手の人も、この13回のライラセミナーに参加しました。

いろんな話の中で、家庭からということもいわれたので、その人と一緒にやっていきたいと思います。

これからも、こういうセミナー続けていって下さい。

本当に有難うございました。

森 佳代子(12回)

私は、昨年、このセミナーに参加しました。その後、人生観が変わり、私の人生の大きな糧となりました。

ですから、今回のセミナーを楽しみにしていたのですが、皆さんより、1日早く、帰ることとなり、とても悲しいです。

とても短い時間でしたが、有意義にすごせました。さまざまな人達に出会い、お話をきけました。しかし、自分自身の体験談や意見は、全く言えませんでした。

これからは、いろんなことに挑戦し、体験して、人間として幅を広げたいです。

ところで、私は、春から社会人一年生となります。ライラには、不安で一杯の複雑な気持ちのまま参加しました。しかし、祥雲さんや松本さんのお話を聞き、気持ちが楽になりました。「人生は考え方一つ。」「人生無駄ということはない。」とても心強い言葉です。

これからは、こどもの目線で考え、自分の時間でなく、子供の時間にあわせ

て、気長に頑張っていくつもりです。

そして、こどもが学校を好きになり、楽しい学校生活をおくれるように、誠心、誠意つくりだしたいです。

それが、私を今まで育ててくれた両親や地域の人々、総ての人々への恩返しだと思います。

今日、私達が、かかえている問題は、環境問題をはじめとして、万とあります。そんな現代社会のなかで、ライラで学んだ心のあり方を忘れず、新鮮な気持ちのまま、養護教諭として、頑張っていきたいです。

山下京子 (12回)

今、私は、31日の午前中の講義の途中でぬけなくてはなりません。

皆さんの話を、深川先生のコメントを本当に最後まで聞きたい。それを途中で出なくてはならないなんて悲しいです。

ですから、わたしは、ギリギリに出ます。その為に銀波園から土庄まで歩いて帰ることを選択しました。

今日は日曜日で、タクシーがきてもらえないそうです。もっと早くここを出れば、バスに乗れるのですが、ギリギリまでいて、皆と一緒にいたい。講義が聞きたい。だから、30分、大きな荷物をもって、ハイヒールをはいて、土庄まで行きます。

こういう選択は、普段の自分からは考えられない事です。

福祉という仕事柄、綺麗な話、立派な話、一杯耳にします。

でも、実際に実行するまでは、その人の事、その人の話は信じません。いつもだまされないだろうかと、身構えて話を聞いてしまいます。温かい人柄にみせかけて、実は心は冷たくひえています。

だから、こういう選択をした自分に、内心ビックリしています。そしてうれしいです。

久しぶりに、心の中に暖かいもので一杯につまっています。涙がこぼれそうです。

どなたのお話で、具体的にこれからの自分の生き方に、指針をあたえられたとは言えませんが、人に対して暖かい心持ち、人が愛しいという気持ちを思いおこさせて下さった事は、きっと仕事の上でも、私生活でも影響をあたえて下さると思います。

それと、権力や富や、力を持っている人に対して、こちらの勝手な思い込みで、あやまった偏見がありました。本当にロータリーの皆さんのお人柄にふれて、目が洗われたような思いがします。

ただ、ロータリーの皆様は影響力が大きいだけに、善き事をなされれば、大きく実をむすびます。しかし反面、あやまった、いえ、その人なりに定まって人の思いが理解できない方がいらっしやると、その影響を受け、不幸になる人も多勢でてしまいます。

きれい事でもいい、王道が何か。正義とは何か。倫理感を持ち、他の人の話にも耳をかたむけることの出来て、度量の深い、清濁合わせのんだ方が、ロータリアンであってほしいと願います。

RYLAセミナー運営委員会の皆様、本当に素晴らしい時を、機会、出会いを与えて下さりまして、ありがとうございました。

亀井美奈子（12回）

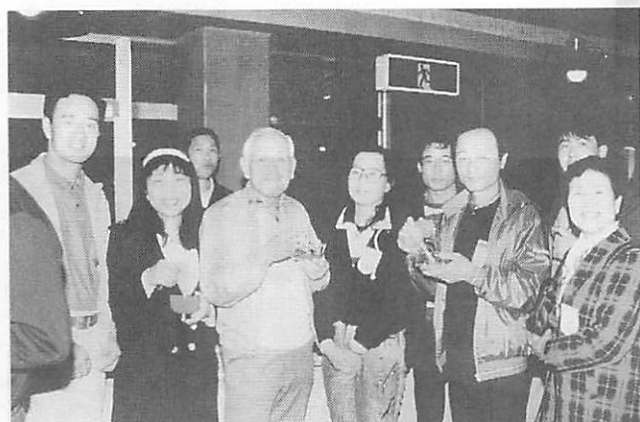
第13回RYLAセミナーは、Home Coming RYLA ということで、他の参加者の方々は、以前に参加された経験がおありだそうですが、私の場合、例外的で、今回、初めて参加させて頂きました。

ちょうどたまたま、今回、出席できたことを非常にラッキーだと思います。というのは、普段の学生生活では、接することの出来ない人々や、めったに聞けない貴重な話を聞くことができたからです。

2泊3日の間、とても充実した、密度の濃い時を過ごせたことを、感謝しています。また、いつか参加できる機会があればいいと思います。

将来、人との触れ合いが大切である、医者という職業につくことになると思いますが、“心”を大切に考えていきたいと考えています。

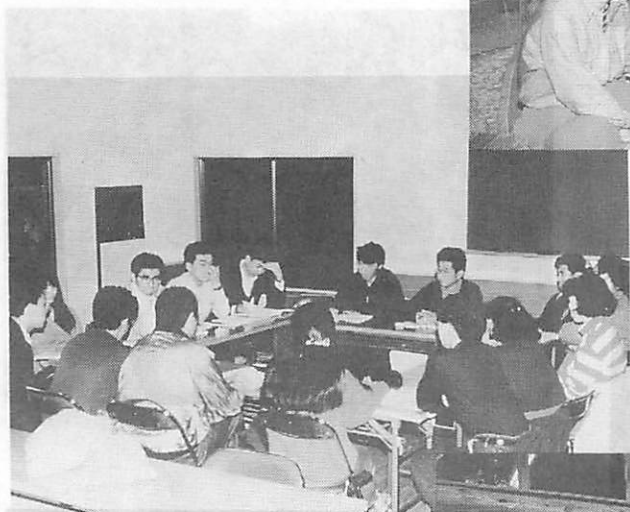
生活の断片



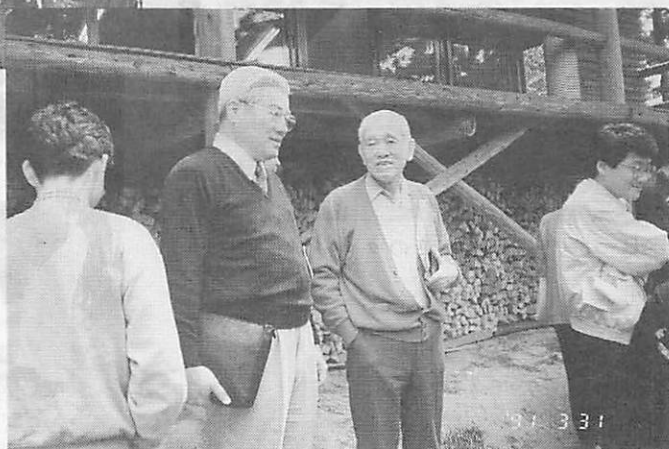
オープニングパーティ



楽しいキャビンタイム

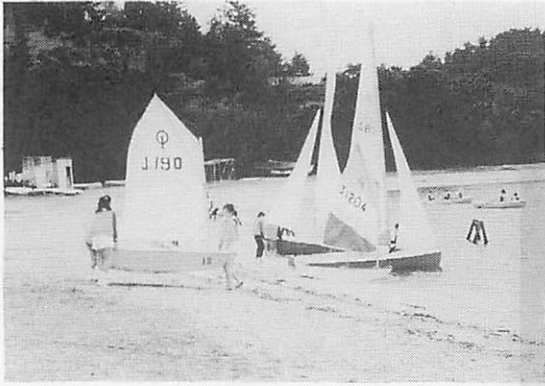


真剣に……バズセッション



講義に先生方もスタンバイ

主の週刊



レクリエーション……さあ ヨット



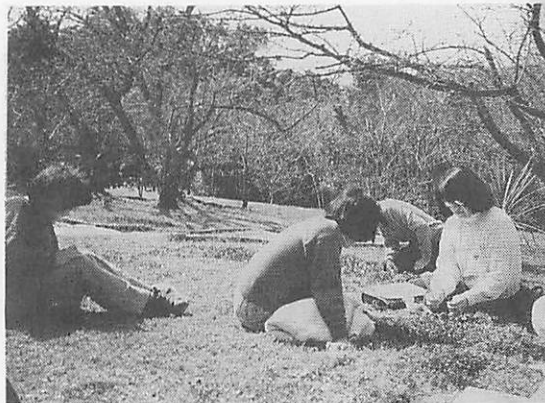
レクリエーション……この手つき!



頂きます……RYLA二世?



語らい



見つけた! 四つ葉のクローバー



記念植樹

あ と が き

RYLA委員長 古 谷 武 雄
(神戸西)

「RYLA 修了者のリユニオン」これが今回の特徴で、一つの区切りの意味を持ったセミナーであったが、終了後の感想は一言でいうと深川ガバナーの情熱と両地区ロータリークラブのRYLAにかけてきた思いが見事に実ったセミナーであったということだろう。

過去12年間に亘り、地域社会を担うリーダーの養成という課題をロータリークラブの大切な奉仕活動であり、責任だと位置付け、その信念からRYLAをこよなく愛してこられた先輩ロータリアン（それは、たとえば今井、梶浦、執行などのパストガバナーであり、また、その年々の運営にたずさわってこられた委員の皆さん）が心を込めて蒔いてこられた種が年月を経て豊かな実を結んでいたという、そのことが証明されたのが今回の第13回セミナーであったように思う。

事務局を担当して一番心配したのは、過去の参加者がはたして余島に帰ってきてくれるだろうかということであったが、それも単なる危惧に終わったし、所用で参加できない人達からもたくさんメッセージが寄せられた。その多くがRYLAを貴重な経験として今も大切にしているという内容のものであった。

わずか3泊4日という短いRYLAではあるが、その経験が経験者の心に少なからぬインパクトを与え、いまなお、それぞれの分野で指導者として活躍をつづけるのに一つの力となっているという事実はRYLA 12年間の歴史の重みを単的に示しているのではないだろうか。

今回の第13回RYLAはもちろん、成功裡に終わった。受講生、カウンセラー、そしてロータリアンが旧交を温め、互いの人生を分かち合い、共に学びそして、明日への友情の和を広げるすばらしい出会いの場となった。このことを終わりに当り、感謝と共に喜びたい。また、このために多大のご協力を頂いた両地区、各ロータリークラブに心からのお礼を申し上げたい。

1991年3月29日～31日

主 催 R. I. 第267地区
R. I. 第268地区

RYLA運営委員会

開催地 西日本青少年野外活動センター
(神戸YMCA余島センター)